



春陽堂藏版

註頭
國譯本草綱目
第十一冊

日-4146

Li, Shih-chen.



起

五

茶

定

茶

定

卷

定

卷

定

条

定

顧

聞

酒

校註

原

暴

時

✻

尊

料

庚

矢

孺

亭

國

田

信

勝

五

五

牧

插

四



村

集

日

井

十

幸

時

汪

明

R127.1
A82
L6933 p
J5a
V.11
1929-34
O.C.

四.....綠毛龜

散入兒

〇.....瑤瑤

龜

六.....鱷龜

三.....秦龜

一.....水龜

龜類

二.....介部第四十五卷目錄

本草綱目介部第四十五卷

目次

頭註國譯本草綱目 第十冊

通鑑綱目卷一百一十五

擔羅	101
螺	101
蛤蜊(粉)	101
文蛤	101
海蛤	101
石決明	101
真珠	101
蜆	101
蠃雌	101
馬刀	101
蚌	101
牡蠣	101
蚌類	101
介部第四十六卷目録	1

本草綱目介部第四十六卷

蟹	四六
鼈	四四
龜	四四
珠鼈	四三
朱鼈	四三
能鼈	四一
納鼈	四一
鼈	三九
黃鼈	三九
鼈	三七
旋鼈	三六
鸚鼈	三六
瘳鼈	三六

一五.....騾

一四九.....鴉

一四八.....陽鳥

鵲

一四七.....鷓鴣

一四四.....鸛

一四一.....鸛

水禽類

三一.....禽部第四十七卷目錄

本草綱目禽部第四十七卷

一三九.....郎君子

一三八.....海燕

鰐

一三一.....海月

五	寄居蟲
四	麥蠃
三	蝸蠃
二	田蠃
一	甲煎
二	海蠃(甲香)
三	淡菜
四	石蚶(龜脚)
五	珂
六	柴貝
七	貝子
八	車渠
九	魁蛤(瓦龍子)
十	車螯
十一	車螯

白鷺.....四

鷓鴣.....三

鷓鴣(雞).....三

鷓鴣(山雞).....七

鷓鴣.....一

鷓鴣.....一〇

原禽類

禽部第四十八卷目錄.....一

本草綱目第四十八卷

蚊母鳥.....六

翡翠

魚狗.....六

鷓鴣.....九

鷓鴣.....八

七	鷗
六	鷗
五	鷗
四	鷗
三	鷗
二	鷗
一	鷗
二	鷗
三	鷗
四	鷗
五	鷗
六	鷗
七	鷗
八	鷗
九	鷗
十	鷗
十一	鷗
十二	鷗
十三	鷗
十四	鷗
十五	鷗
十六	鷗
十七	鷗
十八	鷗
十九	鷗
二十	鷗
二十一	鷗
二十二	鷗
二十三	鷗
二十四	鷗
二十五	鷗
二十六	鷗
二十七	鷗
二十八	鷗
二十九	鷗
三十	鷗
三十一	鷗
三十二	鷗
三十三	鷗
三十四	鷗
三十五	鷗
三十六	鷗
三十七	鷗
三十八	鷗
三十九	鷗
四十	鷗
四十一	鷗
四十二	鷗
四十三	鷗
四十四	鷗
四十五	鷗
四十六	鷗
四十七	鷗
四十八	鷗
四十九	鷗
五十	鷗
五十一	鷗
五十二	鷗
五十三	鷗
五十四	鷗
五十五	鷗
五十六	鷗
五十七	鷗
五十八	鷗
五十九	鷗
六十	鷗
六十一	鷗
六十二	鷗
六十三	鷗
六十四	鷗
六十五	鷗
六十六	鷗
六十七	鷗
六十八	鷗
六十九	鷗
七十	鷗
七十一	鷗
七十二	鷗
七十三	鷗
七十四	鷗
七十五	鷗
七十六	鷗
七十七	鷗
七十八	鷗
七十九	鷗
八十	鷗
八十一	鷗
八十二	鷗
八十三	鷗
八十四	鷗
八十五	鷗
八十六	鷗
八十七	鷗
八十八	鷗
八十九	鷗
九十	鷗
九十一	鷗
九十二	鷗
九十三	鷗
九十四	鷗
九十五	鷗
九十六	鷗
九十七	鷗
九十八	鷗
九十九	鷗
一百	鷗

三

..... (露筋) 冒雪巧

卷之四

卷一

笑厥雀

..... 112

英 國 郵 政 總 局 啟

..... 飛了

[illegible]

諸鳥有毒..... 1103

鬼車鳥..... 002

木客鳥
蘭足鳥

治鳥..... 七九三

姑獲鳥..... 六九三

鳩..... 四九三

鵲..... 〇九三

鵲鵲..... 六八三

鵲..... 三八三

鵲(魚)(鷹)..... 一八三

鵲..... 九七三

鷹..... 五七三

駝鳥..... 三七一

孔雀..... 〇七三

鳳.....風

山禽類

秦丁鳥鳳

鸚鵡.....鸚鵡

杜鵑.....杜鵑

鶻鳴.....鶻鳴

山鵲.....山鵲

鵲.....鵲

烏鴉.....烏鴉

慈鳥.....慈鳥

啄木鳥.....啄木鳥

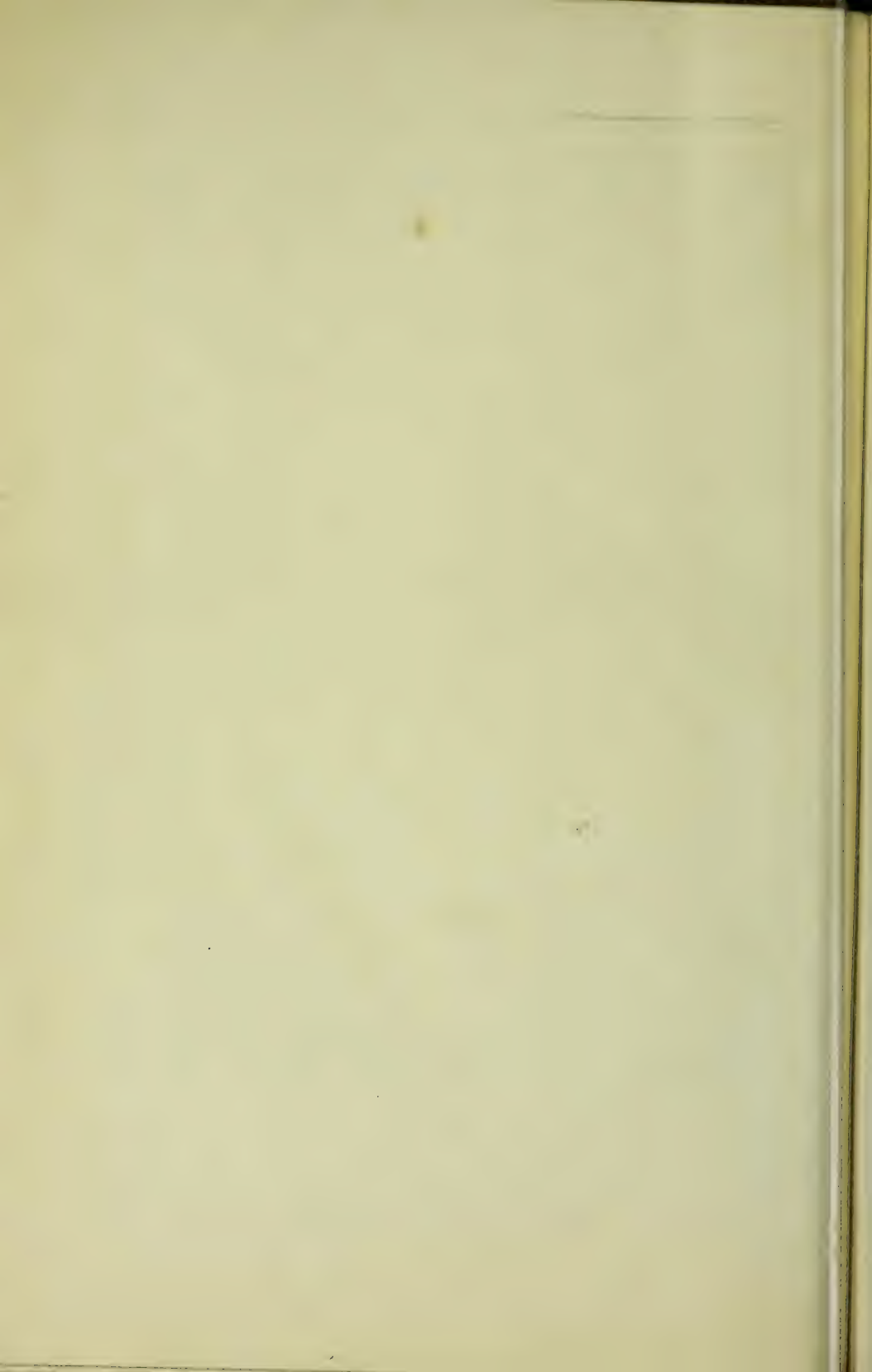
鸚.....鸚

鸚.....鸚

鸚.....鸚

百.....百

本草綱目介部第四十五卷



圖經本草一 種 宋の蘇頌。 本草綱目六種 明の李時珍。

開寶本草一種
宋の馬志。
嘉祐本草八種
宋の寧瑪錫。

海藥本草二種 唐の李珣。蜀本草一種 蜀の韓保昇。

唐本草。唐の蘇恭。○
本草拾遺十種。唐の陳藏器。○

神農本草經八種
梁の陶弘景註。
名醫別錄五種
梁の陶弘景註。

を分て凡て四十六種を龍圖、蚌圖の二分類に分類した。

宋の本草にはいづれも鱈魚部中に混入されてあつたか、本書は介部としててこれ

の供に^{供せん}も^も廢^廢て^てられ^{られ}な^なか^かつ^つた^たの^ので^であ^ある^る。泥^泥や^や生^生た^た薬^薬品^品に^に充^充て^てら^らる^るに^に於^於て^てや^や。

— 音は池(ち)——を共し、以て人(ひと)に授く」とあるのだから、介物(まがもの)はやはり聖世(せいせい)

秋は 鱒を獻じ、
祭記には 鱒(三)
音は 排(入) 藏(四)
音は 鱒(入) 藏(四)
音は 鱒(入) 藏(四)

たゝるものだ。周官には「**釐人**は（一）互物を取り、時を以て三釐す。春は鷹、夏は鵙、秋は鸇、冬は鶡、雉を獻じ、

李時珍曰、く、介蠱は二百六十六、あつてて介蠱をその長としてある。蠱は蓋し介蠱の長をいふ。

本草綱目介部目錄第四十五卷



右附方 九十四新

景龍

蟹水

龍目

珠龍

宋龍

龍目

龍目

龍目

寶龍

龍目

龍目

龍目

日龍

龍目

龍目

龍目

龍目

龍目

龍目

龍目

介の龍類七十七種

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

明龍

附註

本草空室種の明龍

三 運、或ハ運カ。

二 地。炎ノ地ハ燃エ

集解

時珍曰

を以てし、雌雄と交尾するが、蛇と交接する。或は、大腰にしして雄なともい
 卵を生にして情思を以て子を抱養する。離れておぬが守護するのだ。その呼吸は耳
 外に在り、肉が内にあり、腸は背に接屬して能く作脈に運り、肩廣く、腰大く、骨が
 るは地に法つてあつて、陰に背き、頭は蛇の如く、頸は龍の如く、骨が
 離に象り、その神は坎に在り、上に隆くして文あるは天に法り、下の平にして理あ
 集解 時珍曰く、甲蟲は三百六十六つて、神がその長である。蛇は、形は
 總稱して水龜なる下に諸種の龜を綜括した。
 離いので、現に一般には、ただ水中の普通の龜を取つて藥に入れる。故に此には
 つてある。而るに諸家の註に始めて神龜を用ひ出すが、しかし神は得
 久しきものを靈龜としてあるが、誤である。本經では、龜甲をただ水中のものと言
 後世では、山、水、火の差異を區別せずして、通じて小なるものを神とし、年
 三 炎地に生ずるもの、攝龜といふは叩蛇、文龜といふは鱗龜、玳瑁、玳瑁といふは
 むをば筴龜といふ。いづれも龜なるものだ。火龜といふは火鼠などのやうに
 大に、或は小に、ささむに變化する。その龜の水に棲むを神とす、山に棲

中は澄にただなり。『一名神屋といふ』とあり、陶氏は「醫」イにト供すへといつたのは蓋し簡便な方法を採用したものでとだ。又、按ずるに、『經』に「龜甲にはやほりこの寸法に依つて用うべきものやうである。日華が、龜に用ゐる小に實龜などいふのになつては、世間一般には得難いものであるから、藥に入るに寸」とある説は逸禮の記に「天子は一尺二寸、諸侯は八寸、大夫は六寸、士こは四寸が文には相を用ゐ、武には將を用ゐ、それぞれその等級に隨つて用ゐたものと云ふが、その説は禮の記に合符とするところがあるが、一、二寸、三尺、四寸、五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、十寸、十一寸、十二寸、十三寸、十四寸、十五寸、十六寸、十七寸、十八寸、十九寸、二十寸、二十一寸、二十二寸、二十三寸、二十四寸、二十五寸、二十六寸、二十七寸、二十八寸、二十九寸、三十寸、三十一寸、三十二寸、三十三寸、三十四寸、三十五寸、三十六寸、三十七寸、三十八寸、三十九寸、四十寸、四十一寸、四十二寸、四十三寸、四十四寸、四十五寸、四十六寸、四十七寸、四十八寸、四十九寸、五十寸、五十一寸、五十二寸、五十三寸、五十四寸、五十五寸、五十六寸、五十七寸、五十八寸、五十九寸、六十寸、六十一寸、六十二寸、六十三寸、六十四寸、六十五寸、六十六寸、六十七寸、六十八寸、六十九寸、七十寸、七十一寸、七十二寸、七十三寸、七十四寸、七十五寸、七十六寸、七十七寸、七十八寸、七十九寸、八十寸、八十一寸、八十二寸、八十三寸、八十四寸、八十五寸、八十六寸、八十七寸、八十八寸、八十九寸、九十寸、九十一寸、九十二寸、九十三寸、九十四寸、九十五寸、九十六寸、九十七寸、九十八寸、九十九寸、百寸」とある。これは、今、古の代には、龜をを取る者は、時に數千百を採り聚め、生ながら鋸を取れば、その肉を食ふ。彼等の仲間で龜王、龜相、龜將などいふ名目があるが、それは皆その腹背、左、右の文に因つて區別するのであつて、龜の眞中の文を千里といひ、その首の横文第一一の左、右の文にある斜理がみなその千里に接續するものが龜でである。それ以外に龜にはかやうになつてゐない。事を占ふに帝王はその王を用ゐ、文には相を用ゐ、武には將を用ゐ、それぞれその等級に隨つて用ゐたものと云ふが、その説は禮の記に合符とするところがあるが、一、二寸、三尺、四寸、五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、十寸、十一寸、十二寸、十三寸、十四寸、十五寸、十六寸、十七寸、十八寸、十九寸、二十寸、二十一寸、二十二寸、二十三寸、二十四寸、二十五寸、二十六寸、二十七寸、二十八寸、二十九寸、三十寸、三十一寸、三十二寸、三十三寸、三十四寸、三十五寸、三十六寸、三十七寸、三十八寸、三十九寸、四十寸、四十一寸、四十二寸、四十三寸、四十四寸、四十五寸、四十六寸、四十七寸、四十八寸、四十九寸、五十寸、五十一寸、五十二寸、五十三寸、五十四寸、五十五寸、五十六寸、五十七寸、五十八寸、五十九寸、六十寸、六十一寸、六十二寸、六十三寸、六十四寸、六十五寸、六十六寸、六十七寸、六十八寸、六十九寸、七十寸、七十一寸、七十二寸、七十三寸、七十四寸、七十五寸、七十六寸、七十七寸、七十八寸、七十九寸、八十寸、八十一寸、八十二寸、八十三寸、八十四寸、八十五寸、八十六寸、八十七寸、八十八寸、八十九寸、九十寸、九十一寸、九十二寸、九十三寸、九十四寸、九十五寸、九十六寸、九十七寸、九十八寸、九十九寸、百寸」とある。これは、今、古の代には、龜をを取る者は、時に數千百を採り聚め、生ながら鋸を取れば、その肉を食ふ。彼等の仲間で龜王、龜相、龜將などいふ名目があるが、それは皆その腹背、左、右の文に因つて區別するのであつて、龜の眞中の文を千里といひ、その首の横文第一一の左、右の文にある斜理がみなその千里に接續するものが龜でである。それ以外に龜にはかやうになつてゐない。事を占ふに帝王はその王を用ゐ、文には相を用ゐ、武には將を用ゐ、それぞれその等級に隨つて用ゐたものと云ふが、その説は禮の記に合符とするところがあるが、一、二寸、三尺、四寸、五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、十寸、十一寸、十二寸、十三寸、十四寸、十五寸、十六寸、十七寸、十八寸、十九寸、二十寸、二十一寸、二十二寸、二十三寸、二十四寸、二十五寸、二十六寸、二十七寸、二十八寸、二十九寸、三十寸、三十一寸、三十二寸、三十三寸、三十四寸、三十五寸、三十六寸、三十七寸、三十八寸、三十九寸、四十寸、四十一寸、四十二寸、四十三寸、四十四寸、四十五寸、四十六寸、四十七寸、四十八寸、四十九寸、五十寸、五十一寸、五十二寸、五十三寸、五十四寸、五十五寸、五十六寸、五十七寸、五十八寸、五十九寸、六十寸、六十一寸、六十二寸、六十三寸、六十四寸、六十五寸、六十六寸、六十七寸、六十八寸、六十九寸、七十寸、七十一寸、七十二寸、七十三寸、七十四寸、七十五寸、七十六寸、七十七寸、七十八寸、七十九寸、八十寸、八十一寸、八十二寸、八十三寸、八十四寸、八十五寸、八十六寸、八十七寸、八十八寸、八十九寸、九十寸、九十一寸、九十二寸、九十三寸、九十四寸、九十五寸、九十六寸、九十七寸、九十八寸、九十九寸、百寸」とある。

時珍曰く、今、古の代には、龜をを取る者は、時に數千百を採り聚め、生ながら鋸を取れば、その肉を食ふ。彼等の仲間で龜王、龜相、龜將などいふ名目があるが、それは皆その腹背、左、右の文に因つて區別するのであつて、龜の眞中の文を千里といひ、その首の横文第一一の左、右の文にある斜理がみなその千里に接續するものが龜でである。それ以外に龜にはかやうになつてゐない。事を占ふに帝王はその王を用ゐ、文には相を用ゐ、武には將を用ゐ、それぞれその等級に隨つて用ゐたものと云ふが、その説は禮の記に合符とするところがあるが、一、二寸、三尺、四寸、五寸、六寸、七寸、八寸、九寸、十寸、十一寸、十二寸、十三寸、十四寸、十五寸、十六寸、十七寸、十八寸、十九寸、二十寸、二十一寸、二十二寸、二十三寸、二十四寸、二十五寸、二十六寸、二十七寸、二十八寸、二十九寸、三十寸、三十一寸、三十二寸、三十三寸、三十四寸、三十五寸、三十六寸、三十七寸、三十八寸、三十九寸、四十寸、四十一寸、四十二寸、四十三寸、四十四寸、四十五寸、四十六寸、四十七寸、四十八寸、四十九寸、五十寸、五十一寸、五十二寸、五十三寸、五十四寸、五十五寸、五十六寸、五十七寸、五十八寸、五十九寸、六十寸、六十一寸、六十二寸、六十三寸、六十四寸、六十五寸、六十六寸、六十七寸、六十八寸、六十九寸、七十寸、七十一寸、七十二寸、七十三寸、七十四寸、七十五寸、七十六寸、七十七寸、七十八寸、七十九寸、八十寸、八十一寸、八十二寸、八十三寸、八十四寸、八十五寸、八十六寸、八十七寸、八十八寸、八十九寸、九十寸、九十一寸、九十二寸、九十三寸、九十四寸、九十五寸、九十六寸、九十七寸、九十八寸、九十九寸、百寸」とある。

六ノ二
攻ハ由テ取ル

【無】最は久嗽くせうに主效あり、瘰癧れびを斷つことの量りき【穀】穀を炙つて末にし、酒で服すれ

【資け、健嗽けんせうならしめる。焼灰は小兒の頭瘡の燥き難きもの、陰瘡を治す

で死せんとするに、これ湯にして用ゐるが良し。久しく服すれば氣を益し、智

悲かなの氣の心腹痛で久しく立ちぬもの、骨中の寒熱、傷寒勢復、或は肌體の寒熱

の重弱、小兒の顛てん合はぬもの、服すれば身を軽く、飢うすす【本經】驚さ

【主】甲は、漏下赤白を治し、癰瘻ようろうを破る。五痔、陰蝕、濕痺、四肢

曰く、沙參、蜚蠊ひしんを惡み、狗膽を畏れ、銀を瘦す。

經には『濕に中れば有毒だ』とあるのだから、濕に中らぬものは無毒である。之。

【味】甘し、平にして毒あり。【氣】頭、曰く、毒なく、時珍。按ずるに、

もある。

黄に炙いて用ゐる。また酒で炙き、酢で炙き、灰に焼いて用ゐる場合

【修治】龜甲を鋸邊を切り去り、石上磨淨して灰火で焼き、酥を塗つて

から、此にその妄を正して置く。

【用法】學者は異論を立てて世を誤り、一般部俗の輩はそれによつて物識ぶつしき顔がほをすするものだ

【藥方】 田龜を煮て肉を取り、葱、椒、醬油を和して煮て食ふ。

ひ薄血【烏龍肉に沙糖水で椒を拌和して炙き食ふ。回数多く用ゐれば癒える。

須臾にして大に吐し、嗽囊^{せきどく}を吐出すれば癒える。小兒には量を半減する。【痢、疳、及

浸し、三日目に焼い研り、醇酒一升でその末を和し、乾飯のやうにして頓服する。

○又、ある方では、生龜一箇を炊飯中に入れて殺して取り出し、人に尿を放して酒させて

浸し、秬米四升を煮通の方法の如くして鹽し、全部を飲み盡す。永く再發せぬ。

は、生龜三箇を毒通の方法の如く調理して腸を去り、水五升で三升に煮取つて、麤を

一、梳で剪て服用す。(養聖堂方)

つを用ゐて天花粉、枸杞子各一錢二分、雄黃五分、麝香五分、槐花三錢二分、水、

食ふ。微瀝して奏效する。(煎方) 筋骨疼痛【烏雞】一個を四分け、その【脚】

【附方】
腹内の熱をすくは、
肉を五味と共に煮て

26026

[illegible][illegible]

發明

時珍曰、接骨、風濕、土記、江、南、五、月、五、日、國、藥、方、

辰、甲寅、甲子、甲午、甲戌、甲辰、甲申、甲寅、甲子、甲午、甲戌、甲辰、甲申

【時珍】血痢血、瀉血、治し、及び筋骨疼痛、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主】治酒に醱したものは、大風の緩急、四肢攣、

【主 治】耳に滴せば聾を治す【鱉 膠】舌下に點ければ、大人の中風舌瘖、小

の方が更に簡便なやうだ。

時珍曰く、今は一般に、ただ猪鬃、或は松葉でその草を刺して尿を出させる。こ

火を點けて、その尻に點けても失尿するが、これではやや緩なるものだ『とある。

と淫情を發して尿を洩すものだ。それを器に取收める。又、ある方法では、紙燃

で、蛇と交尾する。それを取つて互盆中に入れて置き、鏡に映して他の體が見せる

弱 采 取 頤曰く、按ずるに、孫光憲の北夢瑣言に、性は性の嫉妬深いもの

かぬは、これを取つて點けるが良し【時珍】

膽 汁 氣 味 【苦し、寒にして毒なし】主 治 【時珍】塗る【時珍】塗る【時珍】塗る

損を治するに、酒に和して飲む。同時に生肌肉を搗いて塗る【時珍】

血 氣 味 【鹹し、寒にして毒なし】主 治 【時珍】塗る【時珍】塗る【時珍】塗る

食ふ。屢々効驗を得た。この疾は大いに糟、醋等のもの、熱物物を忌む【時珍】

便良食瘥【年久しき痔漏】田龍三箇を煮て肉を取、茴香、葱、醬を入れて常に

を補し、火を降しし、虚勞、失血、咯血、咳嗽、寒熱を治す。屢々効驗がある【時珍】

氣味 苦、辛、溫、平、無毒、
主 治 瘰癧、癰疽、疔毒、
四 肢 關 節 之 重、
動 脈 硬 化、

を以て黄に炙⁺ひて用ゐる。

申
修
治
季の、トに用いたところもあるものの、ほのぼのとした酒酥そ、或は酒酥。

薬に入られ、器飾する等の効用が全く同一なのだ。
 雅の山龜、澤龜、水龜と合致する。蓋し一種中の二種類なのだ。故にその占卜に用ゐ、
 爾雅を瑯瑁（ろうぼう）といふ『』とあり、應劭の漢書の註に『靈龜は大龜である。雌を（メ）龜（カメ）と（イ）ひ、雄
 澤中（しん）に生ず』とあり、海水中に生ずるといひ、その説が一定せぬが、按ずるに、『山海經（しんかいけい）に『靈龜（れいこう）は深
 或は海水中に生ずるといひ、あるはこれの物だ』とあるは、或は山龜であらうといひ、
 稱するは龜のこのことだ』とあるは、就（す）に靈龜（れいこう）に就（す）ては、或は山龜であらうといひ、
 伏し或は卷耳（せんじ）、孝葉（こうえつ）の上に遊ぶものに、抱朴子（ほうこくし）に所に『山中已（すで）に時に時と君
 の靈龜といふ。年百歳に達して能く變化するものは筮（し）龜（き）といひ、或は莨草（ろうそう）の下
 時（とき）曰く、山中の普通の龜をば鹿が喜んで食ふ。その大さくしてトに使用し得る

弊にこれを用ゐず、
トの方法を知るものも稀なところから、
あまり貴重視されな

で、その産地を以て區別した名稱だ。

集解

保。昇。曰。今。江。南。、蠻南。の處に於て、冬。期には土中に藏るれ、夏、春は出。溪谷に遊ぶ。古代にはただの秦地のみを取つたのだ。

弘。景。曰。これは山中で、水に入らぬものごとく、その形は大小一定せぬ。

方。藥。に用ゐるとは稀いなものだ。

恭。曰。秦龜とは龜いのごとで、更に別物ではない。

上。良。曰。秦地方では龜いを山龜と呼ぶ。この物だ。

藏。器。曰。海水中に生ずるもの、秦龜は山の陰に生ずるものだ。これは深

山の大龜である。石碑の臺の龜の形が是である。草根、竹萌を食物とし、冬は蟄

し、春に出る。ト占家はやはりこれを取つて山澤に關する占をする。掲げ取つた甲

は器物の飾えりになるものだ。

頤。曰。龜は蠻南に生ずる別の種の山の龜であつて、秦龜ではない。龜は種類

の甚だ多いもので、その總ての種類の龜を識るは六ヶ敷いてとある。蓋し近世では貨

頤。曰く、鱉は別の一種であつて、山龜の大なるものだ。秦龜ではな。い。龜表録

用ゐられる。俗に靈龜と呼ぶものだ』とあるが、このものだ。

出る火龜であつて、その縁甲の文は瑤瑤に似たもので、能く鳴く。甲はやはら下に

保。昇。曰く、蘇恭の説は通論でない。按ずるに、郭璞の雅註に『鱉は涪陵郡ふりやうくに

とでない。

藏。曰く、鱉は海邊に生ずる。甲に文があらつて物の飾になるものだ。山龜のこ

恭。曰く、即ち秦龜のことだ。

集解

弘。曰く、鱉は廣州に生ずる。

龜で、小なるか。龜だといふ。其に判りよい。

これ象つて作つてある。或は、大なるか。鱉、負

負は、負は力のある状態であつて、現に現に跛ひきの形は

の。電でんと南方が人か。龜皮を呼ぶときのの發音だ。

は、そのの聲が、夷といふやうに聞かせるから名けたも



鱉

る。雜俎に、係けいと書いたのは正しくない。皮を龜筒と名ける。時。曰く、鱉ひき

多。二。三。ノ。石。碑。ハ。取。

多。二。三。ノ。石。碑。ハ。取。

[illegible]

リ。
(一) 鱈ハ、ホタルノ

南日本ニ産ス。多ク海産ノ鱈ニ似テ、細工用ニ重ク、木村(重)曰ク、

だ。

く、その功力は毒を解するもので、毒物から煙癩^(しんれび)と云ふれども、のの意味で名けたもの時珍曰。

【釋名】

玳瑁

代味

(イヌイ)と云ふ

又、

毒目

トモシキ

發音する。

【毒】

瑁

(宋)

實

和名

イヌイ

科名

鱈科

Eretmochelys squamosa (Girard.)

【筒】

釋名

龍皮

氣

味

【主】

治

【時珍】

る。

疾、及び刀箭^(とうせん)の毒に中たりは、煎汁を飲む【大明】薬毒^(やくどく)を解す【時珍】

曰く、南方の地で用ゐ、毒箭^(どせん)の燂銅^(せうどう)、及び蛇汁毒を飲めば平安になる【日華】

【血】

氣味

【主】

治

【便】

俗の毒箭傷を療す

【時珍】

氣味

【主】

治

【風】

腸、胃を利す

凝るのである。生玳瑁、生犀角を共に汁に磨つて一合に、猪心血少量、紫卓湯五匙、一回、半合つもの温服するが最も良し。【瘡の黒陷】乃ち心熱で血がし、已に發したのも稀少で免れる。生玳瑁、生犀角を各汁に磨つて一合を和勻し、消れば消す。楊氏乳【瘡毒の豫防】流行時にこれ服すれば、未發のものは内服すれば消す。【瘡毒を解す】生玳瑁汁を磨つて濃汁を作り、一、一蓋を水で服用する。【瘡毒を消し、癰毒を破り、癰結を解す】【瘡毒を消し、癰毒を破り、癰結を解す】【瘡毒を消し、癰毒を破り、癰結を解す】

【主 治】 心風を療し、煩熱を解し、大、小腸を利す。功は肉と止める。【心風を療し、煩熱を解し、大、小腸を利す。功は肉と止める。】

【發 明】 宋時代に入つて至寶丹に用ゐたのが始めである。又、龔甲の條を見よ。

【附 方】 一、三新。【瘡毒を解す】生玳瑁汁を磨つて濃汁を作り、一、一蓋を水で服用する。【瘡毒を消し、癰毒を破り、癰結を解す】

【氣 味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。

【甲 氣 味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。

【主 治】 心風を療し、煩熱を解し、大、小腸を利す。功は肉と止める。【心風を療し、煩熱を解し、大、小腸を利す。功は肉と止める。】

【發 明】 宋時代に入つて至寶丹に用ゐたのが始めである。又、龔甲の條を見よ。

【附 方】 一、三新。【瘡毒を解す】生玳瑁汁を磨つて濃汁を作り、一、一蓋を水で服用する。【瘡毒を消し、癰毒を破り、癰結を解す】

【氣 味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。

【甲 氣 味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。【氣味】 甘し、寒にして毒なし。

様だ。

【主 治】 人咬瘡の潰爛には、灰に焼いて傅ける【時珍】摘玄に記載がある。

【主 治】 愈える

【地朴子】

【主 治】 蛇咬には、刮つて末に傅ける

【主 治】 尾

【主 治】 食ふものだから【弘景】

【主 治】 生で搗いて蛇傷を罨ふ

【主 治】 生で研つて撲損の筋脈傷に塗る

【主 治】 肉

【主 治】 食はれない。殻も用ゐるに堪へぬもの

【主 治】 洗く、この物は蛇を噉ふもの

【主 治】 肉

【主 治】 好んで蛇を食ふ

【主 治】 保身、蛇は腹が小さくして中心が横に折け、能く自

表れる。

【主 治】 小にして尾が長い。吉凶を卜ふに用ゐると、蛇とは正反對に

【集 解】

【主 治】 音の轉訛した弘景曰く、小蛇は處處にゐる。狭

【主 治】 音の轉訛した弘景曰く、小蛇は處處にゐる。狭

【主 治】 音の轉訛した弘景曰く、小蛇は處處にゐる。狭



【蛇 音】 蛇 音

[illegible]

27
44
2

づれども少陰の血分の病である。秦瓊は色黄にして脾に入。故にその主たるものは、
 入る。故にその主たるものは心風、驚熱、傷寒、狂亂、痘毒、腫毒であつて、
 經水、癰腫、陰瘡であつて、いづれも厥陰の血分の病である。瑤瑁は色赤くして心
 經、癰腫は色青くして肝に入。故にその主たるものは瘧、勞の寒熱、瘰癧、驚癰、
 である。嘗て注意して視るに、龍、肝の經の血分はそれより功に特長を有するものであ
 時珍。曰く、龍中なるものは厥陰、肝の經の血分はそれより功に特長を有するものであ
 し。これは甚だ基準きんせんがあるであつて、用劑を過量にしてはならぬものだ。
 論に、勞瘦、骨熱を治すと言つてあるところから、虚勞にこれを用ゐる。しか
 性。宗。曰く、經の本文中には勞を治すところを言つていないが、ただ藥性

【明發】

潰癰を斂める（時珍）

煩喘、小兒驚癰、婦人の經脈不通、難產、產後の陰脱、男子の石淋を除き、
（華陰）陰を補し、氣を補す（慶亨）老癰、癰母、癰瘻、陰毒、腹痛、勞復、食後、斑痘、

【血氣を去り、癰結、惡血を破り、胎を墮し、瘡腫、腸癰、癰、并に撲損瘀血を消す】

骨熱、骨節間熱、結實癰寒、下氣、婦人の五下色を除き、瘀血（時珍）を下す（慶權）

瘡疾、息肉、陰蝕、痔核、惡肉を去る【本經】

吳王

氣味 【つな華うつり來、し】
 土、曰。○
 土、曰。○
 土、曰。○

蘇石 蘇んせき

30

し、膠、漆のやうに煮爛して用ゐるが更に佳く。桑柴灰を用ゐるが就中妙だ『とあ
時珍』曰く、按ずるに、衛生實鑑には凡そ『驚風は、煨燄灰ひんぱんかい一斗、酒一升に一夜浸
す。三升を入れた盆の上に置き、置き一夜、夜經にて取つて用ゐる。かくすれば萬倍の藥力がある。
三升を入れた盆の上に置き、置き一夜、夜經にて取つて用ゐる。右石臼で粉に搗いて、雞胓皮けいさいひを裹み、東流水
で洗ひ、二斗入れる。勞を治し、熱を去る。藥の場合には、醋を用ゐず、肋骨をつきて炙乾し、瓶の中
に頭醋を入れ、火で煎じ、醋三升を煎じ盡したとき、醋を用ゐず、肋骨をつきて炙乾し、瓶の中
に置く物をも以てその瓶を拵へ上げ、癰塊ようくわいを治し、心を定むる藥の場合には、その瓶の中に
あるものを用ゐるとする。瓶の底を六一泥で固め、乾かすのを待つて甲子とその中に
敷く。凡そこれを使用するにあつたとき、必ず緑色で六九筋があり、裙多く、重量七七兩

にす不治のものだ。(麗安時傷寒論)【癰疽の斂れぬものも發背と一切の瘡とに拘ら

凡そ患者の大便秘に血あるは中^{うち}壞である。黑^{くろ}脈となつて膿なきは十八人が十八まで死

小便の利せぬには、驚^{おどろ}甲二兩、燈心一把握、水一升半を六合に煎し、一回に分服する。

熟地黄一兩半、兩半を晒を乾し、末にして二錢つづつを食後に茶で服す。(聖濟錄)【痔瘡^{しそ}煩^{わづ}悩^{なや}】

るを度をとす。(醫聖元戎)【吐血^{とつち}】血の止むぬものも驚^{おどろ}甲、蛤粉各一兩を共に黃色に炒り、

半^{はん}薑^{しょう}、童尿^{どうにょう}半^{はん}薑^{しょう}、葱^{そう}白^{はく}七寸を共に煎して葱を去つたもので日晡時に服す。臭汗の出

石が出^いて瘡を癒える。(肘後方)【陰虛の夢^む泄^{しや}】九肋の驚^{おどろ}甲を燒いて研り、一字づつを、

後^ご方^{ほう}【沙石淋^{しん}痛^う】九肋の驚^{おどろ}甲を醋で炙いて研末し、一日三回、方寸匕を酒で服す。

の腰^{こし}痛^う【俯^ふ仰^{よう}】得^えぬにば、驚^{おどろ}甲を炙いて研末し、一日二回、方寸匕を酒で服す。(肘

研り、一日二回、錢^{せん}つづつを乳^{にゅう}で蜜^{みつ}で丸にして服す。(子母錄)【癰^う腫^{しゆ}】癰^う甲を炙いて

にば、驚^{おどろ}甲を燒いて研り、方寸匕を水で服す。(肘後方)【小兒の癰^う腫^{しゆ}】癰^う甲を炙いて

復^ふ、食^{しょく}復^ふ【危^き復^ふ】大病の回復の期に復^ふ、胃^いを傷^{やう}め、ために復^ふして死^しせんとする

驚^{おどろ}甲を燒いて性を存して研末し、酒で方寸匕を服すれば立ち分^{ぶん}婉^{わん}する。(梅師)【勞^{ろう}

勑^{しつ}皮^ひ等^{とう}分^{ぶん}を末にし、糊^こで丸にし、一日二回、空心に三十九つづつを服す。【婦人難^{なん}産^{さん}】

[illegible]

桑灰湯で煮熱^{くゆ}して骨、甲を去り、水を換へ再び煮て葱、醬を入れ、羹に調理して食の。凡^レ、食^をを食^ふに、は、必ず沙河の小體を取るべし、もつと頭を斬つて血を去り、和するために、その本來の性を失ふに過ぎない。體の性は葱、及び桑灰^{いっしやく}を畏れ多く來^来なるものでないであつて、これを食^ふ場合、椒や薑などの熱物^{ねつぶつ}を甚だ多くといつてあつて、性冷なりといふ點に反對してゐるやうに見え、蓋し體の性は本原體は『體の陽は上甲に聚るもの。久しく食すれば人をして發背をして生ぜしめる戴ある者は食ふべきでない』とあるが、生^は生^を體に『體は性熱なりとあり、戴時^{とき}。曰く、按ずるに、三元贅書に性冷にして水を發す。冷勞氣^{れいろうき}、癥瘕^{しやうがい}の

子が生れるものだ。

芥子と食合せれば惡瘡を生ずるものだから食つてはならぬ。妊婦が食^たへば項^{けう}の短^{みじか}いと思^{おも}ふ。曰く、猪、兎、肉と食合せれば人を損するものだから食つてはならぬ。

ふ。

ある人が甲^{けう}を裏^{うら}で置いて、五日はかり経つとかなな體になつてゐたといふ。又、で包^{つつ}んで湿地に置いたところ、十日ばかり経つとみかなな生體になつてゐたといふ。又、

弘。景曰。雞子。雞菜いんさい。食ひ合はせてはならぬ。昔、ある人が鼈を剉み、赤見あせみ

食つてはならぬ。

ものだ。山上にゐるもの。——早鼈と名ける。——は、いつれ人も人を殺す毒がある、腹下に王の字、トの字の文もあるもの。蛇の腹に蛇の文へびのふだにへびのふだがあるもの。——これは蛇は蛇の變化した、赤足のもの、獨目のもの、頭の足、縮ちぢむぬもの、その目の四方よっぺの凡そ鼈は、三足あるもの、軟骨をいふのであつて、これを食へば水病を患ふものだ。頭下あたまのしたにある頸けいの形をやら

人ひとを損する。

氣味

甘し、平にして毒なし。頭曰く、久しく食すれば、性冷にして

爛なれた

【の】久しく脱だつせんとするに、鼈かめの甲を灰はいにして傳つたける。葉氏えふし摘玄てつげん方

千金せんじん翼よく

【瀋唇しんしん裂れつ】鼈かめの甲及び頭を燒き、研ひつて傳つたける。指さしを人に咬かむ方

を生なした

【】の治ちし難がたなものだ。一枚を燒いて、雞子けいしで和わして傳つたける。

鼈かめの甲を燒いて

性しやうを存ぞんして、錢せんづつを水みづで服ふくす。傳信でんしん方

す、

【】鼈かめの肉を燒いて、性しやうを存ぞんして、甚いただ妙たふである。李機りき怪奇かい方

寸匕を服す。同時に末を腸の端に塗る。(千金)

(眞市)

附方

（狂歌）

吳王

242

東に

時珍曰、麝香の足も三足の『鼈』の如く、麝香の能いといふ、『とあり、郭璞は『今』

三足龜

集	解
釋	名

能
驚
(奴の來切)
綱
(目
科意和
名名不
不不不
明明明)

【傳尸勞、及び婦人の經閉】（蘇頌）

吳王

【小書あり】
氣味

吳藍の煎湯を服すれば立つに解す。

【書】
味
氣
肉

頤。曰、く、を食へば人として昏塞せしめるが、
黃氏、まわ

○ 暈々 暈々

頭。曰く、衆の衆なしくして頭、足の足なぬものもそを名けて納ない。と。た。

(二)納覽(宋)圖經(科學和名名名)
すゝん入りこ Trionys steindachneri
科(離)缺

(二) 木なす村(重)ノ日ナ、
モしナク申方ニハ例
起ルハ明節前ナリ
定テ放スルヲ假ニ
南力ニ那後モラ。

(一) 木村(重)日

【五月五日】衣領中に「おぼせは人をお忘れぬ」としてある【時後】

卵 主 治

し、一日三回、兒の大小を量つて、水罐で手洗ひ（湯心洗ふ）。
 湯心洗ふ。

【附方】
 小兒の疳癆、潮熱往來し、五心煩燥し、盜汗し、咳嗽するを治するに
 主たる驚血丸——黃連、黃連、胡黃連、各二兩を、驚血一、一、蓋に吳萸（中後方）一兩と共に一
 半兩、使君子仁二十個を末にし、こねて入られ、粟米粉で煮た糊で和して、黍米大（中後方）の丸に
 參、夜浸し、炒り乾し、菜菔、驚血とを去つて、研末し、柴胡、川芎、蘇葉、各一兩、參、

して血に走るものだ。故に口喘、腹の病を治するのである。

風血脈入に時珍曰く、按ずるに、命湯千金方に『目瞤し、唇動さ、口喘するは、雞冠血^{けいこうけつ}で、蓋し血性の急凝^{きやくけいりやう}は、急伏龍^{きやくふくりやう}な

するもの、小兒の疳勞潮熱【時珍】

主 治

【脱肛】にに瘰癧【癰疽】の權説にある

【風】か、脈中に口、眼の^{まへ}まへ

【二】
（藏書）

吳王

日新

21 中 水 。

集解

米

氣を辟けるに、或はこの像を畫いて止める【蘇恭】

【折傷】にに痛を止め血を化するに生、でで操る。道家で諸種の厭えんんん死し

ナヒテアラス。

二ノ分ヲ入聲ノ木ヲ呼効ノ木村(重)ノ木上ノ珠

[illegible]

「黄に炙いて酒に浸して用ゐれば、癰癤を治し、蟲を殺し、風を逐ふ。

主治

甲 氣 味 【甘し、平にして毒なし】

へるもので、裂いて懸けて置くやうにして、夜にして垂長するやうに思はれるものだとはいふ。或は、この物は水に在つて魚を食ふ。人と體を共にし、十二種の動物に在る肉を食ふ。其の氣類の相感である。張鼎は『その脂を鐵で摩すべし、明になる』といつた。いづれば龍應ずといひ、淮南子に『龍を燒けば以て龍を致す』といつたのであつて、けである。腸は首に接屬してゐる。龍を以て雌となし、卵生し思はれる。故に『龍』と唱時珍は、龍は龍のやうで大きく、背に龍脚あり、青黄色で頭が大きく頸が黄に珍。食はぬ。

弘。曰く、この物の老いたるを能く變じて魅を爲すものだ。急の場合以外する。鳥。曰く、龍を張り得る。——即ち口を開いていて、鳥を食ふ勢がある。

藏器。曰く、性容易に死なぬものだ。その肉を煮く削りとり、咬まうと掘り取つて鹽しほに淹けにして食ふ。煮てもその白が變らぬものだ。人間がやがはりそれ

卷五十四 雜部

んに川ゐる。また火と名けるは、その煮の色が赤いからである。その最も小さく
 煮が小さいものをば攤劍（はきり）、一名歩（ほ）、一名大煮をに川に用ゐ、小煮を物を食
 で、八月頃く虎と闘ひ、虎がその爲めに負かされる。一方の煮が小さく、一方の
 手のやうになつてゐるところが他の多くの蟹と異なる點である。力の至つて強いもの
 一回長大になる。その大なるものは升ほどあり、小なるものは蓋（ふた）ほどだ。兩煮が
 一掉（は）のやうだからであつて、一名鱒（なまこ）といふ。潮つたてば煮が退け、一回退けるに
 大く、後足の間のいものをば鱒と名け、南方の地では撥掉（はたき）と呼ぶ。その後脚が
 鋭くして刈り切るやうに物を斷るものだ。これを食へば風氣（ふうき）を行ふ。扁（へん）にして最も
 て黄色の味噌といふものが多いものをば蠅（は）と名け、南海に生ずる。その煮は最も
 ものをば比と名ける。いづれも大毒があるから食つてはならぬ。その煮が闊（くわ）
 ある。その種類は甚だ多く、六足のものをば蛇（へび）、一名蛇（へび）——と名け、四足の
 陸霜（りくそう）後に人が世を送する時分に始めて食へるものだ。然らば尤も猛烈な毒が
 するものだとはいふ。現に南方で蟹を捕るに、やや早期なれば世（よ）を衝（つ）むものがある。
 二寸ばかりの稻の世（よ）を二本取つて東に向つて逃み、その首長年貢としてして輸送

吳王

【胸中】邪氣（まがき）熱結（ねつけつ）嘔（おう）喘（ぜん）、面腫。能く漆を敗る。ここれ焼けば鼠を

木香汁で解し得る。詳細は柿の條を
見よ。

珍。曰く、柿、及^ひ刈^き井^いと食^くせはならぬ。霍亂を發し、風動するものだ。

そこのまゝ

宗廟曰々、この物は極めて風を動するものだ。風疾人は食つてはならぬ。壓し

鼎。曰く、娠婦がてを食へば横に歩む子が生まる。

そを害するものだ。冬瓜汁、紫蘇汁、ササゲ蓼人參汁、アムロ豉汁、スズナ蘆根汁はつべつのものである。

背に星點のあつた足が斑の赤いもの、いづれも食つてはならない。有毒である。

目
の
向
ひ
合
ふ
の
、
六
足
、
四
足
の
、
腹
、
毛
の
、
あ
る
の
、
腹
中
に
骨
の
あ
る
の
、
頭

合、治療を加へねば多くは死するといふとて。この爲め、
國々も、目も、心も、

刺

於有毒に食ふ人を、
 氷食ふに有毒とて、
 人々がそれにて中絶したる

氣味

に茶は緑色にしてはい。貯蔵してカステルをい。と。の号は(キモ)であ。る。

おれはしゃしてこゝろを免れる。白芷を用ゐれば眞が散ぜ。及び五味子と共に

火に當てて沙し、胡椒を加へ、鹽し、いも、のだが、皂莢、或は赤、及び粟粉あやふちを用し、醬汁じやうじゆで浸して、みも佳味な食品くひんとなる。ただ久しく置いたものは沙し易く、酒で浸す時珍。曰く、凡そ蟹は、生で烹て、も、鹽で貯藏し、糟で貯藏し、酒で浸

修治

るものがある。ある。夜になつて火光で照して、描ると、時に黄と白とが叢中に満ちてゐて拾ふのである。宗曰く、蟹を採取する時期は九月で、蟹浪の頃にその水を出るところを伺つた。

蟹の腹中に小蠶子のやうで白い蟲のゐるものは食はれない。甚しく風を發するも。蛙の腹にゐるものは蠶奴さなといふもので、また寄居蟹と呼ぶ。いづれも食はれない。錢ほどのものだ。腹下にまた櫛くしのやうな小蟹がゐる。それは蟹奴といふものだ。大いふ能く飛ぶものがある。善化國にある百足の蟹といふは海中の蟹であつて、大いふ野人はこれを食ふ。又、海中には、紅蟹といふ大さくして、紅色なるもの、飛蟹といふ。な。い。溪澗の石穴中に生じ、小さくして、殼が堅く赤いものは石蟹といふもので、食へる。兩螯りやうぢやうが極めて小さくして、石のやうなもの、蚌江はうかうといふもので、食は

して壁(し)を辟(は)ける【】蟹殼散を烟に焼いていて、蜜す(蜜云)。

【蜂蟻の瘡傷】蟹殼を焼いていて、性を存して研末し、蜜で調へて塗る(同上)。

【附方】新。三。【崩中腹痛】毛蟹殼を焼いていて、性を存し、蜜を飲(蜜)す。服す。

【時珍】積を消す【】婦人の兒、枕痛、及び血崩、腹痛を治し、

【主治】焼いていて、性を存して蜜で調へ、陳香、及び蜂蟻(蜂蟻)に塗る。酒で服す。

に、空(金)心に錢を温酒(金)す。服す。

がため、胎を去らんとするに用ゐる。蟹爪二合、桂心、瞿麥各一兩、牛膝二兩を末

して服し得ぬ場合には、灌(灌)込(込)する。【】下胎蟹爪散。妊婦にある病を治せん

り、眞(眞)阿膠(阿膠)三兩、人(人)煎(煎)かして頓服する。或は二二分服する。も衰弱し去

の方(方)である。蟹爪一升、甘草二尺、東流水一斗を煮、二升までで、生けるものを安胎(安胎)し、

の生けるを治す。これを服すれば死せるものを出し、生けるものを安胎(安胎)し、神驗

【附方】新。二。【千金神造湯】胎兒の死したのも、并に幾(幾)胎(胎)一兒(兒)死し

【】生胎を墮し、死胎を下し、邪魅を辟ける(時珍)。

治の方(方)に、孕(孕)婦(婦)が、たれ(たれ)た(た)め(め)に、胎(胎)が(が)心(心)に、を(を)措(措)く(く)を(を)治(治)する(する)に、に(に)蟹(蟹)爪(爪)湯(湯)と(と)い(い)ふ(ふ)か(か)あ(あ)る(る)。

る。酒、及び醋湯でて前して服するが良し【日華】能く胎を安んず【愚】頤曰く、胡
蟹爪 主 治 【胞を破り、胎を墮す】【別錄】宿血を破り、産後の血閉を止め

【毒】蟹を食へば解す【事類賦方】

と聲があつて好結果を得る。乾蟹の焼灰を酒でて服するも好し【唐蔣驥方】鱈魚の中
らし、熱酒を傾け入れて数椀を連飲し、その渣をその内骨の内部に谷爛
の丸にし、一日二回、五十九丸をつつ白湯で服す【集簡方】【骨節離脱】生蟹を搗き爛
【道】蟹を焼いて性存してて研末し、梧桐子大ほど

附方

三

いとある。

で果して舊の通りに明になつた。漆が蟹を畏れるは何の關係に因るものか判らな
汁を點けずと、その汁に随つて漆が外流れ出し、瘡は癒え、それを用ひたけ
なつた。ところがその村ある老人が石蟹を捜し探らせ、それを搗き碎いて瀝な
が生漆を被り、その眼に塗いたために漆瘡が臺延し、全物を見るこゝろが出来な
たといふが、ある蟹に何の害かあらうか。洩過の夷堅志に『襄陽で、ある盜賊
腸、胃が傷み、腹痛し、吐き利するこゝろも當然はいねばならぬ。それを蟹か悪かつ

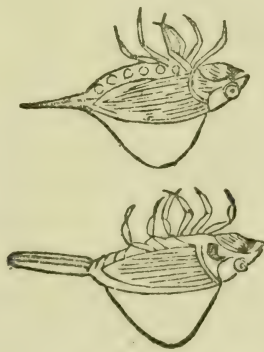
名ける。食へば人體に害あるものだ。

たのでは往々にして無事でゐる。南方人はその肉で無鱗を作る。小なるをば見鱗と
鰻うなぎを焼けば鼠が集つて来る。その性を畏れ、蚊を畏れるもの、かしこし中に暴らざれ
脂あぶらを焼けば鼠が集つて来る。その性を畏れ、蚊を畏れるもの、かしこし中に暴らざれ
屈すれば杓にもなる。香中に入れると能く香氣を發する。尾は小ざい如意い如意にもなる。

飛と躍とする。皮かわは甚だ堅く、冠かんにもなり、また
この物は沙すな上に藏かくれ伏すものだが、やはら
浮うび雌メは沈しづむ。故に四方で水に置くとき雄
は小ざ雌メは大きい。故に四方で水に置くとき雄
は必ずその雌メを捕るもの、で、漁夫
はその雌メを失うは雄オが行動し得なくなる。漁夫
その行動には雌メが常々を負おつてゐるもの、で、

く行てふ貢を雄が雌メに足二十

【鱗】



魚 鱗

るものだ。尾に粟ほどの珠がある。その行動には雌メが常々を負おつてゐるもの、で、
彈はじともいふ。その血は碧色で、腹に黍粟米のやうな子がある。その子には鱗うろこがない。
相手を負ひ、背を現はし、風に乘じて遊いでゐる。それを俗に鱗うろこと呼び、また鱗うろこ

本草綱目介部第四十五卷終

し、一丸、桔梗一分、牙皂一分、三丸を分を去つて服す、惡涎を吐出して瘡を惡瘡に
て、一兩、桔梗一分、牙皂一分、三丸を分を去つて服す、惡涎を吐出して瘡を惡瘡に

本草綱目介部第四十六卷

右附方 舊二十二新九十六

郎君子海藥

寄居蟹拾遺

中煎拾遺

石勒綱目

車渠海藥

擔羅拾遺

文蛤本經

蜆海藥

生蠣本經

介の二 蚌蛤類二十九種

海月拾遺

田蠃別錄

淡菜別錄

紫貝唐本

魁蛤別錄

石決明別錄

馬刀本經

海鏡附す

海燕綱目

參蠃拾遺

海蠃拾遺

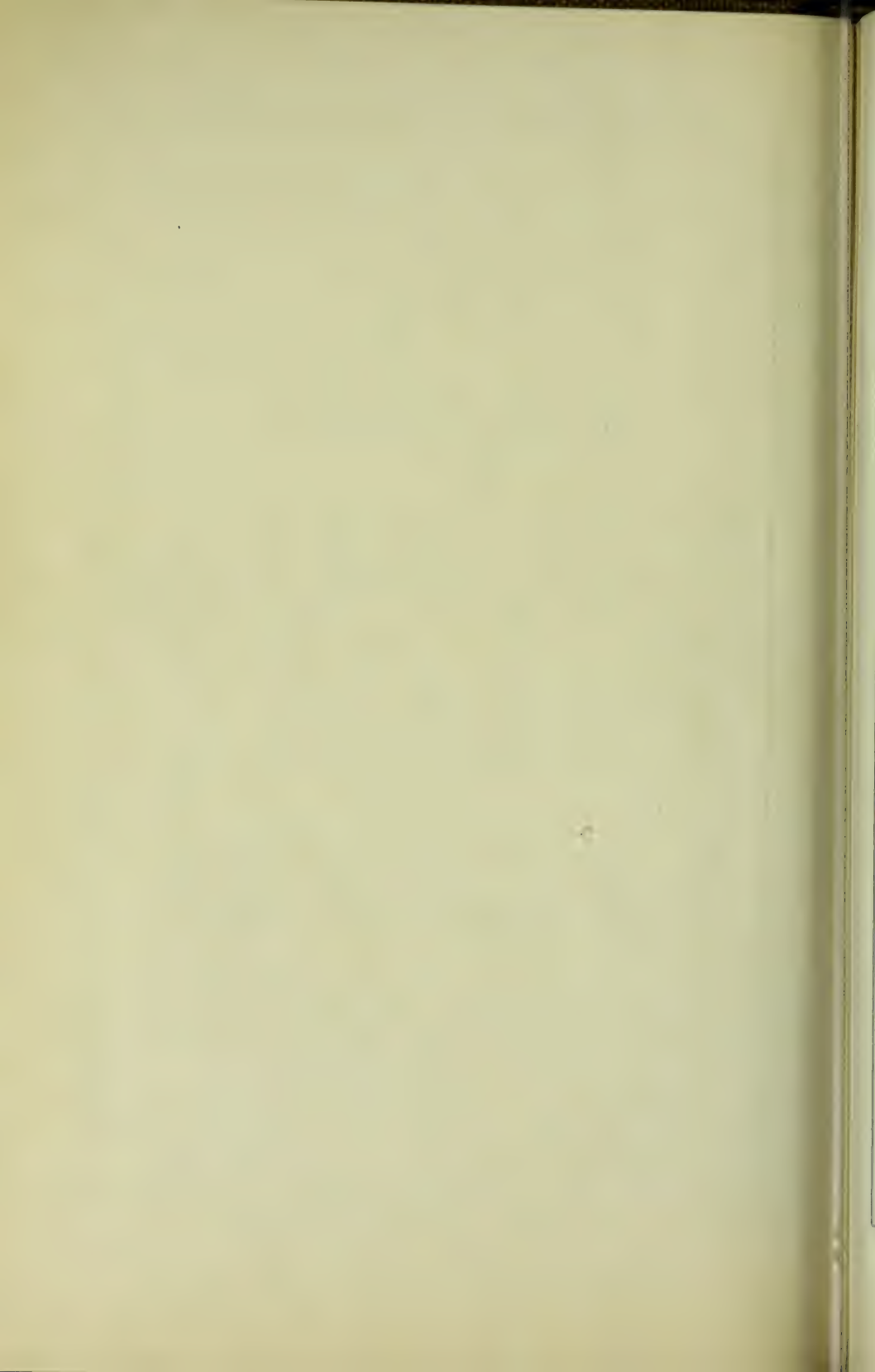
珂唐本

五寶子即ち

煙附

海蛤本經

蠃附



分類ノ註、草部ノ沿、東海ノ附、永嘉ノ草、蘇、近、東、海、山、東、江、見。

集解

大なることを言ひ表したものである。

手○の○日

乙卯。

○。○。○。

能く腸下硬を去り、茶を以て引けば能く項上の結核を消し、大黃を以て引けば能く好占く、足は少陰に入り、堅を要にするの劑である。柴胡を以て引けば

し。

發明

權曰、病の虚熱多きは、地黃、小草と共にこれを用ゐるがよ

白濁を止め、疝積塊、癰疾結核を消す【時珍】

【好古】痰を化し、堅を要にし、熱を清し、濕を除き、心、脾、氣痛、痼下、赤

し、神を安じ、煩熱、小兒の驚癇を去る【李珣】堅滿、癰癰、一切の瘡を去

崩中を治し、痛を止め、風熱、鬼交精を出し、除く【蓋説】男子の虚勞腎を補

止める。麻黃根、蛇床子、乾薑と共に粉にして用ゐれば陰汗を去る【機籌】婦人の

止め、喉痺、心、脇下の痞熱を治す【別錄】身ハ粉れば大兒の盜汗を

き、汗を止め、渴を止め、老血を除き、洩精を療じ、大、小腸を澀し、大、小便を

【留熱の關節に在るもの、虚熱の來去不定なるもの、煩滿、心痛、氣結を除

赤白を除く。久しく服すれば、骨節を強くし、邪鬼を殺し、延年を延へる【本經】

主治

【傷寒熱、溫瘧、酒疸、鼠瘻、拘緩、氣。】

す。

草、牛膝、遠志、蛇床子と配合するが良し。麻黄、辛夷、吳茱萸を惡む。鹽砂を伏

甘。氣味【鹹、し、平なり、微寒にして毒なし】之才。曰く、貝母が使となる。甘

ら用ゐる『といつてある。

間浸して取出し、硫黄末を米醋で和したもので上を塗り、黄泥で固濟して煨いてか

時珍。曰く、按ずるに、陶隱居は『牡蠣は、童尿を五日に一回づつ交換して煨いて九

ので伏して、煮て、再び火中に入れて赤く煨き、粉に研つて用ゐる。

の敷。曰く、凡て其の牡蠣を用ゐる。光二三十箇を用ゐ、東流水に鹽一兩を入れたる

る。とになつてゐるが、また生で用ゐるところもある。

修治【宗。曰く、凡てこれを用ゐるには、泥で固濟して燒き、粉にして用ゐ

鑿とは千年の琥珀をいふ。

それを試験するに、鑿を用ゐてかゞびて見ると、手に随つて走起するものが異物だ。

の似たものだが、ただ男子がこれをして服すると髪がなくなき。其の牡蠣は火で煨いて用ゐる。

に似たものだが、ただそれは龜殼のやうに圓いものだ。海牡蠣といふは用ゐ得るも

一 方では、そなた白駒を用ゐて共に調へる。小兒には乾薑を用ゐなす。（初唐世）

に上てに掃き、須臾にして囊が火の如くに熱するものと再び掃く。小便が利として癒

病囊腫【ハツシヨウ】ハツシヨウ
肝臓を乾燥して粉にし、二兩、乾薑を炮して一、二両を研末として冷水で調へ、糊。

吐瀉粉を醋糊で梧子大の丸にし、一日一回、三十丸つづつを米飲で服す。(丹溪方)【水】

便三升を二升到煎したるものにて三回に分服する。神效がある。乾地生（意）

小【小便の数多きもの】牡蠣五兩を灰に焼き、
 小【小便の数を多し取る。】茴香湯で服用して効果を成す。
 小【小便の数を多し取る。】腎集集成

血藥を服用して、
も奏せぬに
は、
牡蠣粉、
黄蘗を炒つて、
等分を末にし、
一錢を一つ

方寸匕を酒で服す。丸ににして三日一回服するもよし。(時後方)

【小便淋瀝】

【おとす】
少くして
勢よく作
らるゝもの
である。
牡蠣十斤、
石臼五分、

【病後】
 王國金
 取之
 服之
 體之
 米之
 口之
 力之
 回三
 日一

[illegible]

藥を服はしむるに
口苦く吐く

[illegible][illegible]

た^{たし}鯽魚の煎湯で調へて服用す。ただ二三服で癒さる。【百病合方】^(經験方)。癒に効したしも
日、或は端午の日、牡蠣を黄泥で固濟して赤く煨、研末して錢一つつ錢一つつ活
粉、麩を黄に炒つて等分を、錢一つつ猪肉汁で調へて服す。【驗】。消渴飲水【牡蠣
粉、日一回、錢二つつ水を一盞で七分に煎して溫服する。【本非華方】。産後の盜汗【牡蠣
方寸匕づづ酒を以て服す。【千金方】。虚勞の盜汗【牡蠣粉、麻黄根、黄芩等分を末にし、
子大の丸にし、五十丸つづ酒を以て服す。【難經】。氣虛の盜汗【上記の方を末にし、梧
し、二錢を以て酒を以て服す。【丹溪心法】。寒熱、牡蠣粉、柱伸等分を末にし、蜜で梧
【附方】。新七、七、新四。【心、脾、氣、痛】。氣が實して痰あるは、牡蠣を煨いて粉
とす。慾求を起さなくする。故に蛤蠣の類は能く渴を止めるのだ。
元。曰く、水を壯にするの主薬であつて、陽光を制するから渴して水を飲まん
硬さを要^{たつ}かなしめる。
成。無己。曰く、牡蠣の鹹は以て胸膈の滿を消し、以て水氣を泄し、痞^痞痞^痞するをば消し、
腎の經の血分の薬である。
く股間^{股間}の腫を消し、地黄を以て使とすれば能く精を益して收澀し、小便を止める。

○ 此の二の押入を、
、とハ、と、と、



〔註〕

集解

集解 弘景曰、雀が大水に入つて屢と

あつて、いつれも形容である。後世それを望

の文字は^フ豊に従ひ、船の文字は合に従ふので

師の故。といふ師として聖賢を以て圖、以て師

時。形。曰。々。蚌。之。類。だ。か。が。形。を。異。に。し。て。も。の。で、長。き。を。ば。通。し。て。

名錄

(二) 蚌

(宋嘉祐)	科名和
	名名名
	とふふひ
	Ancodonta woodiana,
	(Leach)

美味で、肌膚を細にし、顔色を美しくする【蘇頌】

醋で生で食へば、丹毒、酒後の煩熱を治し、渴を止め、【】(臓器) 炙いて食へば甚だ

主 治 【煮て食ふ、虚損を治し、中々調へ、丹毒、婦人血氣を解す。蒸、

肉氣味

【つちまきつちり歌、つち】

[illegible]

にし、一日一回、三十九つづつを白湯で服し、并にその肉を炙いて食ふ。(普濟方)
敷いて效を取る。(金方)【顔色】黒なるものを牡蠣粉を研末して蜜で蜜で于大の丸を
生を研つて末にし、一日一回、三十九つづつを紅花煎酒で調へて服し、同時にその厚い部分
をある。(中疽潰痛)【瘡肉】が中趾を裏で膿血が出て瘡をぬには、牡蠣頭の厚い部分
甘草一兩を末にし、毎食後に膿茶湯で一錢を調へて服す。その效神の如し。【
根を除く。】初虞世は、已に破れたるを、三十九つづつを酒で服す。服し盡せば
參末三兩を麴糊で梧子大の丸にし、一日一回、三十九つづつを酒で服す。服し盡せば
更に塗る。(姚僧坦集方論)【男女の瘰癧】は、牡蠣を煨いて研末して、四兩、
腫の末だ成らぬもの、これを用いて毒を抜く。水で牡蠣末を調へて塗る、乾けば
【初期】(金方)【貴灰】(金方)【牡蠣粉】(金方)【金瘡出血】(金方)【氣口禁口】(金方)【破傷濕】(金方)【發背】
するは、(金方)【金瘡出血】(金方)【牡蠣粉】(金方)【氣口禁口】(金方)【破傷濕】(金方)【發背】
醋湯で服す。(金方)【金瘡出血】(金方)【牡蠣粉】(金方)【氣口禁口】(金方)【破傷濕】(金方)【發背】
米醋で艾葉末を調へて敷つて膏の如くしたもの、梧子大の丸にし、四十五つづつを
【月水不止】(金方)【牡蠣を煨いて研り、米醋で搜して、再び煨いて研末し、

を新瓦で紅く炒つて青黛少量を入り、淡鹽水に麻油數點を滴したもので錢を調へ蓋で和し、再び醋を入れて共に調へて送下する。（意救良方）【癆咳眞蚌粉】

【附方】反胃吐食【眞正蛤粉】を用ゐ、毎服二錢を秤つて生薑の搗汁（生薑汁）を調へて服す。

【發明】時珍曰、癆瘵、積を消し、白濁、帶下、痢疾を止め、濕腫、水嗽を除き、目を明にする。

【主】治反胃、胸心の痰飲を治す。米飲を用ゐて服す。（器）【熱を解し、濕を燥し、

能く硫黄を制す。能く石亭脂を制す。能く石華を制す。能く石華を制す。能く石華を制す。

下、痔瘻。丹石の藥毒を壓す。黄連末を入れて汁を取り、赤眼、眼暗に點ける。（日華）

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

【氣味】鹹、寒、無毒。入心、肺、脾、胃、腎、經。能治諸虛百損、氣血兩虧、精神不振、

捜し出し、酒を馳走し、多價の金を提供して傳授を受けた。それが右の方であつて、それを賣屋の住居を買つたに賣屋に託して、ひそかに金をつたへ、不安だつた一値萬^{ちかばん}の喜に、天顏大いに喜ばれて、腫れ顔方には、消^おいて丁つた。内侍からその由を早速に奏上する止、服に併せて參入し、それを妃に與へて服ませたところ、嗽はその晩のうち貼るに服んで見えたが、しかしその結果は何等の異状も認めなかつたので、三試の聲が通る。李は早速呼び留めてその貼を問いて見ると、その藥は色も淺碧の圖、戸外を「嗽の藥、一一文に貼これさへ服め直ぐ睡れる」といふ流し賣りの「だから、その當惑^{おどろ}は悲^{かな}なものだつた。涙とも別れを告げてゐると、い存なし」との誓をさせて治療を命じた。しかし李の技量を羨まねば死罪に行はれて異李を召して「誠心誠意事に當り、三日以内に治效を奏さねば死罪に行はれて異愛深ある妃が痰嗽を病ひ、徹宵眠れず、顔面が盤のやうに浮腫したので、徽宗は寵服す。〇〇類編に『宋徽宗の時、李防が内官であつたが、たまたま帝の寵

ふといつた。藏器。曰く、遠志、鹹はいつれども齊蛤を畏れる。

吳青は神農、岐伯、桐君は鹹し、毒ありといひ、偏鵲は小寒にして大毒ありといひ、又曰く、水を得れば良し【赤く、火を得れば良し。時珍。】水を得れば人の腸を爛

穀。煉粉を用ゐる。【氣味】辛し、微寒にして毒あり。水を得れば人の腸を爛

で、長短、小、厚薄、斜正一定せぬが、性、味、功用は概して同一だ。

時珍。曰く、刀は馬に似て小く、形體は狭くして長い。その類は甚だ多いもの

功。用。は。な。い。

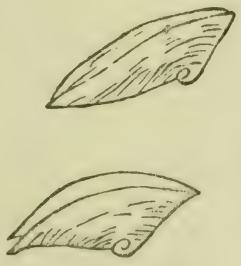
兩頭が小さく尖つたものだ。海人はこれを食ふ。別に

藏器。曰く、齊蛤は海中に生ずる。形状はやうで

で、頭が少し鋭い。一般にはやはり蚌と呼んでゐる。

頭。曰く、今は處にある。多くは沙泥中に在るもの

分のもだ。



韓保。曰く、江、湖中に生ずる。細く長い小蚌のこととて、長さ三四寸、濶さ五六

し方。に。用。ら。れ。な。い。

得ないやうになつてゐる。その樹は右に生じてゐるので、産人は石を鑿つて樹を取
 敷取つて來た。その樹の狀態は柳のやうなもので、その樹に蚌が生じて上下し

人が海中に入つて珠子樹といふものを

産がある。すが嘗て見たであらうは、

色が微く、青く、その地方それぞれの色は

が紅く、西洋珠は色が白く、北海珠は

後世では嶺南から出る。現に南珠は色

が、とあるが、嶺南の産珠であるが、

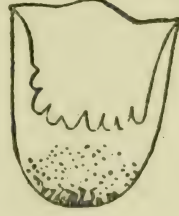
となつてゐる『とある。又、熊太古の纂集には『禹貢には「淮夷（あひん）」は魚腹に葬むられたもの

に人蚌を取るには、長い繩を振つて舟に合圖をする。それから舟人が急にそれを引き揚げ

る。蚌が珍。按ずく、い、濁水、及び流れぬ場所にあるものもその色が暗いのだ。

光る。母も、康州のもとは類似せぬ。但し清水、急流の場所にあるものもその色が白く

[蚌 珠 眞]



東省合浦縣ノ地ノ廣

【主治】心を鎮める。目に點すれば、^{皮膚}障膜を去る。顔に塗れば潤澤ならし

【氣味】鹹く甘し、寒にして毒なし

に盛り、豆腐の中へ入れ一炷香の間煮る。かくすれば珠を傷めぬものだといふ。
 おてはならぬ。人乳で三日間浸し、煮飾る。記のやうに搗き研る。ある法では、絹袋
 の時珍く、凡そ藥に入れるに、首飾に用ゐたもの、及び戸氣に觸れたものを用
 れ合せる。長三四尺で引き延びる。丸にして服す』とある。

める。漿で漬ければみな化して水銀のやうになり、浮石、蛇黄等の物をそ
 憤。曰く、抱朴子に『真珠は、徑一寸以上のものも服すれば人をして長生せし
 で濁す。淨し。曰く、細に搗いて二重に篩ひ、更に二萬回研つて始めて服すべきものだ。
 方草を各々、倒んて四兩を詰めて、漿水を入れ、火を住めず三晝夜煮て取出し、甘草湯
 兩を入れて四兩を物で支へて、よく落付やうにした中へ入れ、それ地に、五花皮、五
 段。曰く、凡そこれを使用するに、新は、いもの絹袋に盛り、平底の釜に牡蠣、四
 臟を附めるのだ。

たことのないものを粉のやうに研つて始めて服食するに堪へる。細かでないといふ人の

足ノ皮腫ハ腫ハ胸腹手
 逆腫
 疥癩
 疥癩

目を明にし、聾を治す。

方

附

【方】新九。【方】魂を安し、魄を定め、

一箇ほどと和し、一日三回服す。就中小兒に宜し、卒忤言不語、【能】真珠末

を雞冠血で和して小豆の丸にし、三四粒を口中に納める。【時後】灰塵の味【目】大

なる珠で拭へば明になる。【格古】婦人難產、【產】真珠末二兩を研末して酒中て服す。【金】腹中て胎兒の死出

せるもの【真珠末二兩を酒中で服すれば立ち出る。】外瘡【癰疽】の發せぬもの【珠

七箇を末にし、新汲水で調て服す。【癰疽】瘡、【疔毒】方は穀部豌豆の條を
 時珍曰く、真珠は陰胎、胞衣を下す【時珍】故に能く魂を安し、魄を定め、
 を解し、難産に主效あり、死胎、胞衣を安し、遺精、白濁を止め、痘、疔の毒
 【李珣】小兒の驚熱を除く【宗爽】魂を安し、遺精、白濁を止め、痘、疔の毒
 すれば煩熱、消渴を療す。方綱根と合せば小兒の熱痘、眼に入らるを治
 聾を治す【聞】聾を治す【聾】聾を治す【聾】聾を治す【聾】聾を治す【聾】聾を治す
 顔色を好くする。手足に塗れば皮膚の逆腫を去る。綿裏で耳で塞げば

時珍曰、今の方家は、ただ鹽と東流水とで一伏時煮て研末し、水飛して用ゐる。ては、ぬ。犯せば目の視力を喪ふ。

日光乾して再び萬回研つて入れる。十兩まで服したならば永く山藟を食つて光に搗いて粉に再び研り、阿膠あか十兩を入れて東流水で三回淘り、末に搗いて五兩に對し鹽を生兩の割合とし、釜かまに入れて東流水で一伏時煮てから、毀曰く、再び乳細して麴こやうになつたところ薬に入れて得るものだ。

つて搗爛し、再び乳細して麴こやうになつたところ薬に入れて得るものだ。

修治

註見。吳越金部粉錫。

曰く、凡そこれを使ふには、麴こで裏んで煨熟し、粗皮を磨り去る。

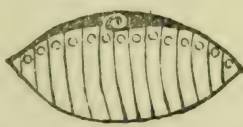
玃くわは、糟決明、酒蛤こを美味な食品としてゐるが、即ちこのものだ。

だ。ただ鰾魚けいぎょは一種の二類である。故は功が同じものだ。

物とし、楊倞けいの荀子しんの註には龜甲きこうをこの物としたが、いづれも誤り

て容易に取れない。陶氏たうは紫貝むらをこの物とし、雷氏らいは眞珠しんしゆをこの

乗じて取る。かきよく取り易いが、さうせせば緊きん粘ねん著ちやくして丁ていに



〔明決石〕

水上。酒ハ。酢ニ。替フ。行

て、内面は光があり、背面には殊更に穿けたやうな孔あなが一行に通つ

イ
者
登
州
登
萊
今
萊
州
地
方
山
東
チ

時珍曰、石決明は形が長く、小蚌のやうで扁く、外皮は甚だ粗く、孔が細かくして珍。宗曰く、發萊の海濱に甚だ多く、その地では肉を採つて料理に使ひ、また乾し、贈答品にもする。肉と殼と兩なが用ゐるものだ。
十孔の佳くない。海人はやはりその肉を噉ふ。
大いさほどの水に浸して眼を洗ふに用ゐられる。七孔、九孔のものも良く、すもんで、決明と相近い。決明の殼は、大なる手ほどあり、小なるは指三二本のつたといふそのもので、一邊が石に附著して美しく明に光るものだ。自ら一種のな貝とほ即ち今の柳螺、或はこれを紫貝とし、或は鰓の甲としてあるが、按ずるに、紫ない。舊註は、或はこれに、或は紫貝とし、或は鰓の甲としてあるが、按ずるに、紫は頤曰く、今、嶺南の州郡、及び萊州の海邊に、いづれもある。採取に一定の時期はるが、全然誤りだ。
片のみので對をなさない。七箇の孔のあるものも良し。今俗に紫貝を用ゐててゐる。恭曰く、これ鰓魚の甲で、石に附著して生ずる。状態は蛤のやうだが、一ほどあり、明かに五色に耀く。内部にはやはり球を含むものといふ。

を去つて末にし、その藥三錢つづつを猪肝を披開した中に入れて括りけ、砂瀝で
 二回服す（方）。【青盲】。【目】。右決明一兩を燒いて性を存し、外に（李珣）。【水飛

を燒じて各等分を末にし、三錢つづつを蓋い、煎水でして渣共を口に服す。毎
 白が俱に赤く、夜は雞のやうに浮眼をを生ずるは、海鮮を燒殻を灰にし、木眼
 あるとき朽木五分を加へる。（方）。【肝虛】。凡そ氣虛、血虛、肝虛で眼
 を去り、末に研つて水飛し、一回、二錢つづつを煮水で服す。淋中に軟、瘦物
 草と各等分を共に細にし、猪肝（鵝飛集）。小便五淋【石決明を粗
 錢を水で煎じて冷服する。明目集驗方】。渣後の目【眼科】。右決明を火で煨いて研り、谷精
 一（新四）。【方】。附

外障に點ける（寇宗奭）。【五淋】。通す（時珍）。【水飛しして

を明にし、障を磨す（日華）。【肝、肺風熱の青盲、内障、骨蒸勞極】。【李珣】。【水飛しして

目】。主。治。目。障、青盲、久しし服す。【別錄】。【目】。輕身を益し、身を益し、

と同功だ。

穀 氣 味

にまた三十三回糞するなどいふことがあらうか。陶氏の説は膠だ。
 あるが、既に肉のなかつたものではないか。食ひ得るわけが何處にあらうぞ。更
 い。そこで糞のあるわけがあらうか。蛤に肉のある時ならば食ふといふことな
 宗。曰く、海蛤と文蛤とに就ては陳氏の説が極めて正しい。現に海中に雁はゐな
 ひ。うなことはあるまい。

のと同じでない。假令雁が蛤が殻を食ふにしても、文と文ならぬものを擇り別けて食
 つて、あだかも爛爛と蚌蚌と蛤蛤と異なるやうなものだが、主なる功力はやはり生の
 まだ爛れない時の女の文文にあるのだ。この海蛤と文蛤とは二物とも同一種類であ
 るが、小なるものを住しとする。一一雁の腹中から出るのではない。文蛤と
 て風波に洶り洗はれ、自然に圓く淨浄になつたものだ。大なるものも小なるもの
 蔵。曰く、二説いづれも非である。海蛤とは、海中の爛殻が久しく沙泥中にあつ
 ばれて、浄浄になつたものを拾ひ取つて、偽物にする。
 文蛤、文彩文彩のないものか、海蛤である。郷人はまた、海邊の爛殻が風濤風濤で磨りへ
 日。華。曰く、これは雁の食つた鮮鮮の蛤が糞になつて出るのである。文彩文彩のあるものは

のが良いいいこふ海船は至つて一般にあるのは、多は相類するものを取つて磨^ハして
〇〇私。曰く、海船は至つて一般にあるのは、多は相類するものを取つて磨^ハしたるも
て。磨く。

時珍曰、
此は海
のうへに
漂つて來
る。蓋し
誤である。
此に正し

正誤
吳音、海蛤は文に文がある。
その文は鋸齒のやうだ。
(C. Smith)

その他の説明は下條を見よ。

だから一一づれの蛤とは區別し兼ねる。故に通じて『海蛤』といつたのだとある。蓋し類ひでないの故に、全然舊慣がなくなつたものではない。海水のため磨りへられ久しい間は、蓋し類ひの小なるは油粒ほどの微細なものであつて、諸蛤の殻散らへず、或は黄色のもの相雜する。是れ、（其の相雜するもの）時珍曰く、按ずるに沈存中の雪に、『海蛤とは海邊の沙泥中から取る。大なるは、子ほど、小なるは、油粒ほどの微細なもので、黄白や黄色のもの相雜する。粗く、滑に光るものが好しく、細か、で、淨く滑に光るものが好しく、粗く。

恭。海蛤は、巨勝子のやうに細かで、淨く滑に光るものが好しく、粗く。

海蛤、海帶、海藻、海鱉、海昆布、海葵、荔枝、等分流水で煎す。一日一服。

梧子大^{ぼと}の丸にし、一日一回、五十丸^{ごじゅうわん}つづつを米飲^{まいしん}で服用^{りようよう}す。
【氣腫】^(氣腫)聖濟總錄

巴 各 七 味 寧 蘇 赤 蘇 一 陳 皮 郁 李 仁 各 半 兩 朱 砂 以 麝 香 爲 末 以 酒 浸 之

【行水腹】腹に大きなうねりがある。海蛤丸が主効がある。海蛤を煨へ、防、

滑石、黃葵子、桑白皮各一錢、燈心三分、水で煎じ、一日一回服す。

るが妙である。【水腫發熱】小便の通せぬには、海蛤湯が主効がある。海蛤、木通、

藥六兩を末にし、研つて梧子大の丸にし、一回に十つづつ水を利用して下するまで服す

附方 薑、二、新七。【水浸、腫、痛】藏器曰、蛤、杏、仁、漢防己、棗肉各二兩、

の結胸、傷寒で反て汗し、搗搗するもの、中風難瘥を除く【時珍】

るを治す【蕭姑】熱を清し、濕を利し、痰飲を化し、積聚を消し、血痢、血婦人の血

煎中器下療す【日】(華)消渴を止め、五臟を潤ほし、丹石を服した人の瘡を生じた

下し、嗽逆上氣、項下の瘤癭瘰癧治す【醜權】嘔逆、胸脇脹急、腰痛、五痔、婦人の

水瀰急痛に主效あり、膀胱、大、小腸を利す【唐註】水氣浮腫を治し、小便を

主治 欬逆上氣、喘息煩滿、胸痛寒熱、【本經】陰痿陰痿を療す【別錄】種【二十種】

狗膽くわんだん、甘遂かんすいといひ、花馬蹄ばていは鹹かんといふ。權けん曰く、く、小毒あり。之これ。才さい曰く、蜀漆しやくしきが使となる。
岐伯きはくはいひ、いひ、いと苦しきく、く、神農しんぬは苦くといひ、
氣味きみ【苦鹹くかんし、平へいにして毒なし】
中に入いて一い伏時ふくじ蒸し、搗ういて用ゐる。
保ほ。昇しょう。曰く、これを探たしなば、半天へんてん河で五十刻ごじく煮て、枸杞きうき汁じゅうをま拌はんぜ、葶藶ていりく筒きんをま入いれて共に一い伏時ふくじは、海蛤かいがは、漿じやう水すいで三回さんかい淘たうて、一い伏時ふくじ煮て、兩りやう毎まいに地骨皮ちこつひ、柏葉はくえつ各かく二兩にりやうをま入いれて共に一い伏時ふくじは、身みたが、り、鬼物きぶつの果くわいのやうになる。ただだ酷くか、これを解かいして、立たちて癢かゆえるも投ていてゐるが、た、だこれこれは表面ひやうめんに光ひかりのないういものだ。誤ごつてこれこれを餌えへば狂くる走そうして水みづに似にてい修治しゆぢ。敗ばい。曰く、凡ばんそ海蛤かいがを使つかふ場ばう合がふに遊ゆう蟲ちゆうの骨こつを用もちゐてはなぬ。真しん似し異いはあるが、性しやうは相さう類るいし、功こう用ようも同じおなじで、甚しい區別くわつべつはない。
ものをも指さすやに見みえて、その説せつは穩うてない。但たし海中かいちゆうの蚌はうは形かたち色いろと稱しょうとに差さぬ。氏しのいふ文ぶん、蛤がはまだ爛らんれぬ時ときの殼がくを指さしてゐるが、般はん諸しよ蛤がは一種いんしゆ類るいである。陳ちん時じ。曰く、海蛤かいがといふは諸しよ蛤がの爛らん殼がくのことだ。文蛤ぶんがは立たしした種類しゆしゆである。

海蛤に同じ。

修治

の

その形は一方が小さく一方が大きく、殻に花斑のあるものだ』とあるは正にそのも
 時珍曰く、按ずるに沈存中の筆談に『文蛤とは現に吳地方で食ふ花蛤ハナカキのこととて、
 時珍曰く、大なるものは圓くして三寸、小なるものは圓くして五六分ハナカキものだ。
 背の上に斑文がある。

保昇曰く、今萊州ライシュの海中に出る。三月中旬に採

弘景曰く、大、小、いづれも紫斑がある。

はな。い。

[蛤 文]



別錄に曰く、文蛤は東海に生ずる。表に文がある。採取に一定の時期

時珍曰く、いづれも形を以て呼んだ名だ。

集解
釋名

花蛤

科名 蛤科
學名 *Moretix lusoria*
和名 文蛤

本品(經上品)

他ノ形ニ三種類有ル。種々ニ産ス。
 光リニ似ル。日本ノ蛤ニモ電
 文蛤ハ日本ノ蛤ニモ電
 (一) 文蛤(重村)

[illegible]

定め、嘔逆を止め、浮腫を消し、小便を利し、遺精、白濁、心痺疼痛を止め、積塊を
て服すれば心痛に主效がある【震亨】熱を清し、濕を利し、痰食を化し、喘嗽を
調

主 治

氣 味

【鹹し、寒にして毒なし】

誤を正して置く。

朱、寇二先輩の著書に就いて調へて見るに、いづれもさやうな説はない。此にその
二氏の説なりと証ひして引證し、陳嘉謨の本に「たそれを引據してあるが、現
時珍曰く、海蛤とは海中の浮石のことだ。石部に詳記してある。汪機は、朱、寇
石、即ち海粉、蛤粉、即ち蛤蜊殻を焼いて作つたものである。

正 誤

の事實を以てて蛤粉に註してある。二物は通し用うへるものだ。海石
機曰く、丹溪は『蛤とは海石のことだ』といつてある。寇氏は海石

て用ゐるが最も妙だ』といつてある。
て作つたものを取り、熟枯を子連ねたものと共に搗き和して團にし、風乾し
時珍曰く、按ずるに、吳球は『凡そ蛤粉を用ゐるには、紫蛤の口を炭火で煨

て口くし、香かう末等分を佐薬とし、白湯に淬ひたして服す。（聖惠方）【白濁、遺精】古
ろ、服し盡つくすと小便が便利に数箇ほど出て、癰うみをた。【氣疼、心痛】眞蛤しんかく粉を炒い
いた中に蛤粉を入れて梧子大の丸にし、毎食前に二九つを白湯で服せしめて搗こ
陷おちたたと、多くの醫師は治療し得なかつたが、一老女が、大赤だいせき十箇を泥のやうに搗こ
つた。【附方】氣虛水腫ききすいしゅ。昔、潞州ろしゅうの酒庫しゅこ攪か司し陳ちん通つうが水腫を患わづつて瀕死みんしに

る
た。

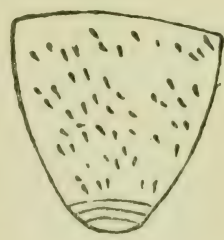
好古こうこ。曰いは。蛤粉なるものは腎の經の血分の薬だから、濕、嗽せう、腎滑じんわの疾に主效がある。
ので小便を利する點を應こた用するのだ。

屬して性の潤なる點を應こた用するのだ。濕をば滲しみを以て燥する、それは火化を經たも
は血に走る。故に能く消するのだ。堅さをば鹹かんを用ゐて要にする。それはその水鹹
の時とき。曰いは。寒は火を制して潤するのだ。潤下する。故に能く降するのだ。寒は熱を散して
【發明】震亨しんこう。曰いは。蛤粉は、能く降し、能く消し、能く要いく燥する。

火傷に塗ぬる。（時珍）を化し、結氣を解し、癰核うみかくを消し、腫毒を散し、婦人の血病を治す。油で調へて湯

やはり紫貝と呼んでゐるが、それは誤だ。

海のものを用ゐるに堪へない。背の紫色なるものを海人は味が劣る。近世では糞に多くこの殻を用ゐるが、北方で期はな。い。その肉を食つて見ると、蛤蜊のやうだが堅硬で



〔蟹車〕

能く氣を吐いて機臺を現すものだ。春、夏、秋、冬、蛤の常にしてこの氣がある。

集解

單に車螯のみを指した名稱ではなかつたらしい。大蛤のこと、即ち蟹のことである。

秋は鰓魚を『とあるところを見ると、蟹とは大なる蛤の通稱であつて、やはり蟹の鰓魚と同名ではあるが物は異ふ。周禮に『鼈人互物を掌り、春は鼈を獻し、蛟の蟹と同名ではある。』曰く、車螯は俗に詛つて昌娥蟹といふ。

釋名

科名 蟹科
學名 Isamosolen sp.
和名 嘉嘉(宋) 車螯

一、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
二、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
三、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
四、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
五、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
六、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
七、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
八、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
九、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、
十、波、更、車、木、材、(重) 柳、フ、

雑ミへて

養ウに

す

【】瘰癧レウゲイを治す

氣味

甘し

平

【】

毒なし

主

治

【】熱氣

食物を消化する

昆布に

集解

【】

藏ソウ。曰く、

蛤の類であつて、

新羅國シンラに生ずる。

彼の地で食ふ。

擔

羅

(拾)

遺

科名和名不詳
學名不詳

人に與へるに宜し、婦人産後の瘰癧を治す【】瘰癧レウゲイ

胸中邪熱の煩悶を去るに食後は丹石を服した

主 治 【】瘰癧を治すに、は、煮て食ふ。

天行病後に食つてはならぬ。

氣味 【】甘し、溫にして毒なし、洗せんふ、

肉 其の肉をば蟬腸と呼ぶ。

潮泥の打ち上げて來て沃をくのを候まち、それれを蟬田とい



【蟬】

凡。溫なり。曰。焔。寒なり。、、。焔。毒なし。甘し。平に。して。て。毒なし。【味。氣。肉。

近。海濱の。田。種。を。これ。で。用。に。似。た。の。肉。は。極。て。佳。味。あ。る。『と。あ。る。』現。に。浙。東。附。

上。の。溝。文。互。に。厚。く。厚。い。『と。あ。る。』臨。海。異。物。に。は。大。な。る。の。は。徑。四。寸。あ。り。、。背。

ノ。東。部。ナ。指。ス。浙。江。者。

蛤。や。う。に。厚。く。厚。い。『と。あ。る。』郭。璞。の。註。に。は。『陸。即。今。の。蚶。で。あ。つ。て。、。小。

時。珍。曰。按。ず。る。に。、。郭。璞。の。註。に。は。『陸。即。今。の。蚶。で。あ。つ。て。、。小。

藏。器。曰。蚶。は。海。中。に。生。ず。る。、。殼。が。互。に。あ。つ。て。、。小。

櫛。に。似。て。兩。頭。に。孔。が。あ。る。

保。昇。曰。、。今。は。萊。州。に。出。る。、。形。は。圓。く。長。く、大。腹、

と。は。至。つ。て。稀。だ。



一子聖互・蚶一 [蛤 蚌]

弘。景。曰。、。形。は。紡。に。似。た。の。も。で、、。輕。く。小。く、狭。く、長。く、外。に。縱。横。の。文。理。が。あ。る。

採。取。一。定。の。時。期。は。な。い。

。別。録。に。曰。く、。魁。蛤。は。東。海。に。生。ず。る。、。正。圓。で、。兩。頭。が。空。で。表。に。文。が。あ。る。

説。文。に。『老。伏。翼。は。化。し。て。て。魁。蛤。と。な。る。』と。あ。る。、。そ。れ。で。伏。老。と。名。け。た。の。だ。

集。解。

消し、痰積を散するのた。

發明

時珍曰、鰾は血に走つて堅をさそを要にする。故に互重は能く血塊を

【肉を連ね焼いて性存し、小兒の疳積を治す】血塊を消し、痰積を化す【震亨】

【一服す。切の血氣、冷氣、平にして毒なし】主 治

氣味

【甘く鹹し、平にして毒なし】主 治

赤く煨き米醋すこ三回、火毒を出して粉に研る。

修治

日華曰、凡そこれを用ゐるには、陳久なるものを取り、炭火で

消化し、陽を起す【鰾病】血色を益す【日華】

腰脊の冷風。五臓を利し、胃を健にし、健痰ならしめる【鰾器】中をを温め、食物を

す。丹石を服した人はこれを食ふが宜し。瘰癧、熱毒を免れる【鼎】心脊の冷氣、

主治

【瘰癧、癰疽、洩痢、便膿血】別錄

といつた。

時珍曰、按ずるに劉恂は『炙いて食へば人體を益するが、過多なれば瘰癧する。』

これを食つたならば、直ぐに飯を食つて壓する。さうせねば口が乾くものだ。時。

110

音は池(チ)と(イ)ひ、白質、黄文なるを餘泉と(イ)ひ、博くして(ニ)標なるを蛇——音は
音は脊(セ)と(イ)ひ、黒きを女と(イ)ひ、赤きを(カ)を贈、白文なるを餘賤——
——音は函(カン)と(イ)ひ、大なるを航——音は杭(カ)と(イ)ひ、小なるを鯨——
爾雅を見る(ニ)貝は、陸に在るを賤——音は標(ハ)と(イ)ひ、水に在るを蠃——
に聚り、腹の平にして折けたるは地の陰に聚る(ニ)貝は介蟲であつて、背の渾しきは天の陽
にある。故に魏子才の六書精義に『貝は介蟲であつて、背の渾しきは天の陽
に開いて相向つてて魚齒のやや齒刻があら、その中の肉は鮠(カ)やうで首と尾が
背も腹もみな白。この種の諸貝はいづれも背が龜のやうに隆(カ)、腹下が兩
時珍曰く、貝(カ)子とは小貝子とて、大いさは拇指の頂ほど、長は一寸ばかり、
で物を研るに用ゐる。
る。北方の地では衣服や麗帽(カ)に綴り付けて飾とし、理髮店で鏡の飾などにし、畫
色は微白、また深紫黒のものもある。現に多くは穴を穿けてて小兒の遊弄物(カ)にしてゐ
頭曰く、貝子貝類の最小なるもので、ややはより龜のやうな状態で長は一寸ばかり、
珣曰く、雲南に極めて多く、錢貨としてて交易に用ゐてゐる。

別録に曰く、珂は南海に生ずる。採取に一定の時期はなべ。白くして

『老』は海に人つて班、即ち轉る『あゝ』。

釋名 馬 柯 噪 綱 (目) 瑛 音 恤 (い) だ。徐 表 は 馬 珂 と して 有 る。通 典

(目録)

卷

香は

四ノ三ノ二ノ一ノ

科學和	名名名	い	Brachydontes sp.
	缺	かひ	
		貝科	

旺
(1)

(唐本)京

名缺

缺 *Brachydontes* sp.

空しく脚で食ふ(眞裏齋)

、
9
10

切 片 工 作 6 日

、
9
、
21

附方

新。一。

【癰疹の目に入らば】

興王

【面及目】

五子及禁淫

味氣

平、
咸

【つなばつ】

吳 興

○回之士

『九兵衛はてはや盃にする。』とある。

類聚上、及蟲部見ヨ。五

類聚上、及蟲部見ヨ。五

類聚上、及蟲部見ヨ。五

[illegible]

釋名

釋名 殼菜(浙地方で呼ぶ名) 蚌(音はたの) 夫人(とそはたの) 東海夫人(とそはたの) 時

設(菜)浙地方で呼ぶ名稱(海蛭音は陸(こ)い)である。東海夫人

淡(二)菜(宋嘉祐)科名和名いかり(貳)科名 Mytilus hirsutus



〔菜 淡〕——人夫海東——

○ ちてす

口。華。曰。く、
形。狀。は。尾。籠。^びな。も。の。だ。が、
甚。だ。人。體。を。益。す。

次つぎに離はなぶ、少すく量りやうの米こめと蘇そ、或あるは紫むらさき瓜うりを入いれて共ともに煮ゆべし更に更さらに煮ゆべし、或あるは冬ふゆ瓜うりを入いれて共ともに煮ゆべし、又または毛けを除はずき去はるゝ可べく、又または平へい常じやう燒やいて食たべ、或あるは苦くしくして人ひと體たいに宜よろしく洗せんす。

集解
か小さくして中に少しの毛を脚^くむ。味は甘味だ。南方の地では好んで食ふ。
頭一、珠母^{もも}に似たもので、

集解

集解

東海夫人は東南の海中に生ずる。珠母パールに似たるものなり。

甲香 修治 凡そこれを使用してするに、は、生香、皂角と共に半日煮

(孫思邈)

【主 治】黄連木を内に入れて汁を取つて點ける【藥 性】寒に合せて煮て食へば心痛を治すは

【主 治】或は三十四年に互に永き目痛には、生きた羸の汁を取つて洗ふ。或は

肉 氣味 【甘し、冷して毒なし】

てふと殼が浮き出すので、それを人間が取つて杯に作る。

居蟲がその留守に入つてゐるが、螺が還るとその蟲が外へ出て出る。肉が魚に食はれ

が鳥の形やうだ。その肉は常に殼から離れて食物をへ外部に出る。紫と

螺とふは柴貝のことだ。鰐鰯は質が白紫で、

色が紫のやうだ。味は參のやうに辛い。紫貝

て鏡の背面を飾るに用ゐる。紅螺は色が微紅、青螺は

香螺は麝を甲の香に雑へられる。老蚶は光彩があつ

出、大なるもの、は斗ほどある。日南の海中に出

時珍曰く、螺は蚌の屬であつて、いづれも薬に入れな



海

海ノ別見日 瀬石ノ南ノ 海ノ別見日 瀬石ノ南ノ

田中の活螺三升をその中に入れ、螺が粥を食ひ盡して沫を吐くを待ち、それを取り或は煮て食ひ汁を飲むも妙である。○聖恵では、糯米二升を稀粥きじゆく一斗に煮て冷まし、田螺五升を水一斗一夜浸し、渴するときに飲む。毎一回、水及び螺を換へる。は、

附方

新三十一

【水】晝夜止まず、小便の數あるに、心鏡では、

癰瘡おんそうを治す

【時珍】

を搗き爛しして臍に貼れば、熱を引いて下し、禁口痢を止め、水氣、淋閉を下す。水

【丹石の毒を壓す】（孟詵）濕熱を利し、黃疸を治す。

めば消渴を止める。肉を搗いて熱瘡に傅ける【（機）】

瀝、手、足の浮腫を去る。生じて汁を取つて飲

腹中の結熱、脚氣上、小腹急硬、小便赤

目痛を止める【（弘景）】煮て食へば大、小便を利し、

連（未）末を内に入れ、良久汁を取つて中目に注げば

【煮汁は熱を療を醒す。眞珠、黄

目熱赤痛

主治

肉氣味

大寒にして毒なし



【竈小は子】
田螺

ズトシタル食川トモ有
 毒牛、家探今し、サ
 シタル餌ニシテモ、
 鴨ル。表の類、其多
 種ノ水産ノ日、カ、
 木(一)

剛くして内柔なるをいつたものだ。
 蠶となし、蚌となし、龜となし、鼈となし、『蠶ととなす』とあるは、いつれもその外
 隨ふものだ。故に王充は月天に毀け、螺蚌に消す』といつたのだ。『説卦に離を
 時珍曰く、螺は蚌の屬であつて、その殼は旋文をなし、その肉は月の虧け
 保。昇曰く、形狀は蝸牛くわひうに類して尖つて長く、青黄色せいろんである。春、夏に採取する。
 なるは梨、橋ほど、小なるは桃、李ほどのもので、一般に煮て食ふ。
 弘景曰く、田螺は水中、及び湖、瀆の岸側に生ずる。形は圓く、大
 集解
 田(一) 贏 (別錄上品) 科名和名 学名 科名
 たに(一)田螺(科) Viviparus quadrata.
 種一にたし
 瘡。瘡。いづれも傳へる【臙器】
 主 治 甲痘、小兒の頭瘡、吻瘡、口邊の臙瘡、耳後の月蝕瘡、蜂、蛇、蟻
 氣 味 【辛し、溫にして毒なし】
 この物のことだ。

乾坤生意では、田螺一箇を水で養ひ、麝の開く俟てつて挑げて巴豆仁一箇を中に入ては、馬齒莧湯洗し、活螺を搗いて傅ければその病癒える。【腹氣胡吳】夜埋め、螺内の水を取つて瘡上に掃く。虫を止めて痛をよく刺し破り、白藥末をに入れて共に湯湯患部を洗淨する。○○孫氏は、田螺一箇を針で刺し破り、白藥末をに入れて共に瓜坤生意では、箇の中に片腦一分を入水を取つて搽る。それには豫め冬瓜小便を利するがよし。葦守約骨を用いてこれに効があつた。【瘡疥】痔瘡に傅けて小爛らしめて兩股上に傅け、冷気が足で癢を覺えて平安になる。又、丹田田螺を搗き、一日三回その汁を飲む。日に効がある。【脚氣攻注】生の大田螺を搗き、日間水で養つて泥を去り、取出して生で搗き爛らし、好酒の中に入れて布帛濾過縣民がこれ病んだと、この方を得て瘡をたえ。【酒疸】諸疸、田螺を數車前子等分を搗いて膏にし、臍上に攤いて貼る。水は排尿と共に下る。象山縣の一を養香湯で服用す。爛を研ぎ、生乾しして梧子大の丸にし、三十丸で養ひ、泥を吐出するを待つて澄し取つて晒し、生乾して梧子大の丸にし、三十丸で托上する。自然に復して再發せぬ。【反胃嘔噎】田螺を洗淨して水で

[illegible]

ほとんで散は川螺より厚い。ただ水だけ食ふものだ。春期に採り、鍋に入れて
昨日。珍。く、處處の湖、溪にゐるもので、江夏、漢江^{ハンガン}に就中多い。大いさ指頭
に残がある。

解集 別。日、く、鯛(まぐろ)、江(え)の夏(なつ)の深水(ふかみづ)中に生(なま)ずる。田鱈(たたら)より小(こ)しう上(うへ)てし。

の衆多だからこの二種の名稱があるのだ。爛敷を鬼眼時と名ける。螺蚌時○曰く師とは衆多なるをいふ。形が牛に似てその類のものも

名
齋

蛸 蠶

○紅
○割

科魚和	名	名	名
たに(瀬田)	Viviparus histricus,	Gould.	ちめりし

（二）蝸 贏（別錄）

【附方】新三。

白の頭瘡田螺殼を灰に燒き、麝香少量を入れて水調へて灌(澆)す。(海)

年古き【小兒驚風】。驚風。不傳の妙がある。(要集)。小兒を取つて研末し、烏沈湯(うせんとう)寛中散類にて調層層止まぬは水甲散が主效がある。田螺殼間の

殼を細末に研つて服用すれば、下血、小兒の驚風、痰、疥癩の膿水あるを止める【時珍】
【櫛】櫛たものを燒き研つて水で服すれば、反胃を止め、卒心痛を去る【器】器破

【主 治】燒いて研つたものは戸挂、心腹痛、失精に主效あり、瀉を止める

殼 氣 味 平にして毒なし

を存し、輕粉を入れて共に研つて傅ければ效がある。【醫林集要】

それを貼つて縛れば瘡を熱し、蒸し、碗に入れて水に化し、疥上を點ける【善】瘡紅、瘡癰、瘡十箇、二箇を殼の末を燒いて性

【疥氏】指を繞る瘡【手、足の指に生じたるは、活田螺を生で搗き碎き、

を共に碗に入れて、蒸し、熱して搗きしし、瘡紅、瘡癰、瘡十箇、二箇を殼の末を燒いて搗る。

氷片を入れて水に化し、疥上を點ける【善】瘡癰、瘡十箇、二箇を殼の末を燒いて搗る。

の【田螺を肉共に焼いて、香油で調て搽る】瘡癰、瘡十箇、二箇を殼の末を燒いて搗る。

中心の患部だから、そこを三回洗つて、墨を塗り、再び洗つて、墨のある部分

を埋めて取り出し、又あつた大田螺の中、三十分に入れば、露地に七

日、根を絶つ。冬は七夜置いて、自然に水になつたものを取り、常に搽る。

ア、五ト、軟ハ、俗ニ、

煨いて研り、油で調へて傳ける。（瘡療）【楊梅瘡爛】古、牆上の螺、蟬殼、辰砂等分、片間の年久しき螺、蟬を灰焼いて傳ける。（奇效）【湯火傷】多年の乾いた白螺、蟬殼を螺、蟬を焼いて研り、錢つづつ酒をで服用するが甚だ效がある。（孫氏）【小兒の癩】癩谷で方寸匕を服用すれば立ち止まる。（正傳）【膈氣疼】白玉散——壁上陳白螺で方寸匕を服用す。（肘后方）【濕痰心痛】白螺、蟬殼を洗淨し、焼いて性を存して研末し、酒に附方卒に起つて飲めば、攄合して觀察すれば自から肯かれる。その殼の大抵蚌粉、蛤粉、蚌、蛻の類と同功なることは、攄合して觀察すれば自から肯かれる。

發明 時珍曰、螺なるものは蚌蛤の屬であつて、その殼の大抵蚌粉、蛤粉、淵、胎肝、時疾、瘡癰、下疳、湯火傷（時珍）【主 治】痰飲積、及び胃脘痛（震亨）【反胃、膈氣、痰嗽、鼻氣、味 同 時珍曰、泥中、及び牆壁上の年久しきものも火で煨いて用ゐる。

氣 鼓 時珍曰、遊風腫【白遊風腫】螺、蟬肉を少量に入、泥に搗いて貼る。神效がある。（葉氏摘玄方）【疥癩瘡】少頃して癢える。坐して飲下す。數回にして效がある。（扶壽精方）【小兒の脱肛】螺、蟬二升、を桶の中に鋪

ノ二字、時珍曰、
ハカク、誤、燭館
ナ

共に炒り、熱し、白酒三盞を入れて煮取り、その肉を挑げ取つて食ひ、その酒を
の患者にこれを用ひて奏效した経験がある。【小山怪證方】白濁、白蠟を一盞を
し、五更にその清んだ部分を取つて服用す。二三回で血が止んで癒える。ある病
吐血し、諸藥の奏效せぬには、螺蛳十箇を水で漂して泥を去り、搗き爛らして一
を飲むが有效だ。(永類)【黃疸吐血】病後に身體、面黄に俱に黄になり、一
附方 新七。【黃疸、酒疸】小螺蛳を養つて泥土を去り、毎日に煮て食ひ、汁
す。【時珍】又曰く、燭館の二字は訛誤のうと思はれる。
し、熱を解し、大、小便を利し、黃疸、水腫を消し、反胃、痢疾、脱肛、痔漏を治
【主 治】燭館、目を明にし、水を下す【別錄】湯を止める【藏器】酒を醒
肉 氣 味 【甘し、寒にして毒なし】
に塗り込んで了ふと、數年経たずして活きかゝるものだ。
藏器。曰く、この物は容易に死なぬもので、誤まつて泥に入つたものをそのまゝ壁
らを用ひられない。
蒸すすると肉が自ら出る。それを酒で煮て食ふ。清明節後には中に蟲があるか

ある。王氏の宛か小さい。殷中の柱を炙つて食へば、形蚌に似たり。長さ二三寸、廣さ五寸、上が大きく、下が小さい。『とある。海通海岸に死んで、善通海岸に死んで、劉恂の贊表録には、『海月は大いさ鏡ほど、その玉は玉のやうに美しく、白色、白く、時。曰く、解集

○ 2426 物

因つて名けたものだ。萬雲の贊に『厥^マ甲馬玉跳としはこゝろある形色にて煮ればやはり變じし水となる時。曰く、甲馬玉といふは氷か沫化したもので、類であつて、半月に似てゐることから名けたのだ。水の變化したもので、略して、王跳音は（ヨエ）姚で、江跳馬順馬甲海月日は名

釋名
王跳音は（ヨエ）姚
江跳馬順馬甲海月日は名

科學和名
和名 帆立貝科
Pecten linguatus, Sowerby.

海(1)月拾(遺)

氣味 主 治

(一) 鱈魚ハ座蒲團、
 Star-fish,
 英名、
 古来リ
 白井日
 不詳、
 後チ放
 木(重)
 日、

海

燕

(綱) 目

科名 和名 不詳

不詳

集解

くして、面が圓く、背上が青黒、腹下が白い。海鰐うなぎのやうに脆く、鱈魚のやうな紋があり、口は腹下に在つて細沙を食ひ、口の傍に五本の眞直、又は勾かぎになつたものがあつて、それが即ち足である。臨海水土記に『陽遂足は海中に生ずる。色は黒で腹が白く、五本の足があるが、頭、尾が判ない。生きても時に體が要いかたが、死ぬれば乾いて脆い』とあるはこの物だ。臨海異志の記載に『燕魚は長さ五寸、陰死ねば一丈餘も飛び起さるが、これも或は同名のものだらう。』

氣味

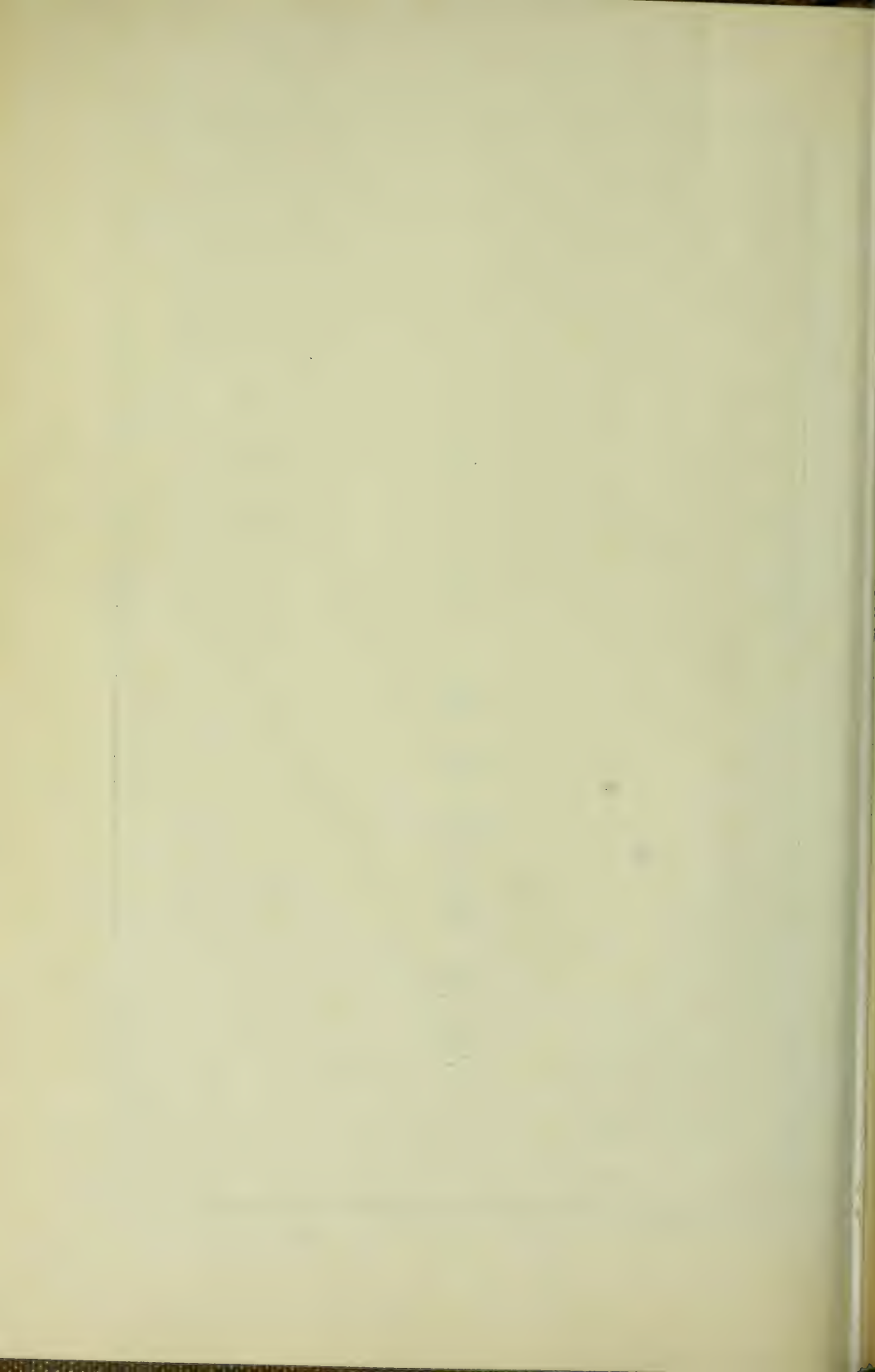
鹹し、溫にして毒なし

主治

煮汁を服し汗を取れば解す。また滋陽藥にも入れる【時珍】陰雨の際に損痛を發するに、は

本草綱目卷第四十七





方附舊七新十七

蚊母鳥拾遺

食物

嘉祐

養別錄

算別

卷之四

在焉
嘉祐

一、

水禽類三十三種

羅真淵

王好古湯液

實收資本

五
海
神
仙
圖

書四庫

庫本與蘇

庫本與漸

平士溪留好

平士寒留好

辨別
繁瑣

目 上 附 。

聚珍齋

食物

目錄

鷓鴣菜

陳嘉謨蒙峯

朱震亨補遺

庫本與蘇

平士溪留好

非盜加附。

食物

嘉祐

目錄

算學

齊徐之才醫經

宋雷擊炮头

吳普本草

觀本堂之藥錄

附註

本草綱目五種明の李時珍。

圖經本草一種宋の蘇頌。

嘉祐本草十三種
宋の掌禹錫。

食療本草二種
唐の孟詵、張鼎。

唐本草一種
唐の蘇恭。

神農本草經五種梁の陶弘景註。

獸部より一種を移入し、蟲部より一種を移入し、有名未用より一種を移入した。

舊本爲部三品共五十六種の内、本書にては一種をば併入し、

書なものと注意を用するものもを掲載してゐる部と、すべし七十七種を水筒、原

は陽を養ふものである。こゝにはその食料品、薬劑として用ゐられるもの、及び毒

[illegible]

る人々の物に於ける(三三)用金、(三三)變の意は、(三三)以上で走然ではなかつたところと一致する。

種現在鳥類、留鳥、候鳥、萬

、田(重木)五元。指入。

二(四)記入玉藻玉制ヲ

○ 川(三) 舍入 取扱 三回

二天鳥入惡鳥子指

ヲ
大
ト
誤
。 八
所
十
ヲ

かへサズ集ハト讀ム。

物、幼稚ニ同シ。天下ト云

サハ好ト讀ム天ハエ

風二見工。

(七) 雄雉 詩經 邶風

燾。燾其
 今。其
 下。其
 正。其
 下。其

時ノ官名、九層ノ

民ヲ聚ムヲ以テ職



【水に磨つて服すれば毒の毒邪を解す】（嘉祐）

骨 主 治

載は酒幼全書にあり。

少少はかいらめ。少少はさきと出さく。さくさく。【時珍】食てへ頭小兒を一つ一つ。

卵(三) 氣味 【甘く鹹し、平にして毒なし】 主治 【痘毒を豫防し、多し】

【子抱】

主 治 【天 雄、

鶴の血を獻じて飲まして。人の氣力を益すと云ふとある。

發明 禹錫曰、按ずるに、穆天子傳に『天子』
巨蒐に至る。二氏、白

風を去り、肺を益す【嘉祐】

白鶴血
氣味
【鹹し
平に
して
毒な
し】
主治
氣力
を益
し
虚
を
補
ふ

作るに及ばず

思之息の舞
ふつハ
『
女多子中女
ハ
女ハ
之ハ
死
ハ
星
ハ
程

中
山
縣
志

[illegible]

ト。胎化胎生。コ
 (九) 胎化胎生。コ
 (八) 胎化胎生。コ
 (七) 胎化胎生。コ
 (六) 胎化胎生。コ
 (五) 胎化胎生。コ
 (四) 胎化胎生。コ
 (三) 胎化胎生。コ
 (二) 胎化胎生。コ
 (一) 胎化胎生。コ

す、胎化する。』とある。又按ずるに、愈琰は『龜鶴は能く任脈を運らすものだ。して雌雄互に視合つて孕み、千六百年に形が始めて定まる。飲むけれども食は毛が落ち、毛が生え、或は雪のやうに白く、或は漆のやうに黒い。六百六十年大又七七年にして産伏する。又七七年にして羽が具はり、又七七年にして飛んで雲漢に薄み止まり、林木間に集るといふことがない。二年にして毛を落して雲點を易へ、經には『鶴は陽鳥だ、陰に遊ぶもので、その行動は必ず洲や渚、若くはその附近に棲け降り、雌は下風に鳴き、雄は上風に鳴き、交つて孕む。蛇、鴈をも食ひ、降真の煙を聞上た灰色、蒼色のものもある。常に夜半を以て鳴き、その聲は雲霧に響び、雄は目赤く、頰赤く、頸赤く、脚青く、頸修く、尾濁く、膝粗く、指纖く、羽白く、翎黒く、時珍。曰く、鶴は鶴より大きく、長三尺、高さ三尺、喙の長さ四寸、丹頂にして、薬用には白く、他の色のものはこれに次ぐ。蒼いものもある。黄なるもの、玄いもの、白く、鶴には白いもの、玄いもの、黄なるもの、蒼いものがある。』

集解

ベノ鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
二十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
三十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
四十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
五十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
六十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
七十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
八十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十一鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十二鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十三鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十四鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十五鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十六鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十七鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十八鳥ノ毛ノ羽ノ前部
九十九鳥ノ毛ノ羽ノ前部
一百鳥ノ毛ノ羽ノ前部

翅、尾は供に黒い。多く高く木に集ひ、その飛ぶ有様は、勢よく大空高く揚つて旋
時。曰く、鶴は鶴に似てゐる。頂が丹でなく、頸が長く、喙が赤く、色は灰白
設。やうな事實は一向になつた。
作つてゐるものだ。嘗て朝タタの鳥を注意して見たが、池を作つて魚を養ふといふ
た。善く喫ばず、た。喙で相撃つてたけの鳴くもの。多く樓殿の屋根の端に葉を
宗。曰く、鶴は、身は鶴のやうだが、頭は丹頂がなく、鳥帯がなく、これと
黒。色にして、頭の曲るのも、鶴の鳥を、今はいふ。白いものを用ゐる。うさもものとなつてゐる。
集。解。曰く、鶴は、黒い尾の色が黒いものだから、陸機の詩疏に、（時珍）黒尾（同）（負）（詩疏）（君）（皂）
たのもで、その背、尾の色が黒いものだから、陸機の詩疏に、（時珍）黒尾（同）（負）（詩疏）（君）（皂）
釋名。鶴は、黒い尾の色が黒いものだから、陸機の詩疏に、（時珍）黒尾（同）（負）（詩疏）（君）（皂）

鶴 (一)
(別録下品)
科 鶴科
名 名
和 名
学 名
Ciconia boyciana, Swinhoe
科 (鶴科)

市裏

主 張

【小兒の天釣てんてうの風ふう】

或は出てゐる【時形】記載は活字書にある。

卵主 治

王

異

【註】○解。

満にいは、いづれも煮汁を服用し、また灰に焼いて飲んで服す【臓器】

(戲器)

脚骨及嘴 主治

(四)

嘉

吳王

○ 女 子 小 子

に方寸匕を暖酒でて服するもよし。時珍曰く、千金には、尸痲を治するものに龍骨丸

の諸君、五、心腹、曰く、單獨にこれのみを黄に炙いて研り、空心

主 治 頭を落す、髪が盡く脱けて再び生えない。又、樹木を枯らす。

主

骨 氣 味 【甘、大寒】にして毒なし。職。器。曰く、く、小毒あり。沐浴に入れて

【廿し、大寒にして毒を】

氣味

०३२२५

を
取
ら
う
か。
況
や
鴈
は
水
鳥
な
ら
ば、
雨
に
も
な
ら
ず、
陸
機
の
詩
疏
の
幸
張
の
博
物
志
に
出
た
か
ら
い
か。
池
を
作
る
か、
か、
馬
鹿
が
右

時珍曰、按ずるに、劉欣期の交州志に、『鷺鷥、即ち越王鳥である。』

集解 越王鳥(綱目) 鷺鷥(同) 鷺鷥(同)

科名 鷺鷥科 Platulea minor, Temm. et Schleg.
和名 鷺鷥 目(綱目) 鷺鷥目

【水蟲の毒を解す】(時珍) 記載は卑雅にある。

【正】(要) 精、髓を補す

主治

【甘し、温し、魚骨唾】(注) 温にして毒なし

氣味

【魚骨唾】(注) 温し

主治

氣味

毛

主治

【水蟲の毒を解す】(時珍)

主治

記載は卑雅にある。



【中】(注) 氣を益し、氣を益し、甚だ人體を益する。灸つて食ふが就中美味だ。肺に於いて日常の食事にすれば

主治

【毒】 魚の中

氣味

【鹹し、微寒にして毒なし】(正) 要。

鴨、青木(魚)
重(魚)
日(魚)

【味】鹹し、平にして毒なし【赤白久痢で痔となつたるに主效があるが、(藥)】
【附方】新二。【耳聾】淘^{たう}油^{あぶら}、磁石、小豆、白豆、麝香、少重を和勻し、綿

扱^あくも^もの^のだ^だか^から^ら、能^{のう}く^く聾^{そう}、痺^{しび}、腫^{はれ}毒^{どく}の^の諸^{しよ}病^{びやう}を^を治^ちす。
【發明】時珍曰、油、性走、能^{のう}く^く諸^{しよ}藥^{りやく}を^を導^{どう}き、或^{ある}は^は患^{わづ}部^ぶに^に透^とつて^て毒^{どく}を

【主 治】【主 治】癰^{おん}腫^{しゆ}に^に塗^ぬり、風^{ふう}痺^{しび}を^を治^ちし、經^{けい}絡^{らく}に^に透^とり、耳^{みみ}聾^{そう}を^を通^とず

【氣 味】鹹し、温^{ぬる}、滑^{なめ}して^て毒^{どく}な^なし【主 治】癰^{おん}腫^{しゆ}に^に塗^ぬり、風^{ふう}痺^{しび}を^を治^ちし、經^{けい}絡^{らく}に^に透^とり、耳^{みみ}聾^{そう}を^を通^とず

【氣 味】鹹し、温^{ぬる}、滑^{なめ}して^て毒^{どく}な^なし【主 治】癰^{おん}腫^{しゆ}に^に塗^ぬり、風^{ふう}痺^{しび}を^を治^ちし、經^{けい}絡^{らく}に^に透^とり、耳^{みみ}聾^{そう}を^を通^とず

【煮汁は消渴を止める】

【五臟を利す】

【五臟の熱を解す。丹石を服するに宜し】

主

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

【別錄】

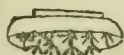
【別錄】

【別錄】

【別錄】



【蛇】



氣味

白膏 臘月 鍊つて 取收める。

治

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

【主】

【耳】

○
ノ
フ
ハ
何
カ
ニ
シ

（三）江淮見。水部雨水。

南支(ト)稱ス。
北支(エ)ハ

(一) 木村(重)曰、多シ
家蔵ハ白モ多シ
爲サレノ本ナリ
日本ノ草書ニ
三。書

は最もあつた。

毛皮

呈

る。焼いて性を存して研末し、水で一方向に服す【(嘉)前】

本草綱目卷之七十四

卷一

經名

家雁綱目

舒雁

○狂
○制

、口

は
自

和

5. 7.

山名錄

子

३५

272

毛皮

景

四

味和

二八

王
呈



品

疔瘡

(証判)

10

喉中に粘著して出ないものゝを穀賊と名ける。たゞた意延を灌げば癒える。』とある。蓋咽時。按く、咽の夷遣の、誤つて小兒が誤つて稻^{いね}を吞み、咽

【發明】

【主治】咽の穀賊^{時珍}【時珍】

すれば瘡疾を發す【孟詵】

【氣味】

【甘し、溫にして毒なし】

【主治】

【中】をを補し、氣を益す。多食

指で塗る。立ちに效がある。劉氏保壽堂方^{（方）}。腦半分を入れて研勻し、氣の泄れぬやうに蓋器に入れて密封し、使用するにには手片^{熊膽二片}、

【附方】

【時珍】新。一。瘡の核あるも【白麝膽】三二箇から汁を取り、

【氣味】

【苦し、寒にして毒なし】

【主治】

【熱毒】をを解す。また痔瘡の初

る。

【氣味】

【鹹し、平にして微毒あり】

【主治】

【射工】中毒には、これを用

【手足】の皸裂に塗る。【耳中】に納れば、聾、及び耳を治す【日華】

ふのた。

【方附】

新二

【散氣通】

誤つて

銅錢、及び

銅繩を

吞みたるに

は、驚毛一

の詩に『驚毛腫を藥を山を縫ふ』とあるがそれである。蓋し毛と肉とは性が異に柔にて暖だが性は冷である。嬰兒に尤も宜く、能く驚毛を射ける『とあり、柳子厚に物志には『巴州の蠻地では驚毛を毛を採取つて衣服や寝具にする。綿嶺南異時珍。曰く、禽經に『驚毛飛べ』とある。蠟とは射工の蠟とだ。又、嶺南異威力で相制するのだ。

【發明】

弘景曰く、

東川には

驚毛が

多いが、

驚毛を煮つてそれを辟ける。毛羽

【主治】

射工水毒

【別錄】

小兒の驚毛、

又、灰に焼いて酒で服すれば

し驚涎の殺を治すは相制の關係だ。

2。
驚毛腫物云
註ノ巴州ハ見
蜀ノ金部自然

川者ノ東川トハ東部ト今指ス。四

羣り宿りしてその内の一羽が巡警し、晝は蘆を脚^{あし}を避けて、夜は智である。これは節である。これは配^{あて}と他と配^{あて}を失へば再^{また}配^{あて}者である。これは禮である。飛ぶには行列の順序があつて、後方のものが鳴き、前方のものがそれと和す。

往つて鴈門に歸る、これは信へ

に止まり、熱ければ南から北へ

れば北から南に來て、寒くな

のだ。鴈は四德あつて、寒く

これは雅雅とあるもの

野鷺^{あひろ}と、たつた鷺^{あひろ}と、いいふ。

なるもの蒼とし、蒼いもの

して小なるものを、鴈とし、大

く、今は一は一般に白く

〔雁〕



時珍曰、鴈はその形状は意に似て、や、

を取つたものだ。

もんだ。禮幣にこれを用ゐる意味は、一

はそれはその選はざる信を取ら。一はそれはその和

（）禮幣へ贈答品。

上白子加木ヲ、シ、

（）城者縣、陽、國吳、

江。こ。北に渡る可し』とある。やはり一箇の壺を持つて流に入るやうなものだ。

て取り、その毛で暑氣を禦く』とあり、又、雅南萬華橋には『鴻毛』で囊を作れば鴈時珍曰く、按ずるに、西陽雜俎に『臨邑地方で春、夏に網で鴻、鴈

【發明】

毛を小兒が佩びると驚怖を辟ける【日華】

【主治】

【毛】暖下の白毛は小兒の癩を療するに有効だ【蘇恭】

【主治】

【骨】灰に焼く、米泔に和して頭を沐すれば髪を長くする【孟詵】

を。知るものだから、それで食はぬといふのであらう。道家ではこれを天が厭ふといふ。

らしい。宗頤曰く、一般に鴈を食はぬが、それはその物が陰の陽の升降、少長の行の

【發明】

弘景曰く、鴈肝は一般に多く食はないが、その肉はやはり好いもの

を利し、丹石の毒を解す【時珍】

【主治】

【臟腑】風麻痺。久しく食すれば氣を動し、筋骨を壯にする【日華】

ぬ、人の精神を傷めるものだ。禮に鴈を食ふには賢を去る。人に利にあらずとあ

【氣味】

肉甘し、平にして毒なし【思邈】、七月には鴈を食つてはなら

其肉大寒。二ノ字アリ。下ニ

附方 生髮鴈肪を毎日毎に塗る。(千金方)

珍曰、外^外にこの證を治する鴈肪とていふがある。

しめ、人^人體を白くする【日華】癰腫、耳^耳に疥癩に塗る。又、結熱胸痞^{ひんげん}嘔吐を治す時。

せ。瘡を肥えたるを、勞を補し、に丸にして用ぬれば、勞を補し、肥えたるを殺す。

【髮】髮、眉^{まゆ}を長くする【別錄】生髮膏に合せて用ゐる。諸石藥の毒を殺す。

に曰く、上^上記の證には、鴈四兩を録し、毎日空心に匙一つを暖酒で服す。【毛】毛、

心の。久しく服すれば氣を益し、身を軽く、老に耐へる【本經】通利せぬ。

氣味 【甘】平、毒なし 【主】風^{ふう}鬱^{ふく}拘急^{こうきふ}、偏枯血氣、通利せぬ。

亦た鴈肪と名く『とあるが、これは鴈と鰐と相似てゐるので誤つたのだ。

鴈肪 正誤 【一名】鴈^う肪^{ほう} 【弘景曰く、鴈とは野鴨のことだ。本經に『鴈肪、

色^{いろ}の鴈なる記載がある。

て往くと肥えたるから取るに適當の時期だ。又、漢書、唐書にはいづれも五

る。それは思ふ一點だ。南向つて來るとは、瘦せてゐて食へないが、北に向つ

とろがこれ捕る者が、その特長を利用して置くつて置いて、同類^{れい}を誘^{おび}ひ寄せ

無。い。こ。は。鴈。油。を。以。て。代。用。す。る。)(通玄論)

附方 疳耳で膿の出るもの 【天葵油で草烏末を調へ、龍腦少量を入

小兒の耳を治す【珍珍】

油 冬期には脂肪を取つて鍊ねつて收めたる。

氣味 缺

主治 【癰腫】に塗る。

し、
職附を利す
【時珍】

頤。曰。く。冷なり。忽氏。曰。く。熱なり。

主治。【懣け、炙つて食へば人の氣力を益

肉 氣 味

それが特殊地があるところである。

い。い。つれも大金頭墓に及ばぬだ。

ふと翔ける響がある。その燾の肉は微し
 腔たがひの

(三) 花斑になつてゐる。一種は不能鳴養で、

ふは形がやや小さ。い。花臺といふはそれの色が

エの上級品で鴈よりも美味だ。小金頭鷲といふ

金頭鷄といふは鴈に似て頂が長い。食料として



紋アリ花斑ハ羽ニ斑

○ 漢江指

清明、即ち三月三日以後に卵を生む。それで内陷して肉が充満してゐない。卵を抱
 ものだ。雌はみな雄は瘡啞あやで鳴く。重陽、即ち九月九日以後には肥えて美味だ
 のみである。又、白くして骨の黒いものがある。これは薬として食物として更に佳
 いに。雌は頭は緑色で翅に文があり、雌は黄斑が一つ一つは純だ黒と純白論
 に。時珍。按ずるに、格物論

集解

明瞭だ。

あつて見れば、家と野との別は益、自から
 とある。鳥と鳥とが対照して言はれて
 將た汎として水中の鳥の若くなく平
 寧昂として千里の駒の若くなく平。
 轉を抗せん平、將た雞養と食を争はん平。
 けがあらうか。屈原の離騷に『寧ろ麒麟と
 けがあらうか。』とある、いかでか家鴨であるわ
 野

〔驚〕 鴨



その意味も自ら明瞭である。按ずるに、周禮に『熊人養を執る』とある、いかでか野

舒、誤。珍時、野、

०३२२७

に『落霞と孤鶩と齊いっしょに飛ぶ』とあるに見れば、鶩うの野鴨うなることは明である。勃
宗そう。夷い曰く、この數説すうせつに據ると、見るとはいいづれ鴨であつて、王勃わうはく滕王閣序

は名だたる者だから必ず根拠あつていつたものには相違あるまい。

寇は鴈を野を驚く、以上四氏の説では雅を引いてつて舒鳥は野鳥としてたが、いづれも誤

[illegible]

正誤 弘景曰。く、藤、即ち鴨であつて、野鴨と家鴨とある。
 緩して飛へないものからか、舒眉といふ『とある。
 聲か呻呻といふ、そのの自ら叫ぶ、聲をとししたのだ。身は能く高く飛ぶが、鴨は舒舒

正誤

様は鹿人耕稼を守るやうなものだ。
 蔵。器。曰く、戸子に『野』を鳥といひ、
 家鴨を燕といふ。『ふ』とある。飛翔ひやうを得ない有

保。○昇。曰。く、耐雅野鳥に『とあるが、しかし本草に藤防はくぼうとあるは家鴨

主 治 【虚を補し、客熱を除き、臟腑、及び水道を和し、小兒の驚癇を療す】

と、稀米を用いて療する癇をたといふ。その例は稀米の條に掲げてある。

尾 膝を食つてはならぬ。體記に記載がある。昔、ある者が鴨肉を食つて癍となつた。

人 食つてはならぬ。時珍曰く、いものに毒がある。老いたいのが良し。

脚 氣を利す。目の白いもの食つてはならぬ。人を殺すものだ。瑞曰く、腸下血

れたものだ。洗。白く、白鴨肉が最も良し。黒鴨肉は有毒で、中を滑し、冷を發し、

肉 氣 味 【甘し、冷にして微毒あり】 弘景曰く、黄雌鴨は補するに最も勝

へて傳ける。(水類方)

附 方 新 一 【癰の汁の出るもの汁が出して止まぬには、鴨脂で半夏末を調

し 思 選。白く、甘し、平なり。主 治 【風虚寒熱、水腫】 氣 味 【甘し、大寒にして毒な

とある。

とある。

抱かかせずして解すには牛屎で圍つて産み出す。これはいづれ物理の不思議だ『
雌に

ば癒える。その消毒の作用を取るののである【時珍】

肺衣 即ち臍の内皮である。主 治 【諸骨硬には、一、錢を水に研つて服すれ

赤目の初期に點ける効がある【時珍】

膽 氣 味 【辛く、寒にして毒なし】 主 治 【痔核に塗るが良し。又、

記載は海上にある。

又、蛇に咬かれた小兒の陰腫を治するには、雄鴨の取つて抹すれば消【時珍】

涎 主 治 【小兒の瘰癧、頭、及び四肢みな、は、鴨涎を滴す。

舌 主 治 【痔瘡に蟲を殺す。相制する力を利用するのだ【時珍】

る。(摘玄方)

ものを痢下するには、白鴨を殺してその血を取り、後つた酒に泡けて服すれば止ま

【時後】あらゆる蟲毒を解す【白鴨血を熱飲する。】(廣記) 小兒白痢 魚凍に似た

外に竹筒でその肝門に吹き込む。これに試みれば氣を通じ易くして活る。

はいづれも雄鴨を取り、死の口に向けてその頭を断つて口中に血を灑し込み、

【中惡の卒死】或は先づ病むて痛み、或は就寝中突然絶命せるに

附方

新三。

根スルコト。後方ニ返。
性ハ後料ノ味ニサト共。
木(重村)曰ク、
舌(木)ハ、

す。またた溺死者にはこれを灌げば活き。る。蛇蝎へちまの咬くははてを塗れば癒なをえる【時珍】

【主】熱血は生金、生銀、丹石、砒霜ひしょうの毒中射工の毒を解す。又、中惡を治

解す【別錄】熱し飲めば野葛の毒を解す。已に死せるもの咽に入れば活なをる【諸毒を

主 治】白鴨の良し【氣味】鹹し、冷しして毒なし【主 治】諸毒を

腦 主 治】陳腐にはこれを取つて塗るが良し【時珍】瘡かさを加へる。外癰げいよう秘要

日三回、七十九つ湯を木通鴨頭血と共に猪苓しゆれいを三つ、梧子この丸にし、一

膏し、漢防己かんぼうき末二兩、綠頭鴨の血と頭を共ともに三つ、甘草かんさくを炒やして二兩を煎

治し、その效神の如き鴨頭丸【陽水腫てて顔面赤く、煩燥し、喘急ぜんきつし、小便の澀るを

附 方 新 一。【鴨頭丸】陽水腫てて顔面赤く、煩燥し、喘急ぜんきつし、小便の澀るを

主 治】雄鴨の良し。【主 治】煮て服すれば水腫を治し、小便をを通利する

【主 治】煮て服すれば水腫を治し、小便をを通利する

を鴨腹中に入れて縫合し、蒸熟して食ふ。

を和して粥に煮て食ふ。又ある方は、白鴨の一羽を淨治し、豉ち生薑せいしょうと椒か

の死に垂たたるを治す。青頭鴨せいとうもくの羽を普通のやうに庖丁を入れ、切つて米、并な五味

體たい二に豉ち生薑せいしょう大だい作さく升しやう升しやうリ。

ある。【乳石】の発動、煩熱するに、は、白鴨通合湯を湯一合に、蓋に漬け、澄清して、【方】新。二。【石藥】過熱【白鴨】末にし、錢を水で服すれば效が

【附】汁を絞つて服すれば、金、銀、銅、鐵の毒を解す【時珍】

【孟詵】又、雞子白と和して熱瘡腫に塗れば消く。蛇蝎咬に塗つても效がある【

なし】主 治 【石藥】の毒を殺し、結毒を解し、音熱散す【別錄】熱毒、痼疾、

白鴨通 即ち鴨屎である。通馬通の場合、通義だ。【氣味】冷にして毒

蓋し鴨肉は能く痼疾を治し、妙薬も血痼を治す、その關係に因るものだ。

の語に、小兒の泄痢に、卵炙つて食へば、やより瘰癧するものもあるといふ。

【發明】時珍曰く、現に世間で鴨子臓を、し、その方法もさざだが、俗間

でなくなる。主 治 【心腹、胸膈の熱】(華)

く、鴨肉、李子と食合せばならぬ、人體を告ぐものだ。惟と食合せば産兒が順

體に宜し。士良曰く、瘡毒を生じた人がこれば、肉を突出せしめる。弘景曰

呼吸短くして背悶せしめ、小兒が食すれば脚軟なる。鹽でて食ふ人が

卵 氣味 【甘く鹹し、微寒にして毒なし】多し、食すれば冷氣を發し、

る。

あは摘むに

記載は

【時珍】探しては

解するに

【挑生】

主 治

血

【日華】

水腫を治す

、殺すに

【腹一】

腹一

治すに

及

【熱毒風、

【孟詵】

食へば

癒えぬに

【年久】

熱が

【小熱】

諸

【二種】

食物を消化し

、胃を平し

【中補】

主 治

【日華】

い。

【木耳】

食合せ

【胡桃】

【日華】

【病入】

物

【勝る。】

【家飼】

【益す】

【甘し】

【涼し】

肉

【説。】

【九月】

以後、立

【春以前】

食

【は、】

【動し】

【な】

【いづれ】

【冬期】

【取る】

【へき】

【だ。】

【上は】

【頭上】

【種一】

【海中】

【といふ】

【冠は】

【有魚】

【変化】

【は、】

【食用】

【は、】

【ある。】

【『耐へる】

【肥えて】

【謹願なる】

【とて】

【鳥は】

【掌紅く、】

【脚卑く、】

【尾長く、】

【喙短く、】

【女あり、】

【背白色】

【似て】

【は、】

【陸機詩】

【『飛鳴に】

【だ。】

【食ひ盡す】

【梁や、】

【稲に聞え、】

【雨來た】

【は、】

【飛ひ、】

【天に夜に】

【朝や】

【して、】

【群をなして、】

【數百羽】

【あゝる。】

主 治 諸癰、疥癬。酒に浸して炙き、熱して瘡上に傳貼あてし、冷えれば易へ

曰く、多く食へば大風を患あへはしめる。

毒どくな。し。曰い瑞ずい。酸さんし、く。毒どくな。し。説せつ。

毒どくああ。曰い孫そん。苦くし、く。微い温うんにして小

肉 氣 味 鹹かんし、平へいにして小

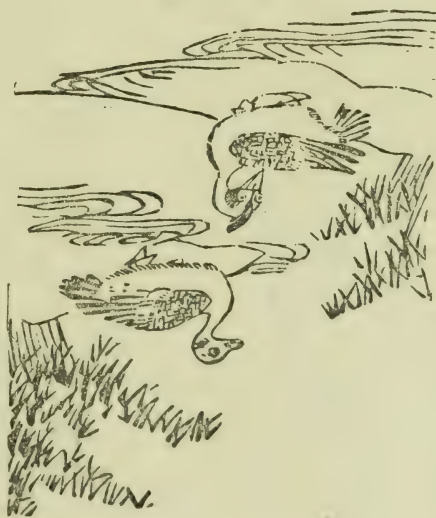
接せつは再さいしな。交こうは交こうへて臥ふしし、その

は紅こうで、頭かぶに垂たれ、白はくい長なが毛もうがあつ

は紅こう、質しつは杏あん黄わう色しきで、文ぶん形けいがああり、頭かぶ

棲せいむもものので、大だいいいは小せういい鴨もほほて、

に 湖うみ、南なん方ほうのの中ちゆうにある。土ど穴けつ中ちゆうに



集 解

に 時とき珍しん。曰い隣りんとといい提だいてある。

一 羽はをを獲とるととと殘ざんりののの思し慕ぼして死ぬ。故ゆゑにこれをを西せい鳥てうといふとある。混こん樂らく經きやう

釋名 鶯黃鴨綱目西鳥時。く、鶯黄鴨は鶯といふのだといふ。鶯の意を合んだ名だ。或は、雄の鳴聲は雄雌離れず、人間がその鳴と雌の宛と

(二) 鶯
鶯(宋嘉祐)
科名和
科名和
名入
Dendrossa galericulata, (Linne.)
なにしやい

【手号々種ハ丹魁ニ耳】
器機

で来いて食へば甚だ美味だ【時珍】記載は正要にある。

肉 氣 味 【甘、し、平】にして毒なし 【主 治】中氣を補し、氣を益す。五味

なるものも『やい』と云ふが、それだ。

鳥の甚だ小よくして好んで水中に没するものを、
 (三)楚から以南でほは臨瀛といふ。

脂が多々として美味だ。冬期に取る。その種類のもっぱら。揚雄の方言に所謂『野』

時珍曰、鴈は南方の湖、溪に多くゐる。野鴨に似て小さく、青白の文があり、

るものをつ鴨と名ける。最も美味なものだ。

[illegible]

湖南兩省ノ地ヲ北

シ、(可) 白能
帽ヲ。接ニ。鷺同

イフ。江蘇(三)安、揚、今ノ地ヲ。東、青、(三)齊、今ノ郡、北、今ノ郡、山



集解

白鷺と云ふ。『ふとあふ。』

時珍。

鷺は水鳥であつて、林間に棲息し、食物を水中に取り、列をなして長く、脚は青く、善く翹げて一、二尺餘くして長く、尾は短く、喙は長く、三、四寸、頂に十數本の長毛があつて、絲のやうな毛に、然るに、強す。郭景純は『毛は白く、趾は白く、作れるも、變化する。』といつた。變化論には、鷺は目を以て時に『といて、胎する。』とある。視て受胎する。『といて、胎する。』とある。脚の黄色を、顔、く、白く、似て頭に、絲がなくな、

釋名
『赤』とある。この鳳凰の屬なれど、又、江中鸞鶴に呼ぶ鳥が、轉化したものらしい。蓋し月説文に「赤い」とある。この鳳凰の屬なれど、又、江中鸞鶴に呼ぶ鳥が、轉化したものらしい。蓋し月説文に「赤い」とある。

名錄

卷之四

紅
知

聽、

なる

梅の

氷は黒

ハ
ヲ

按寸

許

6

科學和名
名名
Casmeradus albus (Linne.)
名名
科(蠟)科

(八) 擧

王醫士

晉

鳴

2


(一) 木村(重)曰、たゞ、
延也、其期ハ背ニ
長テ殖スル毛ヲ生
自、鵝ト細毛ヲ棲
定メ亞細ヤ老
假ニ洲。賦。

色に耀く。三日月を産む。羅氏は青黒日あやう隊長く、小生ずる。白鷄の飛んてでても、海、湖、に生ずる。白色は鶴の形もく、鷗は南方の江の時珍。

誤た。

集解

[鴈]



類敗ノ註ヲ見。三。
二江夏ノ註ヲ見。三。
rdoff) + 。

mus major, Mi

が、それは誤だ。

る。陶氏のいつた鳥魚の變化した鳥とはこのもの、或は鶴のこゝたとといふ
く、背上が緑色で腹背の紫白なるものがあつて、これは青鶴、一名鳥鶴と名
にも水に堪へるころから、舟首にこれを畫いたもの、又、鶴に似て項が短
て吐雛を鶴としたりが、蓋し鶴と鶴とは發音が似てゐるから、だ。善く高く飛び、風

らず。而して風化するものとあるもの、昔の人は誤つ

口からその子を吐く。莊周の所謂『白鶴は相視て時^{とき}子を運^{はこ}

鳥だ。雌雄相視て雄が上風に鳴き、雌が下風に鳴いて、^は孕み、

鶴に似て色が白。一般の人が誤つて白鶴といふのはこの

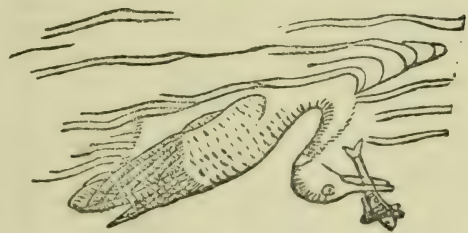
時^{とき}。曰く、これは一種の鳥であつて、或は鶴とも書く。

で、事實ではない。

のを見た。陶氏、陳氏の説は漫然世人の語り草に随つたもの

く、交尾もすれば、また碧色の卵殻^{らんかく}が地上に落ちてゐる

十の巢^うがあつたので、朝夕それぞれを注意して見てゐたが、



〔鶴〕

鶴

二作ル。青、
（三）作ル。
項、
爾雅注
二項

面の癰^は疵^し、及び湯火瘡痕を療す。脂、油で和して疥瘡傳ける【大明】南方の地で【氣味】冷にして微毒あり【主治】面上の黑^{くろ}黚^{めい}、癰^は疵^しを去る【別錄】

時珍曰く、別錄を正しとすとすべしである。唐の方蓋し傳寫の際の誤だ。蜀水花と二物を竝用するところある。如何なる理由か判らない。

と取るのである。別錄にいふ尿が即ち蜀水花であるが、唐時代の膏の方中に尿頤^い曰く、尿は多く山右にあって、色は紫で花のやうなものだ。石からそれを刮^け

である。商人の販賣するものは信用し難い。

弘景曰く、溪谷の間に甚だ多い。手づから取つて白い部分を擇^えつて用ゝべきもの

蜀水花。別錄に曰く、鴈^{かり}の尿である。

【時珍】記載は太平御覽にある。

翹羽^{せうよく}【主治】灰に焼いて半錢を水で服用すれば、魚哽を治して直ちに癒え

【主治】魚哽にはこれが最も效がある【時珍】

喙^{くわい}【主治】噎病は、發したと直ちにこれを啣^{くは}めればそれで平安を得る【范汪】

夜塗つて朝洗ふ。【摘玄方】

條五ノ下ハ鴈ノ尿也。

【方】新。【附】斑而【鱗】骨を焼いて研り、白芷末（オシロイ）を入れて猪脂で和し、

骨 主 治 【灰に焼いて水で服すれば魚骨哽を下す】（弘景）

（別録）

頭 氣 味 【微寒なり】 主 治 【哽、及び喘（オシロイ）には、焼き研つて酒で服す】

禁臠（オシロイ）伏の意味だ。

外臺に『凡そ魚骨哽には、ただ密に絶えず鱗を念すれば下る』とあるが、これは冷で水を利用する。その寒（オシロイ）は熱に勝ち、水を利用する作用が濕を去る結果である。又、脈に竝循する場合に體が寒するのだ。炮炙論に、いふこの場合は、水鳥はその氣が血に凝（オシロイ）え『とある。切に謂（オシロイ）ふに、腹の鼓大する諸病は皆熱に屬するもので、衛氣が血に大々、體の寒するに、鱗を焼いて性存して末にし、米飲で服すれば立ち、灸論に『體寒し腹大なるに全く鱗に賴（オシロイ）る』とあり、註に『腹が大鼓のやうな時珍。』曰く、鱗は、別錄にはその功用を掲げてないが、ただ雷氏の炮

肉 氣 味 【酸く鹹し、冷にして微毒あり】 主 治 【大腹鼓脹。水道を利す】（時珍）

陰陽互用を泥で固濟して煨（ほ）いて性（せい）を存（ぞん）して薬（やく）に入（い）れて蓋（がい）する。蓋（がい）してこれをもその相制す、
 時珍曰く、今は一般魚骨を治するにこれを用ゐて取つて腸を去り、
 出でず、甚しきものは、燒き研つて飲んで服す。或は煮汁を飲むも佳し【（鯢）】
 治主 魚腹、及び魚骨が肉に入つ

肉 氣 味 【（鯢）】 鹹し、平にして毒なし

はり 翠の類だ。

浮く。婦人の首飾となる。や
 帯び、翅毛は黒色で青い光が
 て短く、背毛は翠色で碧色を
 喙（くちばし）は尖（か）つて長く、足は赤くし
 涯（は）にゐる。大いひは燕（つばき）ほいて、
 時珍曰く、魚狗は處の水
 能く水上で魚を取るのだ。
 斑白のももある。いづれも
 その尾は物の飾になる。

【狗】 翠 — 魚 — 【魚】



本草綱目禽部第四十七卷終

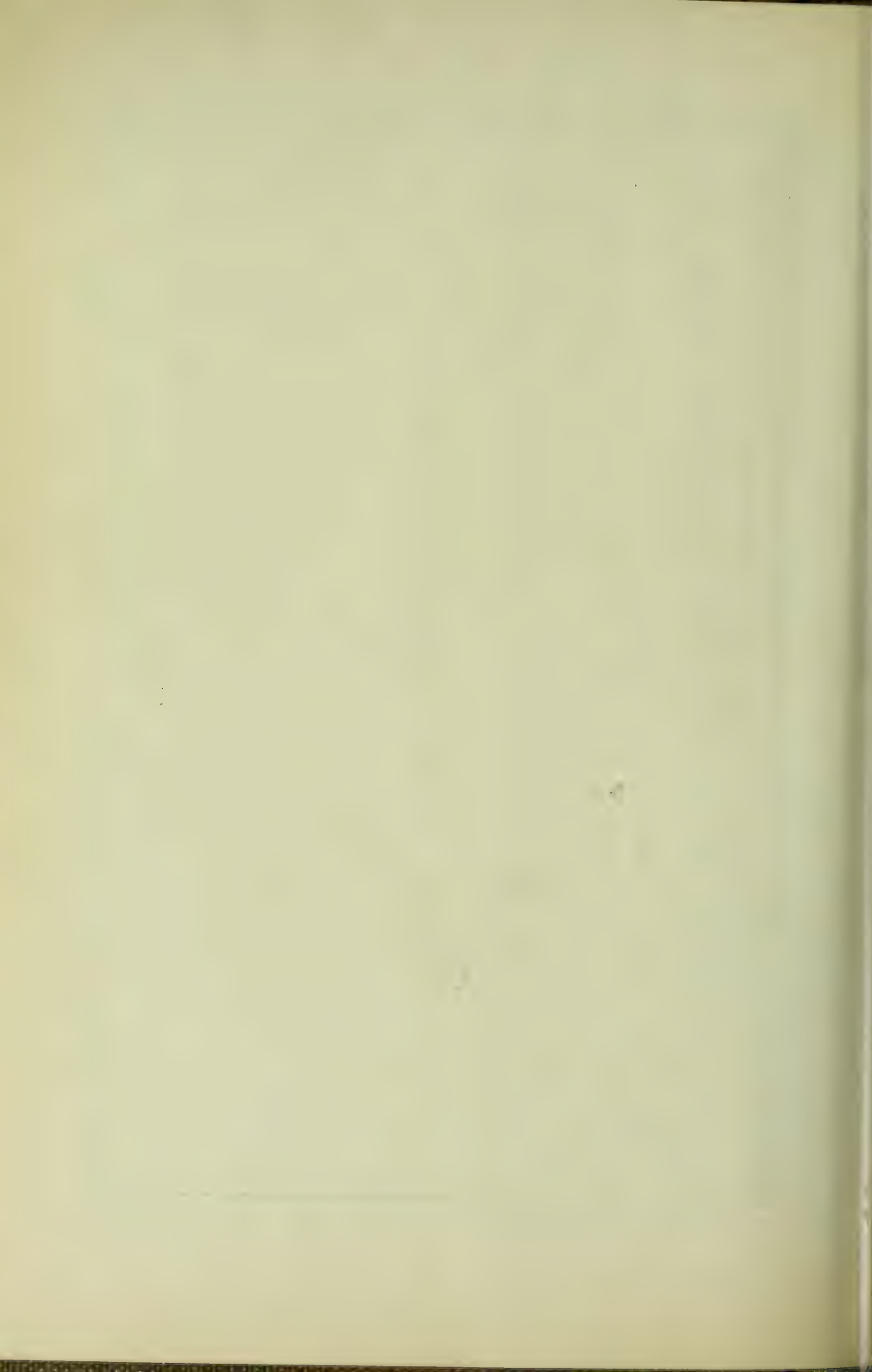
翅羽 主 治 【扇】

ら
か。

魚を食物とする『とある。その産地のかやうにそれぞれ異なるものだから、
 聲やうだ』といつた。嶺南異物志には吐蚊は大きい青鷁^{せいげき}ほどで嘴が大きい、
 時珍曰く、郭璞は鳥は鳥に似て大きく、黄白色の雑文^{ざつぶん}あり、鳴聲は鶴^{かく}の
 母草といふが、三物は異にして同功ものだ。
 であるが、江東には蚊母^{ぶんぼ}といふが、寒北には蚊母樹^{ぶんぼじゆ}といふがあり、嶺南に
 升つた蚊を吐出する。それも蚊なるものは惡水中の蟲から羽化して生ずるもの

方。二 北 蒙 古 地

本草綱目禽部第四十八卷



右附方 舊八十二 新二百三十七

寒蟲 號開寶 即五靈脂。

伏翼 本經 即蝙蝠。

巧婦鳥 遺 即鸛。

鵲 突厥 雀 遺

秧鷄 食物 鵲 附

鷓鴣 唐本 竹雞 遺

鷺雉 遺 即錦雞。

雞 本經 雄 別錄

原類三十二種

鷓鴣 雄 食療 即山雞。

鷓鴣 遺 鷓鴣 遺

英雞 拾遺 鷓鴣 遺

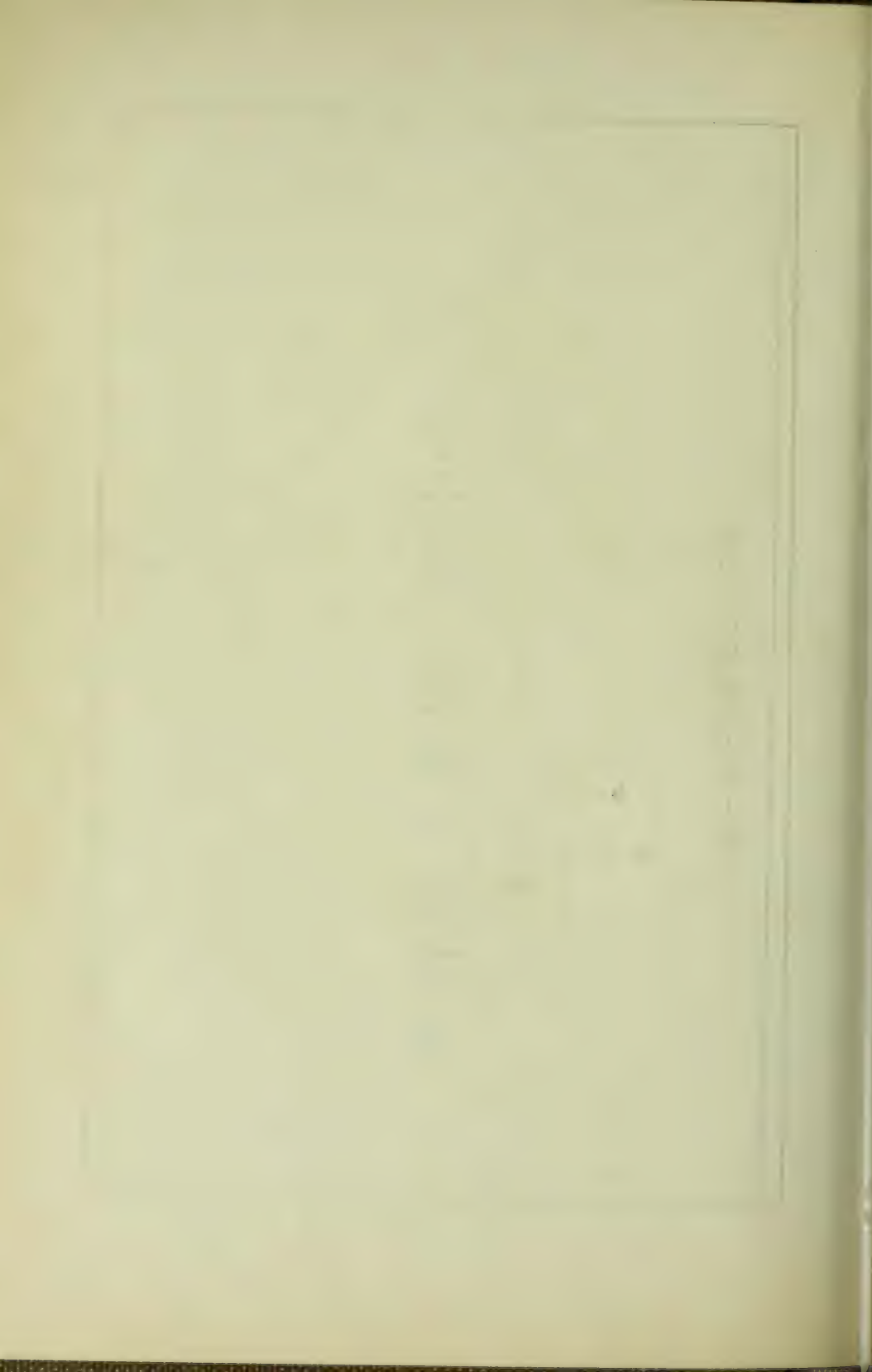
鷓鴣 遺 鷓鴣 遺

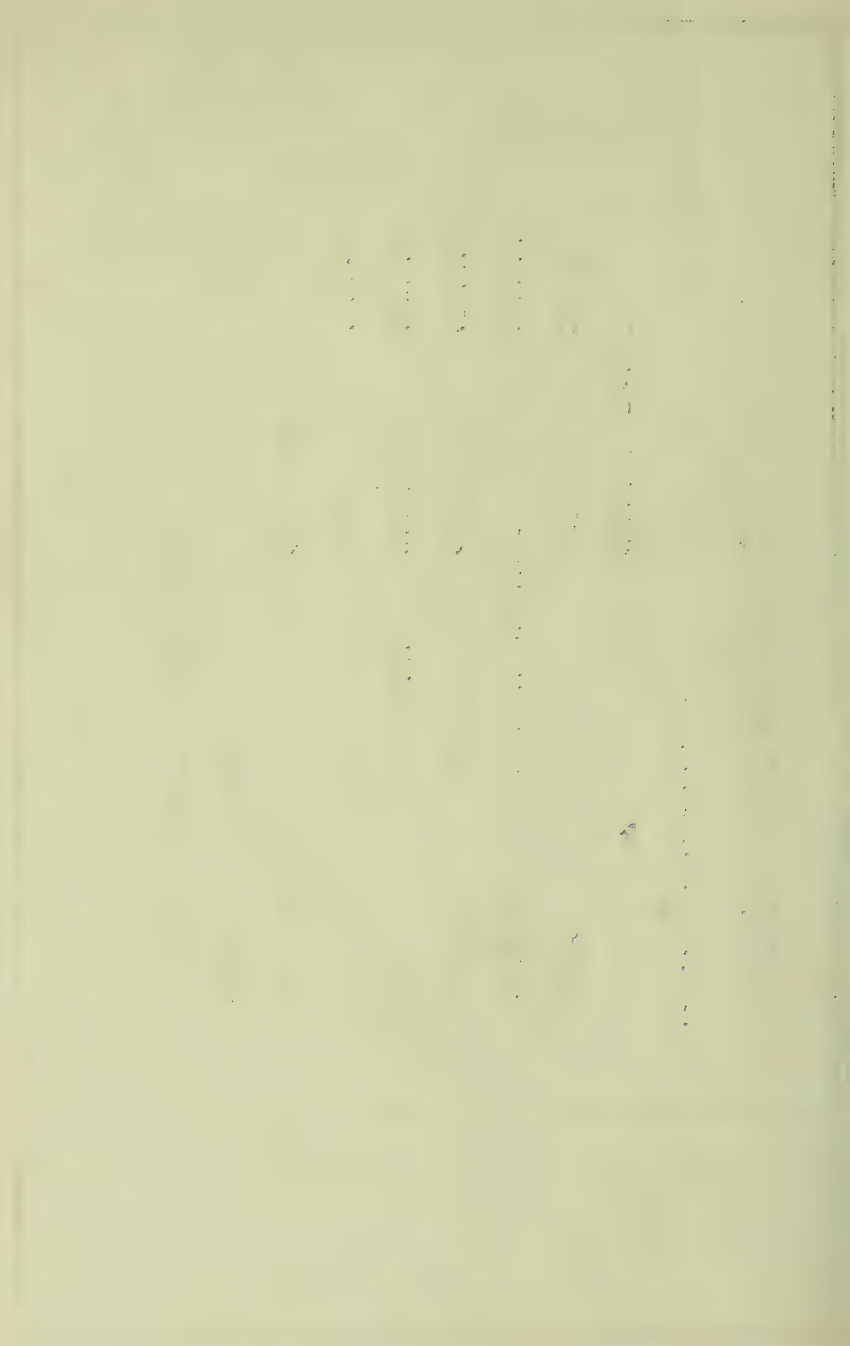
鷓鴣 遺 鷓鴣 遺

石燕 日華 鷓鴣 遺

鷓鴣 本經 鷓鴣 遺

本草綱目禽部目錄第四十八卷





の肉を食つてはならぬ。癪（うざ）を作（な）して漏（は）とならしめ、男子婦人をして虚（そ）せしめる『
 時珍（ししん）曰く、延壽（えんじう）に書（か）に「（鶏）に（能）く啼（な）く（能）くして能（能）く啼（な）く（能）くは毒（どく）がある。四月に卵（たまご）を抱（かか）く鶏（けい）

もだか食つてはならぬ。

の六本あるもの、距（はし）の四本のもの、死んで足の伸（の）びぬものは、いつれも人を害（がい）する指（さし）
 指（さし）は、鶏（けい）は五色あるもの、黒（くろ）い鶏（けい）で首（くび）の白（しろ）いもの、

諸鶏肉 氣味・食忌

代だ調理して食物に得（え）けるだけのものではない。

代は鶏（けい）は能（よ）く邪（よこしま）を辟（はら）けるものといつた。して見ると鶏（けい）はや（や）はり靈（たま）寶（ほう）であつて、

求（もと）むるところ必ず得（え）る『とある。古（いにしへ）

鶏（けい）の毛（け）を焼（や）いて酒（さけ）に入（い）れて飲（の）めば、

を招（まね）ぎ得（え）る『とあり、五行志（ごぎし）には雄（お）

り、萬（ばん）華（か）術（じゆつ）には『その羽（は）を焚（や）けば風

善（ぜん）へる家（け）からは鶏（けい）が飛（と）び去（さ）る』とあ

陰（いん）、時（とき）を知（し）る。太清術（たいせいじゆつ）には『靈（れい）

鶏（けい）は鳴（な）く時刻（ときこく）を知（し）り、棲（す）むには

【鶏】



丹雄雞離火、陽明の象を稟け得たものだ。白雄雞は庚金、太白の象を稟け得たもの

時珍曰、雞は木に屬するものではあるが、それが、それの特長に因つて區分すれば、

宗。廣。曰、即朱雞のことだ。善。曰、丹雄雞、一名戴丹といふ。

を温め、血を止め、能く久しき傷瘡の瘡をぬくのを愈す【別錄】肺を補す【孫思邈】人中、赤沃、白沃、神を通じ、惡毒を殺し、不祥を辟ける【本草】虚を補し、中

丹雄雞肉 氣味 甘し、微温にして毒なし【鳥鵲】辛く、辛く。主 治

食治の方に多くこれを用ゐてある。

頤曰、鶏肉は小毒あるものではあるが、虚風を補するには主要なものだ。故にとなら。宋氏は寇氏の説を駁して非なりとしたが、やゝ、駁する方も非である。だから陽中の陰である。故に能く熱を生じ、風を動じ、風火相扇くところから中風の時。地産である。羽は飛ぶが、飛ぶまいもの。地産は陰となる『とあるが、實は風木に屬する鶏は卵生にして、いづれも濕痰を生じ、熱痰を生じ、熱が風を生じたものである。

にあるが、東南地方は氣候が温で濕氣が多い、いはんは根本的に風が暖つた
 の場合でもみなさうである。且つ西北地方は寒が多いから風の中にいふ事も確
 性は稀にして能く濕中の火を助けるもの、病邪はこれを助けて、病邪はこれを助けて、
 ものだ。寇氏がいふ風を動かす事實は、習慣、習俗の關係でさうなつたものだ。雞の
 震。曰く、鶏は土に屬して金、木、火を有し、又、巽に屬して能く肝火を助ける
 のは、これを食へば必ず發作する。巽を鶏とすると有力な騷擾だ。
 方位に達したとて、その氣に感して鳴くやうになるのである。現に風病のあるも
 方位に達したとて、その氣に感して鳴くやうになるのである。現に風病のあるも
 宗。曰く、巽は風であり、鶏であつて、五更に鳴くのは大陽が巽の
 發明
 へば蛇蟲を生ずる。
 なり、獺肉と共に食へば遁尸となり、生葱と共に食へば蟲痔となり、糯米と共に食
 鬼と共に食へば痢となり、魚汁と共に食へば心腹となり、鯉肉と共に食へば癰
 を食合せてはならぬ。犬、肝、大腎と食合せてはならぬ。いつれも洩痢を起すものだ。
 を弘。景曰く、五歳以下の子が鶏を食へば蛇蟲を生ずる。鶏肉と前、并、李
 とある。

草から腫足はふそくい水を出し、椀にそれを取つて見て、鐵色の鯉魚こひのやうな状態のものが、
 水三斗で煮熱して食ひ、その汁全部を飲む。(時後方)【肉の壊れる怪病凡そ口、
 淡食する。(時後)】水氣浮腫【小豆一升、白雄雞一羽を普通の料理の場合のやうに作
 】【突然の嗽】白雄雞一羽を苦酒一斗で三升に煮取り、并に鶏を
 赤白下痢【白雄雞一羽を普通のやうにして、及び饅頭まんとうにして空心に食ふ。
 料の場所やうに作り、水三升で二升に煮て鶏を去り、その汁六合に併し取つ
 二升に煮て盡く食ひ、その汁を盡く飲む。(時後)】卒然の痛【白雄雞一羽を普通の
 には、白雄雞一羽を普通の料理の場合のやうに作り、真珠四兩、薤白はく四兩、水三三
 憂、恐迫を受け、或は激怒し、悲憂うれして意志錯亂さくらんし、精神、行動の常規を逸せる
 驚、驚駭、憤怒の【辟邪心鏡】驚駭、走してやめぬに、白雄

附方

舊三、新四。

癰狂妄【自聖賢を氣取り、

はここに起源したもので、これは異端の一説に過ぎない。鶏に何の神、何の妖があ

らうぞ。

を養つて邪を辟けるがよし』とある。今の術家で、祈禱^{しんたう}辟^{はく}邪^{じや}に、いづれも白雞を用ゐる時、曰く、按ずるに、陶弘景の眞誥^{しんこ}に、『道^{みち}を山^{さん}に學^{まな}ぶに、宜しく白雞、白犬、

發明

小丹毒^{せうたんどく}風^{ふう}を去^さる【日華】

氣^きを下し、氣^きを調^{てう}中^{ちゆう}【別錄】消^{しょう}滯^{ちゆう}中^{ちゆう}、傷^{やう}中^{ちゆう}。【中】邪を去^さ、

白雄雞肉 氣味 酸^{さん}し、微^き溫^{いん}にして毒^{どく}なし【耳^{みみ}中^{ちゆう}を塞^{さふ}いて引出^{ひきだ}す。】主^{しゆ}治^ち

【附方】新^{しん}二。【辟^{はく}邪^{じや}】瘧^{めつ}疾^{じやく}の【至^し冬^{とう}の日に赤雞を取^とつて腊^{らふ}にし、立春^{りっしん}の日^ひになつて煮^にて食^くふ。その全^{ぜん}部^ぶを食^くすへ、さきも香^{かう}しく炙^あき、耳^{みみ}中^{ちゆう}を塞^{さふ}いて引出^{ひきだ}す。】(時^{とき}後^ご方^{ほう})

【附方】新^{しん}二。【辟^{はく}邪^{じや}】瘧^{めつ}疾^{じやく}の【至^し冬^{とう}の日に赤雞を取^とつて腊^{らふ}にし、立春^{りっしん}の日^ひになつて煮^にて食^くふ。その全^{ぜん}部^ぶを食^くすへ、さきも香^{かう}しく炙^あき、耳^{みみ}中^{ちゆう}を塞^{さふ}いて引出^{ひきだ}す。】(時^{とき}後^ご方^{ほう})

恐らく消化し難いものだ。今你問の産科醫師は産後に鶏を食はせ卵を食はせ、
 蓋し牛雞汁はその滑にして滯なるものであらう。その肉は食はせられな
 汁で粳米粥を作つて食はせれば自然に無事である。これは和氣の效果だといふ
 切の人の遠ざけてその産婦一人に産婦を驚かせしめ亂れしめからん。これ
 の家である。騷ぎが大きいに産婦を驚かせしめ亂れしめからん。これ
 があるといひ、又、唐の推行功の纂には「婦人の産で死するは、多くは富貴
 産に取るの意味であつて、これば「胎に驚かす」鶏肉を食ふがよし。陽精の全きを天
 く、血を暖めるといひ、馬羶は「妊婦は」牛雞肉を食ふがよし。陽精の全きを天
 明 珍に、按ずるに、李延飛は「黄鶏は老人に宜く、烏鶏は産婦に宜
 折傷、并に癰疽を治す。生で搗いて竹木刺風濕痺、諸種の瘡に塗る（日華）
 むる【別錄】（別錄）心腹の惡氣を止め、風濕痺、諸種の瘡に塗る（日華）
 烏雄鶏肉 氣 味 【甘、し、微温にして毒なし】 主 治 【中、を、補、し、痛、を、止
 へば癒える。（夏子益壽方）

一ヶ月に一回試みれば神效がある。(雌鶴方)

一、升を蒸す中に入れて熟したと取り出し、その肉を食ひ汁を飲む。鹽を用ゐてはなら
 切、一升と一升と共にとその腹中に入れ、縛定して銅器中に入れ、それを瓶中で米五
 氣力が竭きた場合には治し難い。雌鶴一羽を普通やうに淨治し、生地黄一斤を
 し、多し横臥して起さるゝと少く、漸次極端に瘦せるものは、長時日を經過して
 損して沈因し、酸疼し、盜汗し、少氣し、或は小腹拘急し、心悸し、胃弱
 すれば自ら出る。(婦人良方)【虚損、積勞】男女の積が原因で虚し、或は大病後に虚
 鳥一羽を毛を去り、水三升で二升に煮て鶏を去り、汁を藥にその汁を臍下を摩
 し、葱、薑の食つて暖に臥し、少し汁を取る。(飲膳正要)【死胎の下らぬもの】
 鳥雌一羽を治淨し、酒五升で二升に煮取り、滓を去り、三回に分けてつてて服
 ば、煩熱するにば、
 新三。【舌強】言語不能となり、眼瞼が動かさず、煩熱するにば、
 治效のある病證はみな血分の病であつて、各、その類に従ふのである。
 時。珍。曰く、黒色は水に屬し、牝の象は陰に屬する。故に鳥雌の主とし
 麻二升を和して香く煮り、それを入れた酒中に用ゐるも極め有効だ。(孟詵)

發明

附方

雌鶏肉四兩を切り、茯苓二兩、白朮六兩で銀饅ぎんぐわんにし、鼓汁こじゅうを入れて煮て食ふ。五
 三、黄わうを入れて一盞さんに煎じ取り、一日に服はくす。【老らう人の食く】。【通とうらぬに、は、二、兩
 津しん、及び鶏けいを去り、肉にく從じゆ容ようを去り、夜よ浸しんして一い、酒しゆに夜よ浸しんして一い、刮くわつ牡蠣しやうを煨わいいた粉こな、
 羽うを腸ちやう、胃いを去つて治ちやう淨じやうし、麻ま黄わう根こん一い、水すい七しち大だい盞さんと共ともに煮て汁じゅう三さん大だい盞さんに煮取り、
 【病びやう後の汗あせ】。【傷寒きやうかん後の虚きよ】。【汁じゅうが出でて止とどまず、口くち乾かんさ、心しん躁そうするに、は、黄雌鶏わうしけい一い、
 腹はらを開ひらいて百ひやく合がふ、并ならびに飯いひを取とり、汁じゅうに和わして羹けいにして食くひ、并ならびに肉にくを食くふ。【聖せい惠ゑ】。
 部ぶを開ひら破はして生せい百ひやく合がふ、白はく粳けい、白はく米まい半はん升しやうを入いれて縫ぬい合がふし、五ご味み汁じゅう中ちゆうに入いれて煮に熟じやくし、
 試しみれば顔がん色しきを益えきし、臟ざうを補ほす。【產さん後の贏えい】。【黄雌鶏わうしけい一い、羽うを去すり、背せ、
 白はく粥じやく七しち七しち兩りやうを用もちひ、肉にくを切きつて銀饅ぎんぐわんにし、五ご味みを投なげて煮に熟じやくし、空くうに食くふ。【一い、日にち一い、回かい、
 煮に熟じやくし、食くふ。【胃いの弱じやく】。【脾ひ、脾ひ、胃いの弱じやく】。【身み體たいが疼いたえて黄雌鶏わうしけい一い、羽うを去すり、
 濕しつ、銀饅ぎんぐわんを作つくつて茶心ちしんに食くふ。【脾ひ、脾ひ、胃いの弱じやく】。【滑くわく、滑くわく、脾ひ、脾ひ、胃いの弱じやく】。【鹽えん醋そを塗ぬり、
 して肉にくを食くふ。【下げ痢り禁きん口くち】。【肥ひ、肥ひ、胃いの弱じやく】。【羽うを去すり、通とうのやうに驅くふ。【鹽えん醋そを塗ぬり、
 てもよし。【後ご方ほう】。【消渴しやくかく水すい】。【小便利せうべんり頻ひん數すうなるに、は、黄雌鶏わうしけい一い、羽うを去すり、冷ひや飲いんして、并ならびに羹けいに
 を食くひ、汁じゅうを飲いんみ、全ぜん部ぶを食くひ盡じんす。【二に、回かい以上いじやう】。【必要ひつやうはな。い。い。少せう量りやうを入いれる。】

行【疾】時行發黃には、脚の金色なる黄雌雞を香通のやうに淨治し、煮くゆしてそれ
通のやうに治淨し、赤小豆一升を和して共に煮た汁を、夜二日中一回、一回飲いんむ。【時
香】を香一羽を、黄雌雞には、水腫腹中の水腫に、【洗】曰く、水腫水腫【新】三、六、新

附方

には行かぬものだ。

土に屬すとはこの鶏を指して特に示したたものに相違ない。他の鶏ではこの鶏のや
うに温は胃を益す。故に主たる治効はいづれも脾、胃の病に在る。丹溪朱氏の『鶏
氣】時。曰く、黄は土の色、雌は坤こんは象であつて、味の甘脾に歸し、氣

發明

【時】時。曰く、黄は土の色、雌は坤こんは象であつて、味の甘脾に歸し、氣
【治】主 傷中、消渴で、小便頻數ひんすうに禁ぜぬ
【氣】味 甘く酸く鹹く平にしてして毒なし【治】主 傷中、消渴で、小便頻數ひんすうに禁ぜぬ
【勢】勢を治し、精を補し、陽氣を助け、小腸を暖め、洩精を止め、水氣を
【男】男子の陽氣を補し、冷氣れいきで疾に著くものを治す。漸に食ふが
【光】諸石末を飯に和したたもので飼つた鶏を煮て食へば補益の効がある【時】時
【治】主 傷中、消渴で、小便頻數ひんすうに禁ぜぬ
【氣】味 甘く酸く鹹く平にしてして毒なし【治】主 傷中、消渴で、小便頻數ひんすうに禁ぜぬ

字。大。觀。二。上。絶。二。續。
作。二。大。觀。二。疾。二。瘦。二。
字。大。觀。二。上。絶。二。續。

か、一、般的の通則とするわけには行かない。

する效能を利用したものが、風土の關係上その適する地方と適せぬ地方とがある。陳文が痘を治するに木香異散を攻散を用いたと同じ意味であつて、濕熱を助け膿を發して病兒に與へて食はせ、甚しきには胡椒及び桂、附の屬を加へ、これにはやはらして五六年多いものでは十年二十年のもの、痘を發する時を待つて五味で煮爛してもを發出せしめるといふ言ひがあつて、家毎にこれ飼ひ、年の少いものも痘を發する時、江西の秦和、吉水の諸縣の飼ひ、老鶏は能く痘を

廬名、二、三、今、江西、秦和、吉水、縣、屬、二、廬、入。

托す【時珍】

發明

秦和老鶏

氣味

甘く辛く

【時珍】

主治

小兒の痘瘡を内

發明

反毛鶏

時珍曰

生えるもの

だ。

反胃を治す

は、その類に從ふ

主反毛鶏

治

反胃には、

一、

羽を煮爛して

骨を去り、

當歸、食鹽各

半兩を入れたる

し、柴定して煮熱し、空心に食ふ。

反毛鶏、二、三、今、江西、秦和、吉水、縣、屬、二、廬、入。

は立ちに止んで神驗がある。（奇囊）【雞物の目】出ぬものには、雞肝血少量を滴せ傷【急に雄に雞一羽を刺して血を取、患者の酒量^量を半腕に和して飲む。】折雞は有毒だから食つてはならぬ。大にはやこれに食はな^い。唐猪^{唐猪}經方【筋の折は換へる。日に數羽の雞を換へて用ゐれば積毒を抜き去つて癒える。これに用ゐた大雄雞の背を破開し、毛を去らずに熱血を帶びたまひ患者の胸前に合せ、冷それ【縮死者のただ絶命せぬもの】雞血を喉^{のど}下に塗る。（金）【黄^黄宜^宜】重體の半斤意に達し、復せぬも【白烏骨雄雞の血を唇に抹すれば回復する。（集）驚風下に塗れば癒^癒る。（風俗通）】あるゆる^{ゆる}毒を解す【白雞血を熱飲する。（廣記）驚風心附方】陰【毒】雞血を熱酒に衝^つて飲む。鬼排卒死【烏雄雞血を心してある。

わててある。

し、神を安し、志を定め、時珍曰く、後時の驚邪恍惚^{驚邪恍惚}を治する大方中にやはり用器【熱血を服すれば小兒の下血、及び驚風を治し、丹毒、鬼排、陰毒を解馬咬傷を治すは、熱血に浸す。】雞翅^{雞翅}下の血を塗る【腰折骨痛、及び癰瘡、中惡腹痛、乳難【雞馬^{雞馬}】を手術する爲に受けた傷及び

主治

氣味

鶏血

鳥、白、鶏のものか良し。

（金勝）

【諸】蟲の耳に入りたる【鶏冠血】を滴入すれば出る。

【舌】が腹つて口から出るものである。雄鶏冠血に舌を浸し、并に咽に【骨蒸】（癆瘵）たるもの

の【咬瘡】鶏冠血を塗る。【蜘蛛咬瘡】同上。【雄鶏】を用ゐる。【耐後方】（時後）

は、【鶏冠血】を塗る。【雄鶏】を用ゐる。【馬】に咬まれに【瘡】腫痛するに

【燥癬】（疥癩）【雄鶏冠血】を塗る。【疔】に【雄鶏冠血】を塗る。【疔】に【雄鶏冠血】を塗る。

【疥毒】早期に治療せねば、身に及んで死する。【雄鶏冠血】を一日四五回塗る。【耐後方】（時後）

【浸淫】（瘡毒）【雄鶏冠血】を塗る。【疔】に【雄鶏冠血】を塗る。【疔】に【雄鶏冠血】を塗る。

【眼】一、【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

【陰】【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

【毒卒】【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

【小兒】【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

【疾】の【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

【小兒】【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

二、【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。【雄鶏冠血】を塗る。

胃 雄鶏のものもが良し。治 肺癰^{（二）}の吳^{（一）}にには、一對を肺前の肉と等分

後、雄鶏臍を點ける。^{（方）}沙塵の味^{（目）}。雄鶏汁を點ける。^{（説）}

を一日三回塗り塗る。^{（重）}眼熱で涙を流すものも五倍子、荳荊子、煎湯で洗つて

勻し、溫酒で一錢を服す。利する度を十便良方^{（方）}。耳^{（目）}、臍、黒雌鶏の臍汁

【附方】沙石淋瀝^{（新四）}雄鶏臍の乾いたものも生兩、鶏果白^{（方）}を炒つて兩を研

燈心に藥けて胎赤眼に點けるが甚だ良し。水に化して時塗るも有效だ^{（時珍）}

【目】の明かならぬもの、肌瘡^{（別錄）}月蝕の耳根を差るには、一日三回塗る^{（孟詵）}

膽 烏雄鶏のものもが良し。氣 味 苦し、微寒にして毒なし。主 治

を米飲で服す。遺精には白龍骨を加へる。一、三日一回、一、九つ

【附方】陰痿不起^{（新三）}雄鶏肝三羽分、兔絲^{（金）}肝虚目暗^{（義老）}を煮て食ふ。

には、烏雄鶏肝一羽分を切つて米と和し、粥を煮て食ふ。

【附方】陰痿不起^{（新三）}雄鶏肝三羽分、兔絲^{（金）}肝虚目暗^{（義老）}を煮て食ふ。

【附方】陰痿不起^{（新三）}雄鶏肝三羽分、兔絲^{（金）}肝虚目暗^{（義老）}を煮て食ふ。

ヲ除キ量ヲ入ル。濕、霧、霧、五邪、風、寒、霧、飲、食、或ハ霧、

【一】羽分を切つてて酒五合に和して服す【二】
 風虚目暗瘡を治す。婦人の陰蝕瘡を治す
 五合酒

陰を起す【別錄】腎を補し、心腹痛を治す。漏胎下血を安ずるにほ、

あり。内則に『鸛を食ふには肝を去る。人を利せざるをためた』とある。

肝雄雞のものか、うし。氣味【甘く平なり】時珍曰、鶏書、々々。

心雄鶏のものか良し。

【蘇恭】

腦白雄鶏のものが良し。主治】小兒の驚癇。灰に焼いて酒で服すれば難産

け入れる。かく十日間繼續すれば一寸ばかりの町驛しやせきから自ら出る。○(千金要)

に文火で煎じ、三沸して滓を去り、聚ほどつゝつを筆筒に入れて炙み溶し、耳中に傾

附方 新。一。年久しし耳聾【録成しし鶏肋五兩、桂心十八銖、野葛六銖、升麻六銖、

別録(禿頭病で髪が落ちるもの)【時珍】

防鳥雄雞のものが良し。氣味【甘し、寒し】にして毒なし。主治【耳聾】。

【金猪の腸出】乾いた人尿末を抹して桑皮線で縫合し、熱鶏血を擦る。(養生集)

【蛇の尻に人入りたる】
生油を心懸て用ひて、
滴せしむる。

者。肥ノ云々。
肥ノ類ハ肥ノ類（七）
金

[illegible]

[illegible]

發 明
 取、不能なるを敷けるを服と云ふ。曰く、按ずるに、素問に『心が満ちし、朝食は、事をなさんか。』に反應がある。『湯に漬けて、服するは、小便利をなすに、なつてゐる。』
 今の方法は、い。な。て。は。い。な。い。

四發

たに淋汁を服用すれば、金銀の毒を解す。醋で和として、鯉、蛇、蚯蚓の咬毒に塗る。【時珍】

つ
取
で
水
を
利
し
、
心
腹
鼓
脹
を
治
し
、
癰
癧
瘰
癧
を
療
す。
小
兒
の
驚
悸
中
風
、
破
傷
、
小
兒
の
驚
悸
中
風
、
破
傷

黑豆に和して炒り、酒に浸して服す。虫を咬毒を治す。【(藥)】氣を下し、大、小便

節儉實斯。急性關。

【白虎風】を治す。【日華】風痛に貼る。【賊風】を治す。血を破るに治す。

癰瘡を滅す【別録】中風の失音、痰迷を治す。炒つて服すば小兒の客忤、蟲二

吳王

二字アリ。○(五三)大觀(本經)ノ

主治 消渴、傷寒、熱、石淋、及小便不利、遺尿、止。

更良素間矢書いある。
【微塞に毒なし】氣味

尿白雄鶏の尿には白がある。臘月ふゆづきに取らぬ。白鶏にして鳥骨のもの尿が。

臂、脚が直くす、み、脈の上下微弦するには、鶏矢を末にし、水六合で方寸匕を和
 鶏矢を灰に焼いて方寸匕を酒で服す。（産寶）【轉筋の腹に入らるもの】その患者の
 大の丸にし、三、五、九つを酒で服す。四五服で效がある。【産後の遺尿】禁せぬには、
 豆（豆）糊で（糊）研り、部分を炒つて研り、右を下出するも
 し、香しく炒つて末にし、一日二回、方寸匕を飲する。右に乾して牛乾に
 いて末にし、水で方寸匕を服す。（葛氏方）【石淋疼瀉】鶏矢白を日乾して牛乾に
 て癥を。（證治明）【諸薬の中】毒の發狂し、吐下し、死せんとするには、鶏矢を燒
 り、陰乾して末にし、水で粟大の丸にし、一分づつを桃仁湯で服す。五七服にし
 へず、水のみを與へ、五（五）蒲蛇二條を竹刀で切つて與へ食はせ、排囊するを待つて取
 廣がこの處方を用いて治癒した。（醫說）【反胃吐食】鳥骨鶏矢を四五日間食物を與
 して燒える。昔、慎崇道がこれ病んで勞のやうな状態に飢（飢）したと、蜀の僧道
 合を共に炒つて末にし、水一鍾で調へて服す。良久、米のやうな形のもの吐
 出、白米を食つて服す。或は雞飯で飼つたもの、好んで生米を食ひ、口中から清水を出すには、鶏矢、白米を食つ
 【米を食つ】（集驗方）佳し。

三九。大觀二。藥下。飯。

り、小便と共に瓦器に入れて、黄燐末にし、一日四五回、方寸匕つゝつゝつを温酒で取
効を書す。【心腹の癰瘕】及び宿癥、并突然走つた癥には、白雄鶏を飯で飼つて、養を取
丁香一錢を末にし、蒸餅で小豆の丸にし、一日三回、十丸つゝつを米湯で服用す。○
粥を食つて、適度に處置する。積毒癰瘕方（方）【小兒の腹脹】黄瘦するには、乾鶏矢一兩、白
朮は隔日に再び試み、同時に田蠶二箇を滾る酒中へ入れて瀾めて、食ひ、後白
大いに轉動し、下に下す。それで脚から皮が皺んで、皺んで消くものも飲む。少頃腹中の氣が乾
鶏矢一升を黄炒し、炒し、酒醅三椀で煮て、一椀を絞って、汁を飲む。少頃腹中の氣が乾
鶏矢患者を牽いて、行つて謝禮をしたといふところから、牽いて、酒と名けたものだ。乾
治す。【生牛乳】氣脹と、水脹と、水脹等、川芎等分末にし、酒糊で丸にして服用す。
【酒】生牛乳と、氣脹と、水脹と、水脹等、川芎等分末にし、酒糊で丸にして服用す。
を調へて服用す。○ある方では、鶏矢、水脹と、水脹等、川芎等分末にし、酒糊で丸にして服用す。
して服用す。○正傳では、鶏矢を炒つて研り、沸湯で淋汁を取り、木香、檳榔末二錢
或は末にして服用す。○二錢を服用する。【宣明】では、鶏矢、桃仁、大黃、各一錢を水で煎
白生牛乳を袋に盛り、酒醅一斗の中に七日間漬け、一日三回、三孟つゝつを温服する。

方寸を服す。三服で癒える。(産寶) 【乳頭破裂】方は上に同じ。【内癰の未だ成らぬ
 者で米を入れ粥にして食ふ。(産寶) 【乳妬】鷄矢白を炒つて研り、酒で
 服す。黄汁が出るものだ。(肘後方) 【胎兒死】雌鷄糞二十一箇を水二升二升五合
 ばぬ。(外臺) 【面目黄疸】小豆、鷄矢白、米各二分を末にし、三回に分けて水及
 を熱した無灰酒二升入投して服し、汗を取る。耳が鼓のやうに鳴るが危惧するに及
 用ゐて奏效した。】耳が聾して聴えぬもの【鷄矢白を炒つて生升、烏豆を炒つて一升
 れ、鷄香少量を入れ、三晝夜休まず擦つて熱せしむるが佳し。察院の李亮卿は嘗て
 生さる。○普濟では、ただ烏鷄雄の糞に舊い麻鞋麻鞋を焼いて性を存して等分を入
 で挑破して血を出して傅ける。老年者も二十日を過ぎず、少年者は十日にして必ず
 兒に拘らず、雄鷄矢、雌鷄矢十五顆を焙じて研り、鷄香少量を入れ、生升根を針
 の半截半截あるものを取つて灰に焼いて吹く。(唐氏經驗方) 【鼻血の止まぬもの】大入、色
 で裏んで痛む處で咬む。立ちろに癒える。(經方) 【牙痛】鷄矢白を焼いて末にし、綿
 痺にし、絹袋に盛つて三升の酒中に漬け、頻りに温服して酔しめめる。(千金方) 【喉

二作ル。大(一)鷄矢白、雄二升、五合、上二升、方
 取(二)鷄矢白、雄二升、五合、上二升、方
 取(三)鷄矢白、雄二升、五合、上二升、方
 取(四)鷄矢白、雄二升、五合、上二升、方

字アア。下虚痛ニ安
 字アア。下虚痛ニ安
 字アア。下虚痛ニ安
 字アア。下虚痛ニ安

に燒き、二字を米飲で服す。(千金方)【頭風の痺木腫】鳥雞矢一升を黄に炒つて
 雞矢白を研末して傳け、涎が出たとき易へ去る。(聖惠)【小兒の驚啼】小兒の驚啼
 水一分で煮て二回に分服する。ある方は酒に研つて服す。(千金方)【小兒の驚唇】小兒の驚唇
 赤くなるのは心に屬し、白く屬し、心なく肺に屬する。雞矢白を漿の大きい綿に裹み、
 ひと人は一升を服し、小兒は五合を服す。一日二服。(肘後)【小兒の口嚙】小兒の口嚙
 んとするは、雞矢白一升、清酒一升、雞矢白一升、清酒一升、雞矢白一升、清酒一升、
 取り、竹瀝を入れて服して汗を取る。(產寶)【角弓反張】四肢不隨にして煩亂し死せ
 るは、黑豆二升半を雞矢白一升と共に炒熟し、産後の中風(經方)【産後の中風】口嚙し、
 て飲み、汗を取り風を避ける。(經方)【破傷中風】腰脊反張し、牙緊し、四肢強直するは、
 雞矢白一升、大豆五升、黄に炒つて酒を沃ぎ、微し煮て豆を澄み沈ませ、量を計
 變臺の下に伏せしめる。【白虎風痛】白虎風痛(說)【白虎風痛】白虎風痛(說)【白虎風痛】
 患部に鋪いて丹雄雞を食せ、良久して熱養を取つて封じ、取りつてから患者の
 に炒り、酒三升を入れて攪きませ、澄清して飲む。(慈氏)【白虎風痛】白虎風痛(說)【白虎風痛】
 して温服する。(張仲景方)【中風寒痺】口嚙し、人事不省なるは、雞矢白一升を黄

て清取り、生で服用す。甚だ良し。【麝】(麝)の毒を解す【野葛】(野葛)の毒を解す【已】に死したる場合、合には、
 一回、順してはならぬ。三三、試みれば、効がある。【時後方】(時後方)の乳石の發熱【鷄湯】(鷄湯)の發熱に浸して、
 臭【臭】(臭)の二箇を煮て、熟し、去つて、熟さす。【夾】(夾)の冷を待つて、二三、又、路に棄てて、
 の、鷄子三箇、湯、五升、に攪和し、三、回に分けて、沐するが甚だ良し。【集】(集)の腹下、
 の、白帶、酒、及び艾葉を用ゐ、鷄卵を煮て、毎日毎に食ふ。【稀珍方】(稀珍方)の頭痛、風、白、
 乾【乾】(乾)の舌の縮まるには、鷄子一箇を打破り、水、一盞と攪拌して、服用す。【白】(白)の婦人、
 産後の心痛、鷄子酒を煮て、食ふ。直ちに安らかになる。【備無方】(備無方)の産後の口、
 には、烏鷄子三箇、醋半升、に酒向つて、飲ませる。【千金方】(千金方)の産後に血の多きも止むに、
 煮て、その、妊婦をして、東に向つて、飲ませる。【子方】(子方)の産後に血の多きも止むに、
 兒死した【三】(三)の家の鷄卵各一箇、三、戸の家の水各一升を共に、
 す。【胎動下血】(胎動下血)の藏器。曰く、鷄子二箇を打破り、白粉と和稀して、食ふ。【胎】
 破つて吞む。【子母秘錄】(子母秘錄)の破つて吞む。【母】(母)の氣の場合、鷄子三箇、法に、
 【疾】(疾)の妊婦、冷胎動せぬ。【鷄卵】(鷄卵)を醋に浸し、變じて取出して、服用ける。【鷄卵】(鷄卵)を醋に浸し、變じて取出して、服用ける。

後二方上二觀

24
25
26
27

【變尿瘡】上記の法に同じ。【大入、小兒に拘らず、鶏卵三箇、白蜜(集部兵部)を傷に合せれば立ちに瘡える。】
【傷蛇、蜘蛛、蠅、蚊、蟻、金方】(千金方)。千金方ある。置く必要がある。用はかねかね、あつた方法でいふ。方は實上行上甚機、なだかから高貴の人は用はかねかね、あつた方法でいふ。方かか場合には、三日これを貼つて一日に一回易る。瘡をたならば止める。この動かしか、又は薬の氣を歇めてはならぬ。一夜を経れば定まるのだ。もし日數多く腫の頭に貼り、帛で包み、時に看視してその熱が解するを覺えたときは易る。狗尿を鶏子の大いさほど攪き勻ぜ、微火で煮つて適度に稀糊し、捻つて餅にして新を經過して赤腫し厥熱し、晝夜疼痛し、あらゆる藥も效なきには、雞子一箇以上を活する。少し手連れれば死ぬ。(續南衛生方)。【癰疽發背】發生の初期、及び十日以上なつたものは用ない。研らし麻、血を和して灌ぐ。毒物を吐出して復す。そのある。た急に風胎(胎風)即ち、鶏が抱いてまだにならぬもの、雛と毒野毒、これらは腸草のところであつて、葉一枚口に入れて入ればあらゆる身發(身發)から血を流物で口を開けて後、鶏三箇を灌ぐ。須臾にして野葛を吐出して、(時後方)【胡

頭。曰く、鶏子は最も多く薬に入れて用ゐるが、髪はげに奇效があるものだ。

る。

あつた。そのの嘔逆、諸瘡を治するは、熱を除き、蟲を引く效果だを取るのである。を補するのだ。昔人がこれ阿膠あぎょうと同功だと考へたのは正にその關係を見ただで體明

發明

し、甚だ效驗（時珍）がある

にやはり生で吞む。數回試みれば效がある。陰血を補し、熱毒を解し、下痢を治に和して頭瘡に傳ける【日華】卒はなかの乾嘔は、生で數箇を吞むが良し。小便不通常山末を和して丸にし、竹葉湯で服すれば久癰を治す【藥性】炒つて油を取ら、麝香せきやうを治す。小兒の發熱を治す。温し、甘し【主 治】醋で煮て用ゐれば産後の

卵黃 氣味

て顔に塗る。洗つても落ちず、半年経つても紅顔を持続する。【藥】紙で封じ、それを鶏子に與へて抱かせ、他の卵が雛になつて出ると俟ち、それを取て鑊くわく【鶏子一箇に孔を開けて黄を去り白を留め、金華きんわ胭脂あせ、及び礬砂らんさ少量を入れた

[illegible]

量を入れて清油で調へて傳ける。【危氏方】耳疳出るものも出でて膿の腫の出るものも出でて【耳疳】出出鶏卵殻を黄少
で和して傳ける。【秘錄】【擲】頭（擲）の【擲】出出鶏卵殻を焼いて性を存して研末し、研り、輕少
研り、片少量を入れて點ける。【鴻飛集】【頭瘡】白壳鶏子七殻を炒つて研り、研り、油
末にし、方寸匕を酒で服す。【子方寸匕】【痘瘡】目に入らるものも鶏子殻を焼いて
半錢つ、の米を飲で服す。【迦華方】【小兒煩滿】死せんとするに、は、鶏子殻を焼いて
附方【小便不通】鶏子殻、滑石等分を末にし、一、二、三日同、

る。酒で二錢を服すれば反胃を治す。【時珍】

記載は深師方にある。【灰に焼き油で調へて】及小兒の頭部、身體の諸瘡に塗
炒つて黄黒にして末にし、熱湯に和して合（合）を服す。汗を取（汗）り出して癰（癰）を癒（癒）え。【傷寒勢復に】は、
生ずる『主』治する。【研末して用ひられ】【日華】【傷寒勢復に】は、

はその脱（脱）の意味を取つたものだ。李石の續博物志には『鶏子殻を踏めば白癰（癰）が
抱出殻（抱出殻）時珍曰く、俗に混沌池（混沌池）鳳凰（鳳凰）晚（晚）に抱いて雛の出たものを用ゐる

その油を塗る。甚だ妙である。【談華方】

瘡々ぬはは再び試み、瘡々を度とす。【普濟方】汁の出る耳疳【鶏子殻を炒り、

は肥脂なる文字を當ててはいはれはな。こ。これは機が事實に近いやうに思はれ
ら。い。現に牡鶏の子にや。り。時とするや。かな。物があるが、しかしそれに
時。曰く、蠶は音姑(こ)である。而にに臓器がこれ。を。驚としたのは何かと判
肥。白。や。う。な。物。を。指。し。た。ら。い。その物が似てゐるところから名けたのだ。
機。曰く、この物は、本經の文には黒雞の條下に列してある。雌雞の肥脂で蠶蟲
字。は。蠶の字に似てゐるから、そのために誤り傳はつたものでないかと思ふ。
黄のいもいのだ。これは生むも、父公臺と名けるものといふ。臺の
臓器。曰く、現に鶏にはや。は。り。白。臺といふものがある。卵のや。う。で。種。く、白があつ
のだらう。

雞白臺肥脂(本經)弘。曰く、これは何なるや。判明せぬ。恐らく別の一種のも

梔。杞。白。皮。等。分。を。末。に。し。一。日。三。回。鼻。中。に。吹。く。逆。濟。總。錄

焙。じ。て。末。に。し。一。回。二。日。方。寸。七。つ。つ。を。飲。す。逆。効。方

【附方】新。二。効。嗽。の。日。久。し。き。も。の。【】鶏子白皮を炒つて十枚、麻黄三兩を

て。薄。く、舌。護。つ。て。藥。透。ら。し。め。る。點。を。利。用。し。た。の。だ。

經て蛟となつて飛騰する。若しその卵が土中に入らぬときはただの雌となるだけであつて蛟となつて飛騰する。それが雷に遇ふと土中の入つて蛇形となり、一、二、三百年と交つて卵を生む。能く人を害す』とある。魯至剛の俊靈機要には『正月、蛇と雌蛇に似て四足あり、能く人を害す』とある。千年にして蛟となる。龍の屬であつて、陸禪の續水經には『蛇、雌は卵を地に遺し、千年にして蛟となる。龍の屬であつて、

といふことある。蛟は水蟲である。

は『蛇が雌と交つて生んだ子を蟪蛄に

とある。蟪蛄は蛟類である。類書に

『雅には蛇が雌と交れば生ずす

大蛤のことだ』とある。陸佃の埤

雅大蛤に入つて蟪蛄となる。蟪蛄は

ば雌鳴いてその頸を勾ける。孟冬、

『仲冬に月令に』雌始めて雌を所謂陽動け

る。雌は再せず、その交尾は褐色だ。産卵せんとするときは雌を避けて潛伏す

暗くして尾が短い。その性闘を好み、その名々雌とといふ。蟪蛄の音は有(ユ)である。

〔雌〕



正して置く。

が、その説に陶氏が和し、孫氏が採用したのである。いづれも誤である。此にその誤を
 丙午の日に食つてはならぬとか、通戸となるとかいふ不經の誤説を書いてあるのだ
 様なものだからである。黃帝の名に假托して出所不明な性し者が作つた書だから、
 及び毒杯を發し、人をして瘦病せしめるといふは、いふ能く毒を生ずることが鶏と肉と
 ふ、蟲、蠱、蟻を食ひ、及び蛇と交り、變化して有毒であるから食つては能く毒、
 煮れば冠がい、明か火に屬するところを示してゐる。春、夏は食つてはなぬとい
 時。形。曰。雄は離火に屬し、鶏は巽木に屬する。故に鶏は煮れば冠が變じ、雄は
 といふは、火に主たるものだからいふことと明示したものだ。
 弘。景曰。雄は辰の屬ではなくして正に離の禽である。丙午の日に食つてはなぬ
 子とを共に食へば通戸となつて尸鬼が身に纏ふことである。『
 男。子。は。燒。死。し。目。盲。す。婦。人。は。血。死。し。安。り。に。性。し。も。の。を。見。る。野。雞。肉。と。家。雞。
 恩。曰。黃。帝。の。書。に。『。丙。午。の。日。に。雞。は。肉。を。食。つ。て。は。な。ぬ。
 正。』
 誤。思。自。死。し。て。爪。甲。の。伸。び。ぬ。め。の。人。は。殺。す。

を發して立ち下血する。蕎麥と共に食へば肥蟲を生じ、卵と葱と共に食へば寸白風眩、及び心痛を發するから食つてはならぬ。菌、蕈、木耳と食ひ合せれば五頭ころがあるが、その他の月に食へば五痔、諸瘡を發する。桃、胡桃と食ひ合せれば頭と謎曰く、久しく食へば人をして瘦せしめる。九月から十一月まではやや桶するのと益するところも少ないだ。

やはり食品としての高貴なものが、しかし小毒があるから常食はさなれない。損す。頭曰く、周禮に「禮人六禽を供す」とあつて、雉はその一に擧げられてある。微毒あり。秋、冬は益あり、春、夏は毒あり。痢疾のある人は食つてはならぬ。肉 氣味 【酸し、微寒にして毒なし】 恭曰く、温なり。日華曰く、平にし

を異しし情を同じうする造化の變化であつて、臆測すべからざるものだ。いづれも類いの時、武庫に雌雄がたがはつて、張華はそれを蛇としたもの化しに相違ない。ある。これは蛇精の化したもので、冬になる雌雄になり、春にはまた蛇になる。蟬か——といふと——音は耐（カ）に能——江に能——

肉 氣 味

足の美なるものに鹿^{しか}あり、平にし【廿】にしして小毒あり【一】。五痔を發し、久しく食すれ

は多く、その尾を冠^{かん}に押^おさる。その肉はいづれも雄も美なり、味なもので、『傳に四

死する。故に師曠は『雪枯^{せきこ}林を封して、文禽多く死す』といふたのだ。南方の民間で

取て下りて来て物を食はぬので、往往して餓^う死^しする。雨や雪のときは岩に隠れ、木に栖^がみ、

も勇健なもので、自らその尾を愛し、^そ養^{よう}林^{りん}に入

る。二種は鷺^ろ雄、錦鶏である。鷺と鷺とはいづれ

の長五、六尺、能く走り且つ鳴くのは鷺雄である。鷺に似て尾の

長三、四尺のもは鷺雄である。鷺に似て尾の

時珍曰く、山鷄と呼ぶものに四種あつて、名は同じだが物は異ふ。雄に似て尾の

『とあるものだ。』

を山鷄といひ、一般にこれを籠に入れ飼つてゐる。即ち雅爾雅に所謂『鷄、山鷄な



雄 鷄 山

ならしめ^(器) 【食へば人をして肥潤ならしめ^(注)】^(註)

【中】毒を補し、毒を解す【注】

主治

【甘し、平にして毒なし】

味

肉

いふもある。

李太白は『この鳥の卵は雞に抱かせて生ませ得るものだ』といふた。やはり黒鷄と

赤鷄、丹鷄、冠と距とを備へ、紅頸、

體あり、尾の長は三四尺、

色白く、波のやうな黒文

時珍。曰く、鷄は山雞に似て

翮。曰く、即ち白雉のことだ。

を食ふ。

のだ。彼の地ではやはりこれ

な黒文が飼養し得る

を食ふ。

【鷄 白】
——雄 白——



聰ならしめる【孟詵】

【酒で服すれば毒氣で死せんとするを治す】【日華】能く五臟を利し、心力を益して

は、毛共に煮つて酒に漬けて服す。或は生で搗いて汁を服するが最も良し【唐本】

主治

【主】嶺南の野葛子の毒、生金の毒、及び溫瘧や久病で死せんとするに
それで食はれないといふ。

この鳥は、天地の神が毎月一羽づつづつを取つて至尊神に饗するの自分で自死するのだから、
ならぬ。人をして小腹を脹らしめるものだ。自死したものは食つてはならぬ。或は

華曰く、微毒あり。詵曰く、竹筴と食合せては

日。【甘し、温にして毒なし】

肉氣味

るといふことだ。

【鳥

鷓鴣】



理するが、肉は白く脆く、味は雞、雉に勝
因を用いて誘ふて取る。南方では草らいて料
む。獵人はそれを藥卒で結んで以て取り、或は
得『哥』といつて鳴くのだといふ。その性潔を好

毒を解する能がある。功過共に没却出来ない。凡そ鳥獸の自死したものば皆有毒
 就いて觀ると、鵲は多く食へばやばり微毒があるが、その功用にはまた毒を解し、
 その毒が發したのだ。故に毒を以てその毒を利したのである。『この二説に
 口に入つても少しも變調を認めない。辣さをそのまゝに覺えて、粥を食つて
 ふとやや寛なるを覺え、一回生薑を食つて見ると甘く香しく覺えたが、生薑で食
 がよいといつた。初め楊吉老はこれ先づたまたま楊吉老がその地へ往つたので
 迎へて診察を請ふ。楊吉老は「あつたが、たまたま楊吉老がその地へ往つたので
 喉の間に癰を生ずる病を發し、癰が潰れて膿血が已みず、寢食俱に廢するあり
 咽は通判楊玄之が廣州から歸り、食した鵲のために遂に
 説はで其毒が發するのだから、それで甘草をその毒を解したのだ。』又、類
 ふ「といつて、甘草湯を與へるとそれだけで癒えた。この物は鳥頭、半夏の毒を多く食
 たとき、太醫廷紹が「あなたには山雞、鵲を多食したから、その毒が發したのか
 時。珍曰く、按ずるに、南唐書に『丞相馮延巳が、病を病んで已まな

發明

類食鹽楚ノ州石見部石
 石。見部石見部石見部石
 金部ノ州石見部石見部石
 廣部ノ州石見部石見部石
 金部ノ州石見部石見部石
 廣部ノ州石見部石見部石

るの、扶^{たす}け起^たして便通をよせると、小便^{せうべん}から突^つ然^{ぜん}胎^{たい}のやうに凝^こつた白液を出し、雨^{あめ}やうに汗^{あせ}を出し、言語^{ごんご}も不能^{ふねう}になつたが、ただ衣服^{いふく}を替^かへたやうな様子^{ようす}があつて見^みえうと思^{おも}ひつゝ、法^{はふ}則^{そく}の通り調^{てう}へて進^{しん}めると、やがて運^{うん}劇^くして少^{せう}頃^{ころ}するとは寢^ねやうを帛^{はく}につつそれ臥^ふし、穀^{こく}物の食^{しょく}事が通^とぬと數^{かず}に及^{およ}んだが、ふと驚^{おどろ}き食^{しょく}はやうになり、四肢^{しし}骨^{こつ}立^たして床^{とこ}に身を横^{よこ}へて出^で來^きぬほどになり、ただ衣服^{いふく}や鼓^こ時^{とき}珍^{しん}。曰^{いは}く、按^おするに、董^{とう}炳^{へう}の集^{しふ}驗^{けん}方に、『魏^{えい}秀^{しう}才^{さい}の妻^{さい}が腹^{はら}大^{だい}を病^{やま}んで鼓^こ

宗(喪)

せる【】小兒^{せうに}の疳^{かん}、及^{およ}び下痢^{げり}五色^{ごしき}を患^{をわづ}ふものは、毎^{まい}朝^{あさ}これ食^{しょく}ふが有^あ效^{こう}だ【】瘧^{はつ}瘵^{ざい}を治^ちす、小豆^{せうまめ}、生薑^{せいきやう}と和^わして煮^にて食^{しょく}へば痰^{たん}癰^{よう}を止^{とど}める。瘧^{はつ}瘵^{ざい}を食^{しょく}へば下焦^{げうせう}を肥^こら結^{けつ}熱^{ねつ}を【】五^ご臟^{ざう}を補^おし、中^{ちゆう}を益^{えき}し、氣^きを續^{つづ}け、筋^{きん}骨^{こつ}を實^{じつ}し、寒^{かん}暑^{しょ}を耐^たへ、

合^あせてはならぬ。肉^{にく} 氣^き 味^み 【甘^{かん}、平^{へい}にして毒^{どく}なし】西^{さい}鋤^こ。曰^{いは}く、四^し月^{げつ}以^{もつ}前^{ぜん}にはまだ食^{しょく}ふから食^{しょく}へ

おるが冬^{ふゆ}はあな

照。註。春。書。ノ。洋。草。ノ。部。註。京。類。
 作。ル。大。觀。正。玉。

集解

夏、秋、^{ハナ}津地方の鶉を賣る商人が車に積載して市場へ出たが、そればかりな蛙の列すに變化したのだつた。その中にはまだ完全に變化しなぬものも交つてゐた。子宗。曰く、鶉には雌雄があつて、常に野に於て屢その卵を得ることがある。變

時。珍。曰く、鶉は大いさ雞の雛^たで、頭が細くして尾がなく、毛に斑點があり、甚だ肥えたものだ。雌は足が高く、雄は足が低い。その性衰を畏れるものだが、田に在つて夜も群^あり飛び、晝には草に隠れ、つゞつてゐる。世間で能くその鳴聲を聴いて呼び寄せて捕へ、飼養して闘争を行はせる。萬畢術には「蝦蟇が瓜を食ふ」と鶉になる』とあり、交州記には「南海の黄魚は九月に變化して鶉になる。鹽で炙いて食ふと甚だ肥美だ」とある。蓋し鶉なるものは發生の初には化成したもので、それが後に卵にから生れるやうになつたのであらう。故に四季を通じてこの物があつた。夏は鶉といふものならは、始めから變じて終にまた鼠となるものだから、夏は鶉と

(1) 木柱(重)巴(重) (Colum-
ba livia intermedius,
Strickland.) 木柱

にこれとを和して飼ふ【入】腫、及び腹中の痞塊を消す【注】癰癤諸瘡を治し、

にして微毒あり【主治】入、馬の疥瘡には、炒り研つて傳ける。驢、馬をば草

も左に卷くのだ。故に宣明方にこれを左盤龍といつてある。【味】辛【氣】温

屎【左盤龍と名ける】時珍曰く、野鶴のものが就中良し。この鳥の尿はいづれ

に排出する。【江方】

辰砂三錢を和して煮大豆の丸にし、三十丸つづつを三豆飲で服す。毒は大、小便と共

も少して済む。白鶴卵一對を竹筒に入れ、半月中間に入れて取出し、その卵白で

【附方】痘毒の預解【小兒がこれを食へば永く痘が出ない。或は出て

【卵】主 治 【瘡毒】痘毒を解す【時珍】

【血】主 治 【諸藥】百毒の毒を解す【時珍】記載は事林廣記にある。

白鶴を煮炙して小兒に食はせ、同時に毛の煎湯で浴すれば痘が出ても少しで済む。

小片に切り、【附方】新、一。一。新【水】際なく水を飲んで止むぬは、白花鶴一羽を

【附方】

す。人體に益あるものでてはあるが、多く食つては恐らく藥力を減ずる【孟詵】

二七
上蘇、
作百病
主治

黄雀ととなり、十月に海に入つて魚となる『』とある。して見ると、所謂雀が蛤に化す

雀魚といふが、常にて六月に變化して

とあり、又、『臨海異物志』は南海には黄

る。雀が水に入ねば國に淫^{ついで}の事が多い『

周書に『秋の季に雀が大水に入つて蛤とな

逸^{はな}に、按ずるに、

鮮^{あま}だ。性味はいづれも同一で、炙いて食ひ、

あて、背には綿^{わた}を被^かたやうに脂があるの

月に田の中^{あき}に羣^{ぐん}飛する。體は非常に肥えて

ものだ。小なるものをば黄雀と名け、八

その卵は斑^{いば}がある。その性は最も淫なる

、その目は夜は盲する。

、驚いたやうに目を見え、二寸ばかり、尾の長さは黄白色で、

は、頸と背と頭は黒く、頭は

雀



〔雀〕

集解

時珍曰

躍つて行くが、歩を視る。物を視る。尾の長さは二寸ばかり、尾の長さは黄白色で、

腸を去り、金絲末五錢を入れて縫合し、桑柴火で煨いて炭にして末にし、空心に腸熟し、空心に酒で服するが良し。(直指方)【小腸疝氣】毛のついたまの雀一雀を來(の)香三錢、胡椒一錢、桂肉各二錢をその雀の肚の中に入れて、濕紙で裹んで【腎冷偏墜】疝氣である。生雀羽を毛を燎(きやう)腸を去り洗つてはならぬ——船せ三錢、つづつ水一盞で六分に煎して滓を去り、食事と時間を隔てて温服する(奇效方)一兩、柴龍、遠志、肉、丹參、各半兩、甘草、人參、赤茯苓、大棗肉、紫石英、小麥各雄に雀の肉を取つて炙き、赤小豆一合、人參、赤茯苓、大棗肉、紫石英、小麥各は、にして食ふ。(食治方)【心氣傷】朱雀湯——心氣傷から諸種の疾に變じたるは、を炒り熟して酒一合に入れて煮てから、少時して水二盞を入れ、葱、米を入れて粥くす。雀五羽を普通の料の場合のやうに作り、粟米一合、葱、米を用ゐ、先づ雀す。【附方】老人の補益【老人の臟腑の虚損で羸瘦し、陽氣の乏弱せるを治す。】新ハ。附方。して丸薬にするは、やはり右の意味を祖述したものだ。時珍曰く、聖濟總錄の虚寒を治する雀附丸に、肥雀肉三四十箇を附子と共に熬膏

肝

異王

【陽虛弱】(眞)雄丸に用ゐる。

時。女。子。の。血。枯。を。治。す。こ。と。を。知。ら。な。い。蓋。し。雀。卵。は。精。血。を。益。す。る。の。な。り。あ。る。能。く。時。珍。今。は。一。般。に、雀。卵。の。能。く。男。子。の。陽。虛。に。益。す。こ。と。を。知。つ。て。ゐ。る。が、能。

發生する根本に向つて薬の作用を加へたものである。

[illegible]

疥癩せいらんを除去く【盥洗】

陰痿不起、

【別錄】

○ 下 子 進

吳王

【
2
取
21
H

味

○聖惠方

大槳子

風、七月廿五日

顯皇、御抄

月、肉の付ひ

24
H
O
R
C

○並濟方（内）

梧子大の丸

二七 國に

白痢下

凡そ鳥は、左翼が右を掩ふものゝ雄である。その尿は尖がつて挺直だ。黄犍曰く、凡そそれを經（たぬ）なまき用する場合は、雀の糞を用ゐてはならぬ。雀兒とは口にあるもつて、雄の糞の圓いものは雌の糞だ。陰入には雄を使ひし、陽入に甘水に鉢に入れて、去り、餘に入れたる物を著附（つけ）する。月日に採つて兩々（ふたり）にして、甘草水に

、日毒日

學訓

雀蘇(炮炙論)

青丹（拾遺）

丁香(俗名)

雀巢一名

三

(狂) 朝

灰に燒いて米飲で調へて服す

乳ヲ指入力。
乳ヲ詳サラズ、

【小兒の乳癖には、一羽づつづつを煮て汁を服す。或は

吳王

喙及爪脚胫骨

○ ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

に塗る【孟詵】時珍曰、按ずるに、張子和の方々に、臘月の雀腦を灰に燒き、油で

【綿で裏んで耳を塞げば聾ろうを治す。又、凍瘡

吳王

【九 五 五】

氣味



雀の目が、夜間言するやうなものだ。一日二回血を取出つて置く。

弘景曰、雀盲とは人が黄昏時に物の見えなくな

【蕉】別錄

吳王

讀血

かある【時珍】記載は衛生易簡方にある。

【膈氣、哮喘を治す。一箇、灰にして酒で服す。或は一箇、錢を服す。】

主 治 烟に焼いて手重ずれば婦人を入して養蠶を巧みなしめらる【器】

人々を以て聰明なる【玉璽】

肉　氣　味　【甘し、し、温にして毒なし】主治　【炙いて食へば甚だ美味だ。

蠶食桑の如く、
魚食餌の如く、

(六) 鶴ノ誤字。
 (五) 鶴ノ誤字。
 (四) 鶴ノ誤字。
 (三) 鶴ノ誤字。
 (二) 鶴ノ誤字。
 (一) 鶴ノ誤字。

(五) 附二 瑞作ル。

な者にはこの鳥を飼ひ馴してて戲樂させるものもある。又、又、又、ハコトは割草といつて

のちもある。故に『林葉』として一、二枝に過ぎず、毎食數粒に過ぎず。『いとやうな』だ。車腹

けるのだか、極めて精巧なものて、或は房の二箇あるものもあつたり、房の二箇あるものも

如キハ茅、ノ毛、ノ毛、ナリ。
腹ノ毛、細ク及ビ、毛、類
此ノ毛、細ク及ビ、毛、類

は黄雀々に似て小さく、灰色で斑が、あり、聲は口笛のやう、隊は利い錐のやうだ。

1622

1622

釋名

鸛鵒(詩疏)

桃蟲(詩經)

蒙鳩(子)

女匠(方言)

黃胆雀(俗名)

珍。曰。按。す。る。に、爾雅に『桃蟲は鸛（つ）なり。その雌を鸛（つ）といふ。』とあり、揚雄の時言（こと）は、いひ、或は巧女といふ。燕地方はこれに巧を巧とせしむ。關より東ではこれに巧を巧とせしむ。關より西ではこれを桃雀（もくさく）といひ、或は女匠といふ。關より東ではこれを巧とせしむ。性がありて巧が巧だからか呼（よ）ひ、また有呼といふとある。また鳩は性が拙でありて巧が巧だからか呼（よ）ふのだといふ。かか意味から諸種の名稱が起つたのだ。

集解

は雀より小く、林や藪の中（中）に窠を作る。窠は小さい袋のやうなものだ。

——鸛鵒巧



柴や竹の垣の上のゐる。形状もめで、生れてゐる時、珍。曰く、鸛（つ）は處處にゐる。

功ニ大ニ知ヲ作ルニ觀ナリ
 子ノ何ヲ觀ナリ
 求

艾があるところ、これに栖まぬ。凡そ狐、貉の皮、毛は燕に觸れると毛が脱ける。これでは
 といふ。燕は屋内に入らぬけれども、井戸は空いてゐるものだからだ。燕は巢に
 燕の卵を吞めば子が生れるかといふも、無根のことだ。或は燕は井底に墜するもの
 に祈ると世嗣の子が授かるか、或は
 玄鳥來たとき高禩といふ縁結びの神
 去來するといふが、それはで、渡つた。
 に蟄居するのである。或は海を渡つて
 に巢を作り、去れば氣を伏して窟穴中
 この鳥は、來ると泥を啣くはんで屋根の下
 巳の日を避け、春社に來て秋社に去る。
 で飛び、向つて宿る。巢を作るには皮
 繭口、豊嶺ほうりやうで翅を布き、尾が岐れ、背
 時珍曰く、燕は大いさ雀ほどで、身が長く、
 これぞ肉といひ、これを食へば延年を延べ、
 の入口が北に向き、尾が屈して色の白いものは數百歳のものであつて、仙經では

「燕」



臺中土 土部に記載してある。

【譯】痛風は尿酸の結晶が、やちやちと明に刺さるゝのであらう。燕巢の中、燕の糞を湯に煎てし、煎洗する。

桐子丸の丸にし、疼く部分で咬む。丸が溶化すれば疼が止まる。(柚珍)【小児の卒

大の丸にし、一日三回、三丸つづつを白湯で服す。(千金)【牙痛を止めたる】燕千屎を焙

刻にば尿中に石水が下るものだ。(毛)

【小便をええ通する】燕屎、豆豉各一合を糊で梅子

入を害するものだ。【右淋を下す】燕屎末五錢を冷水で服す。早朝服すれば食事時

重し、重き者、兩手に捧げて、その氣を吸入せらる。口に入れば、又肺に注意を要する。

るものである。**【瘵疾の禁厭】**藏器曰く、燕屎方寸匕を、發作の日の早朝に酒一升

皮を去つて十箇と和して梧子大の丸にし、三丸つづつを服す。蠱は利するに随つて出

附方
新三
舊三
【蠱毒之解す】
藏器曰、
無屎三合を取つて炒り、
獨活三錢を

瘧疾を治す【瘧疾を治す】
湯にして小兒の驚瀾を浴す【湯にして小兒の驚瀾を浴す】
（景弘）

人かき

附

二、三、

【手解及舞】

西國之
三子
列人

(七) 大觀三北院二葛

ある。形は雀のやうで大きい。翼は皮は衰へたり、吐きに天鼠といふが世を渡る罪、満天下に及ぶといふ。又、唐書には『吐番に天鼠といふが分であらう。この不死の説は抱朴子の書に載せられて置いたならば思なる迷を破るに得て服し、立ちろに死したといふ。これを記載して置いたならば思なる迷を破るに得

又、宋の劉亮白は白蝙蝠、白蟪蛄（五）を得

一タにして大いに泄（五）して死したといふ。

大いに鷗（五）ほどの白蝙蝠を得て服したといふ。

按ずるに、李石の續博物志に『唐の陳子真は

氏、かそれを信じたのは馬鹿げたことである。

あるは方士の法（五）駄（五）といふものだ。陶氏、蘇

服すれば人を死（五）にしないといふもの

を種類があるのだ。仙經に、千歳のものを

すといふが、これは理し能はぬ事實である。かの白色のものといふは、白らうといふ

に生ずるものは甚だ大きいものだ。或は、戊巳の日を避け、蝙蝠は庚申の日に伏



伏

翼

（五）蟪蛄ハ蝸ノ誤。

蟪蛄ハ蝸ノ誤。
此ハ蝸ノ誤。
今ハ蝸ノ誤。
蝸ハ蝸ノ誤。
蝸ハ蝸ノ誤。

て蝙蝠となり、蝙蝠がまた化して魁蛤となるといふが、恐らく全然さうではない。乳穴を食物とし、自ら能く養ひて成育する。或は、^電鼠が變化して蝙蝠となり、鼠も變化してやうになつてゐる。夏は出て冬は蟄し、日中^{ひちゅう}は伏して夜間に飛ひ、蚊、蚊、合^あ時^{とき}珍^{めづ}し、伏翼は形が鼠に似て灰黒色だ。薄い^{うすい}翅^{はね}があり、四足及び尾を連合

に食物を食はぬを見ても判る。

けだ。この物は善く氣を服するところから能く長く壽を保つのであって、それは冬期に宗^{そう}曰^{いは}く、伏翼は目中にもやうに飛べぬのが、たゞ鳥を畏れるので出ない。ものもあるが、^想想ふに乳孔中に産したものがやうなものになるであらう。

は古屋根の中に生ずる。白くして大なるものは蓋し稀だ。その尿もやはり白色のも顔^{がん}曰^{いは}く、蘇^そ非^ひの仙經^{せんきやう}に所謂^{しゆゐん}なるものごとをいつてゐるのだ。現に蝙蝠その尿はいづれも白色だ。薬に入るにはこの尿を用へるものがある。

ただ白くならぬものは百歳のものだ。いづれも倒に懸り、その重いのものである。乾してて服すれば肥健ならしめ、長生して千歳の壽を得せしめる。大いさ鷄ほどで、陰れも千歳に達し、純白雪の如く、頭に冠があり、大いさ鳩^{とび}や鳩^{とび}ほどのものだ。

蛇へび蛻むく皮かわ

會方ノ改ヲ鎮越
縣即山ノ北ノ海ノ
道ノチニ又ノ地ノ
定メテ今ノ海ノ
縣ノ江ノ時ノ
子ノ置ノ今ノ
縣ノ江ノ時ノ
縣ノ江ノ時ノ

本草綱目卷之四十八

子を作る。

て飛ぶもので、遠く飛へない。その地では捕獲して皮を取、それで防寒用の帽

宗（一）龍（二）曰く、關西の山中によくゐる。毛の極めて密なものである。いづれも下に向つ

ではこれを多く妖怪視してゐる。

願（三）曰く、今、湖、嶺の山中に多い。南方

れで出産を容易にする。

そ。世間ではその皮毛を取つて産婦に持たせ、

毛は紫白色であり、鳥（四）時（五）は紫白色で暗夜に行飛する。

は大きい。形状は蝙蝠のやうで、鳥（六）時（七）は紫白色で暗夜に行飛する。

弘（八）曰く、この鼠は即ち鼯鼠である。飛生

。平谷に生ずる。

呼ぶ。鼠（九）の同名の鼠（一〇）と

て、この意味から来たものだ。また蛇（一一）と

たのは形が似てゐるからである。この物は肉翅が尾に連り、飛んで上上れぬも



集解

別錄に曰く、鼯鼠は

（一）北山、秦、故縣、北、周、北、陽、城、在、北、湖、之、南、

（二）關西、水、見、（三）關西、水、見、（四）關西、水、見、

（五）關西、水、見、（六）關西、水、見、（七）關西、水、見、

時○曰く、
 愚^{おろ}は能く飛ぶもので且つ出産する。故にその皮に寝、その爪を懐にす

各四十箇を令せ搗いて梧子大の丸にし、酒で二丸を服すれば産し易しとてある。

易になつてて産婦に與へるが、小品では服藥に入れ、飛生一箇、槐子、故、羽

頭、世間ではその皮毛を取り、臨産にてそれを持たせれば分娩が容易

【附】出產を容易にする【本】(靈)

吳王

【 6 4 2 2 2 溫 微 】

味氣

南に産するものには好く龍眼を食ふ。

か、四足、及び尾に聯つて蠕動することある。故に『尾を以て飛ぶ』といつたのだ。

て飛ぶ。これを食べへば、味なはい。百毒を薬く『とあるが、このものだ。その形状は、翹

海經に「耳鼠は、形狀鼠のやうで、首は兎のやう、耳は麋のやうだ。その尾を以て」

可處から下に飛ぶが、下から高く飛び上る。『性よく夜鳴く』とある。

子にまはす乳し、子はその母の後に追ふ。聲は人の呼ぶ聲のやうだ。火を食ふ

五、眞、
象^{かい}、
頭^{かん}、
難^{なん}、
自^じ、
足^{そく}、
脚^{きゃく}、
短^{たん}、
爪^{つめ}、
爪^{つめ}、
尾^び、
長^{ちやう}、
三^{さん}、
尺^{ふく}、
ど、
あ、
飛^と、
ぶ、
の

以^(二)之^(一)四^(三)足^(四)が^(五)あ^(六)り、
翅^(七)、尾^(八)、頭^(九)、脇^(十)の毛^(十一)はみな紫赤^(十二)色^(十三)、背上^(十四)に十字^(十五)の斑^(十六)あり、腹下^(十七)に

寺。○日く、安ずるて、郭氏刀狩雁注て『語訳』、小沢ハ、狐まどで、
 福。○

字アリ。大觀二積下二聚

[illegible]

六カ敷カのいいものだ。凡そ用ゐるには、研つて細末にし、酒で飛過して沙石を去り、晒スの五カ靈脂リョウシを治チ修シュ治チの

肉 氣 味 【甘、し、温】ににしてし毒な 【主 治】 食へば人々を體に益する 【(猪) 注】

て潤なものを眞物としてする。
ではやはり沙を右に入れて賣つて居る。凡そ使用するにには心が粘塊ねんくわいのやうなものもある。世間

で末を調へて熬つて膏にし、水盞に入れて七分に煎し、その薬の入つたを熱服
 の心痛、小腹痛、血氣痛に就中^{くちゅう}五靈脂、蒲黃^{ぼわう}等分を研末し、先づ二醋二盃
 で諸薬の效を奏せぬものを治し、能く行り、能く止め、婦人妊癰^{にんよう}の心痛、及び産後
 【附方】失笑散^{しせうさん}。男女、老少の心痛、腹痛、少腹痛、小腸疝氣
 新六、新三十一。

たやうだ。

るが、しかし肝血の虚滯もやはり自ら風を生ずるといふ關係には想到してゐなかつ
 る。この點でも古人の識見の深奥なるが昔かこれといつた。『同じ意味であ
 ると、ためめに崩中暴下なるのであつて、荆芥^{けいがい}、防風の崩を治すると同じ意味であ
 るの劑である。風は動も衝任の經が虚して、傷^{いた}れ、營血を襲はれ
 するに、李仲南は「五靈脂は崩中を治す。ただ血を治すだけの薬ではなく、又、按
 にいづれも能く奏功する。屢實驗。上効果を収めた。眞に近世の神方である。又、按
 井に産前、産後の血氣で痛むもの、及び血崩、經^{けい}溢^いであらゆる薬の效を擧げぬもの
 血痛を治するのみではなく、凡そ男女、老幼、一切の心腹、脇肋、少腹痛、疝氣、
 の諸症を治するのだ。いづれも肝經に屬する病である。失笑散は獨り婦人の心痛、

び煎し膏にし、神麴末二兩を入れて和して、梧子大の丸にし、二十丸つづつを空心に
 もの【頭】曰く、五靈脂十兩を研末し、水五盞で三盞に煎し、滓を去り、澄清して再
 歸二片、酒一盞を六分に煎して、三回で效を取る。【經方】血崩の止ぬ
 孝思集效方【經血の止ぬ】五靈脂を煙が盡さるまで炒つて研り、毎服二錢、當
 用一錢つづつを水一盞で五分に煎して温服する。蟲を吐出して、癰をもるものだ。【
 服す。猪肉二片】海上仙方【小兒の疳積】五靈脂末二錢、靈麴を火飛して生錢を
 に拘らず、五靈脂、檳榔等分を末にし、石菖蒲を三錢を調へて餅にして
 炮いて三分を末にし、熱酒で服すれば立ちに癒える。【事林廣記】心、脾の痛【男女
 を煎沸して熱服する。靈苑方】卒の暴か【五靈脂を炒つて一錢半、乾薑を
 て研末し、錢を酒で服す。】血氣刺痛【五靈脂を生で研つて三錢を、酒一
 神麴で丸にし、白朮陳皮湯で服す。】兒枕で痛むもの【五靈脂を慢に炒つ
 五靈脂、香附、桃仁等分を研末し、醋糊で丸にして一、百丸を服す。或は五靈脂末を
 へて服す。口瘻するは押し開けて、澀く喉に入れば癒える。【圖經】産後の腹痛調
 入事不省となるを治す。五靈脂二兩を生半炒にして末にし、一錢つづつを白水で調

卷之三

本草綱目禽部第四十八卷終

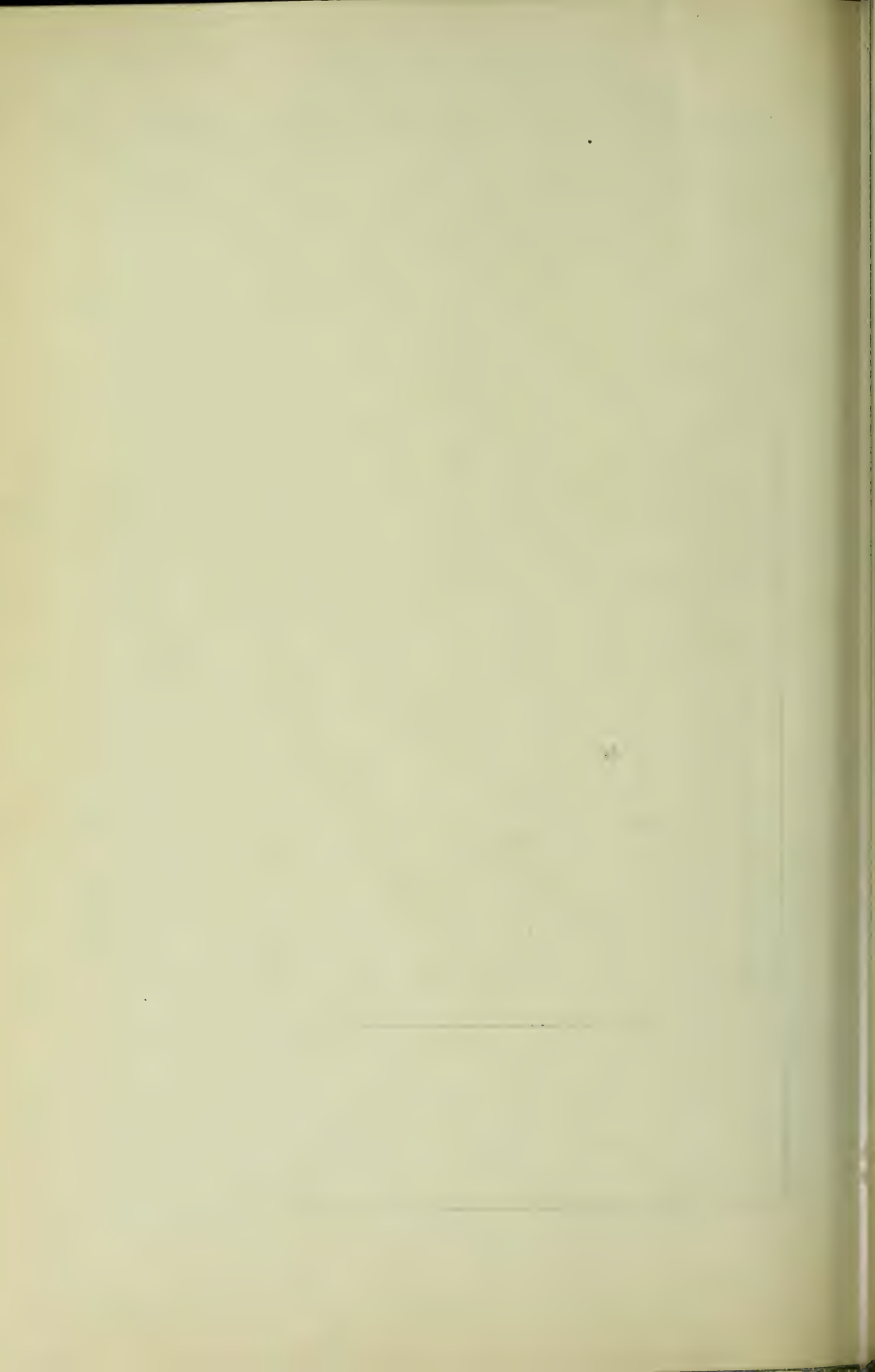
蝮傷上に同じ。

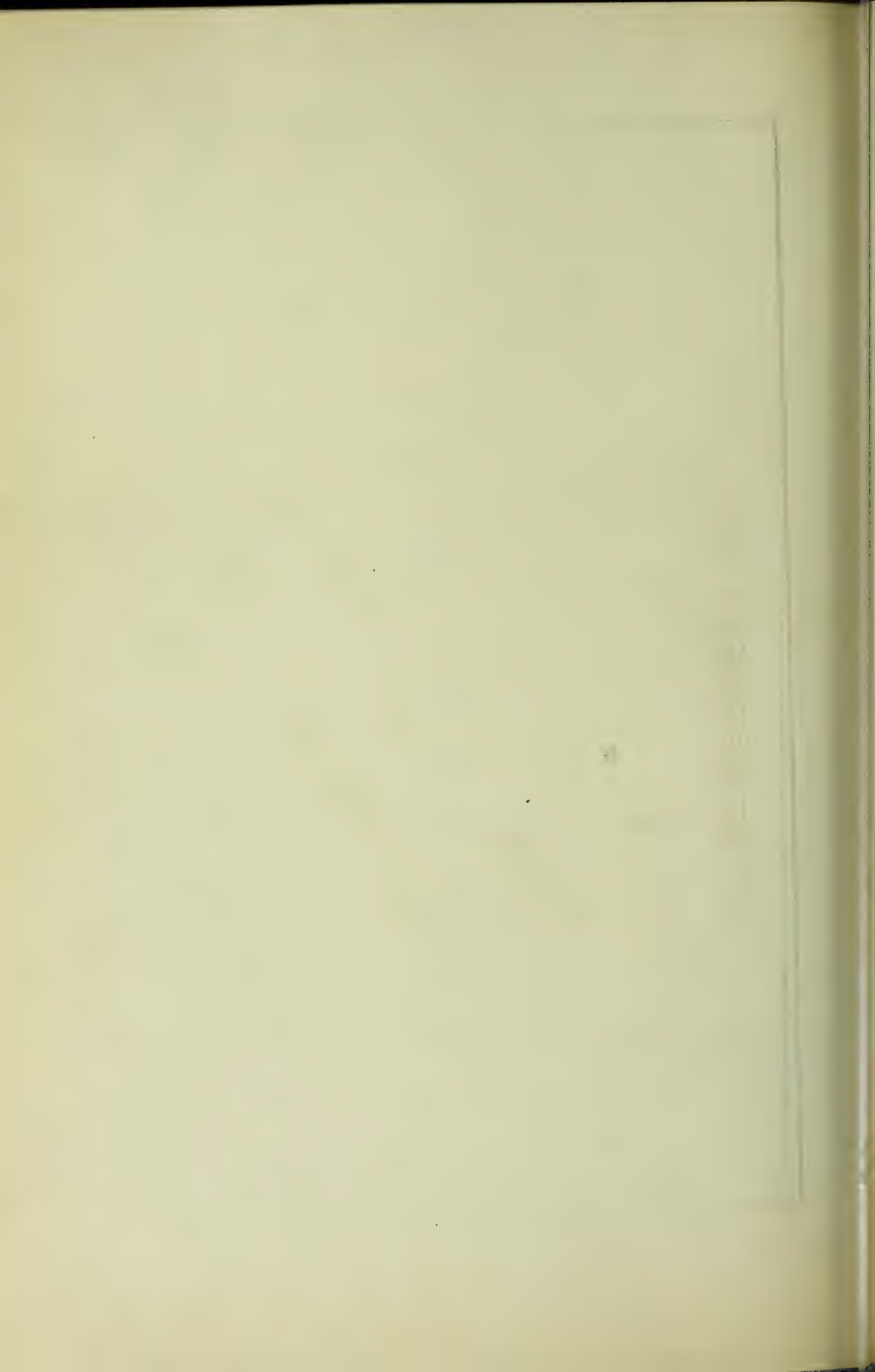
蝮蛇、蛇、蠍、毒蟲の傷には、五靈脂末を塗れば立ち癒える。(金匱釣玄) 【赤蛇の

夏子益奇疾方(方)】大風瘡癰【五靈脂末を油で調へて塗る。(摘玄方)】蟲、^せ癰^かの^せ瘡^か 【凡そ

かるが如き状態のものをもを血潰と名ける。五靈脂を末にし、二錢を湯で服すれば癒える。
 毛髮が堅直して鐵條やうになり、飲食は十分に攝るが、物を言はずは酔へ
 だ。【血潰病】凡そ人の中目の黒が渾り、物は平常のやうに正視
 せず、七日に及んで死せんとしたが、或人が五靈脂を上^にに搗つてやると直ちに止
 描【血潰の潰血】一患者が、一とあつた瘡をまたまた抓破して一筋の出血が止
 醋で煎して漱ぐ。【惡血齒痛】五靈脂末を米で煎して汁を含み咽む。直
 猪肝に藥けて毎日に食入、明目^(方)、輕^(方)、【重舌】五靈脂二兩を淘して末にし、米
 飲で服す。【目】浮腫^(方)、【腫】五靈脂一兩に麝香少量を入、飯で小豆の丸にし、一丸つづつ米
 【酒積黃腫】五靈脂に浸した蒸餅で梧子大の丸にし、飲で二十丸つづつを服す。【方】
 分を末にし、薑汁に浸した蒸餅で梧子大の丸にし、飲で二十丸つづつを服す。【方】
 甘草湯で服す。【瘰癧結】五靈脂を水飛し、半夏^{を湯に泡け、}等
 桃仁八箇、柏子仁半兩を研勻ぜ、水を滴して和して小豆の丸にし、二十丸つづつを
 し、二一丸つづつを米で飲す。【効驗】雄猪膽汁で黍米大の丸
 二一丸つづつを米で飲す。【効驗】雄猪膽汁で黍米大の丸

本草綱目禽部第四十九卷







[斑]

[鳩]

いふ。鳩の子をば鶺鴒鳩といひ、役鳩といひ、
 は(美)——といひ、荆鳩といひ、いひ、楚鳩と
 にして斑なきものをば雉といひ、鶺鴒——音
 大にして斑あるものをいつたのだ。その小
 を視鳩と謂ふとある。これはいづれも鳩の
 は、人是以て尸祝として尊組に登す。これ
 雉とは尾の短いものをいふ名である。古
 斑といひ、斑といひ、斑といひ、いふはそ
 錦鳩(方注) (鳩) 左傳註 (祝鳩時
 時

釋名

珍。鳩といひ、斑鳩といひ、斑鳩といひ、
 音は雛(スサ)である。錦鳩(方注) (鳩) 左傳註 (祝鳩時
 時

斑鳩 (宋嘉祐) 科名 Streptopelia decaocta (Frisvalsky)
 科名 Streptopelia decaocta (Frisvalsky)
 和名 斑鳩 (宋嘉祐)

禽の三 林禽類十七種

諸鳥有毒拾遺

鬼車鳥拾遺

鳥附子。

右附方、新九。

す。夜明砂末と共に等分を吹く【時珍】

を治す。耳鳴の腫がでて疼するもの、及び耳中に耳聾を生じたものを治す。

主 治

血 主 治 【熱飲すれば毒を解するに良し】【時珍】

性暖せずして物を食ひ、且つた毒を助けるからといふ。

を能く目を明にする。國老を養ひ、仲秋に年老の者に授くるに鳩杖を以てした。それは鳩の能く目を明にするのだ。獨り腎を補うだけではない。古に仲春に羅氏に鳩が飛ぶ。故に能く目を明にするのだといつたが、竊かに謂ふに、鳩は能く氣を益するものだから、故に能く目を明にするもの、錦鳩丸といふかある。倪惟賢は、斑鳩は腎を補する。故に能く目を明にするもの、范汪の方に、目を治するもの、斑鳩丸といふかあり、總

鳩ニ作ル。漢京原ニ歸チ

發 明

れを食へば人をして嘔せしめる【時珍】

氣を益し、陰陽を助ける【素問】久病虚損の人はこれを食へば氣を補す【素問】

主 治

味 氣 肉 鳩

或は雄は時に呼び、雌は雨に呼ぶといふ。

養れるとと對に呼びかける。故に巧にして危く、鳩は拙にして安しといひ、
 渡したけなで、往往にして卵が落ちる。天候が雨にならずと雌を追ひ、
 良鳩はその性格で孝行なものが、集作ることが描かれた。幾本に数本の枝を掛け
 て能く鳴く。それを媒として鳩を誘ひ寄せ得るのだ。これだけ薬に入れた就中
 あるが、いづれも善く鳴くかない。下頂に眞珠のやうな斑のあるものが大きい聲と
 ない。現に鳩は、小さくして灰色のものと大きくして梨花點のやうな斑あるものと
 時珍。曰く、鳩は能く鷹に化し、斑鳩は黄褐侯に化すといふ説はその出處が判ら
 ない。向に春秋に變化したのもなかつた。
 と、小なるものか、數色あるが、その用途は一である。嘗て數年間飼養して見
 宗。曰く、斑鳩には、斑あるものと、斑なきものと、灰色のものと、大なるもの
 に化して斑鳩となる。黄褐侯と青鶴のことだ。
 集解 西。曰く、斑鳩は處處にゐる。春分には化して黄褐侯となり、秋分
 據るに足らない。

男は左、女は右を帯びる。それを水中に置けば自ら能く寄り添ふのだといふ（隠器）

【主 治】 入をてて夫妻相愛せしめる。五月五日に收取め、各一本つ

して睡を少からしめる（証類）

【肉 氣 味 甘 温】 神を安じ、志を定め、人を

禽經には、又鳩は三子を生じ、一は鸚鵡と成る。『とある。

り、化して鷹となる。故に鳩に鷹の目はやはり復た鸚鵡となる。『とあり、

たにし止むとあり、張華の禽經にはやはり仲鷹が化して鳩となり、仲秋に鳩がま

後にし朝には上から下り、暮には下から上る。二月、穀雨の後に始めて鳴き、夏ま至

時。毛詩疏義に『鳩は大きい鳩ほど黄わづ色を帯び、啼鳴して

相呼ぶが相集らぬ。集をば作れぬもの多し、梅穴及びわづ鳩の空集栖んで子

を撃つ。

【集 解】

布穀曰、く、穀は鷓鴣に似て、尾が長く、牝牡飛び鳴いて、翼を以て相い拂

の鳥と鳥としてのである。本草にはその形状の説明がなく、後世一般にこの鳥に關する時珍曰く、伯勞、たもつを色をいつたもので、越と鳥の足は毛の音の詠である。それでは冬止む。それで月令に候時

集解

もの、伯越とはその色をいつたもので、越と鳥の足は毛の音の詠である。それでは冬止む。それで月令に候時

の鳴く家は凶事がある

の鳥となつたので、

した。それが後に化してて

言を信じてその子伯奇を殺

世俗に、尹吉甫は後妻の讒

は問題にないといふところ

とて、愚人は信するが通土

の聲を惡むたにいつたそ

を、殘害の鳥といふは、

鳴は『鵲』

〔勞伯〕 一鵲一



聲が暖かい。それと名としたのだ。陰氣に感じて動く殘害の鳥といふは、

時珍曰く、按ずるに、曹植の惡鳥論に『鵲』は鳴

名、鵲、代、表、的、勞、伯、の、鳥、也、
（一）（二）（三）（四）（五）
等、南、北、東、西、中、
ノ、等、

(ツッ)と名けるといふのであるが、月令には北方に起るとしてある。子規は北方の鳥
 説に據ると、音は鴨を鴨カイツ——音は第カイツ桂——と名け、伯勢を鳩——音は決
 るものだが、百舌には蛇を制する能力はないのだからその點が同じくない。顔氏の
 鳩カイツに似て、今この鳩が、しかし鳩は單獨に栖むことを好み、蛇は鳩が結す
 説に據ると今の苦鳥をいふらしい。張、許二氏の説に據ると今の舌をいふらしい、
 通じてその得失を考へるに、王氏の説は全然誤であつて議論の餘地がない。郭氏の
 といふ以上、必ず見ることの稀なものでないに相違ない。これに郭諸説を
 してあつて、各々異つてゐる。しかし舊に謂ふに、鳩は既にその鳥で季節を候ホウひ知
 は、鳩を鳥とし、李肇の國史には、鳩を布敷と、楊慎の丹鉛錄には鳩を鶻カイツ梨と
 楚詞註には、鳩を巧婦とし、陳正敏の應齋閑覽に、鳩を子規とし、王逸の
 『鳩カイツは鳩に似て、鳩が、鳩は隊が黒い』といひ、許慎の説文には
 形は鳩カイツに似てゐる。音と、白の鳩だといひ、張華の禽經には『伯勢は
 は、轉カイツ車カイツの發音と、郭璞の爾雅註に『鳩カイツは似てゐる』といひ、服虔は『伯勢
 知誠が、いかに、郭璞の爾雅註に『鳩カイツは似てゐる』といひ、

て小兒を鞭で速に物言やうになるといふは、萬物の鳴けないうちに獨りこの鳥だ
時。珍。曰く、按ずるに、羅氏の爾雅翼に『本草に、伯勞の踏んだ樹の枝

發 明

(嘉祐)

【小兒の發語の運びには、これで鞭で速に物言やうになる】

主 治

踏 枝

疳病。腹丁。小兒ノ疳病。小

疳病である。

鬼の名であつて、その病兒が鬼のやうに羸瘦するといふ意味だ。大抵これでも丁
鬼の蓋し母の親の情がその腹の子方にあるが、澤も肥るが、それが往來せぬから『とあ
くない。繼の子は物を食つても肥るに、男が蘭を種ると美しく育つが、芳し
時。珍。曰く、按ずるに、淮南子に「男が蘭を種ると美しく育つが、芳し
發 明

主 治

氣 味

ついていともはや能くそれに繼いでその病を發するものだ。北方の地ではまだこの病
り、他日相繼いで腹大なり、瘡えたり發つたりするもので、他の妊婦がそれにな
る。繼病は母が妊娠して、その兒に乳を飲ませ、その兒が瘡癩のやうな病にな
毛 平にして毒あり

主 治

氣 味

く睡を聞するや石やがが刺のいであ。瀝す聞血の『告白』を讀つて其の黒く

リ
ア
。今「戴」亦ト呼ビ爲勝ト註
下註郭鶴、木體ノ三書明ハ
(五)ナリ、項ガシラ戴、
勝、ナ後放ナ要メ、
頭木(重)村(四)

辰巳ノ

療するといつてある。山啄木なるものは頭上に赤毛があるのので、野人は火老鴉と
 脅至剛は現に聞、廣、蜀地方では、巫家がその符字を收めて驚を收め、瘡毒を治
 て食ふ。博物志に『こ』の鳥は能く鶯で字を畫いて蟲を自ら外に出させる』とあり、
 刺があつて、蠹を啄み、その端に針

舌は味く、長く、その端に針
 鶯は雛のやう、長さ數寸あつて
 みな青く、爪が剛く、鶯が利
 面は桃花のやうで、啄と足の色は
 雀ほど、大なるは鶯ほどあり、
 時珍曰く、啄木は、小なるは

〔鳥 木 啄〕



上に紅毛のあるものを、土人は山啄木と呼ぶ。『とある。

探薬が化けたのだといふ。山中に一種に、大いさの鶯ほどにして青黒色の、頭
 なるは雌であつて、斑あるは雄である。木を穿つて、蠹を食ふので、俗に、雷公といふ
 鳥。曰く、異物志に『啄木は、大あり、小あり、褐あり、斑あり、褐

集解

んこ（チヨバ）
 け（山）
 たい（啄木）
 い（鳥）
 わ

【附】方 舊新二。 或火老鴨湯（方）を追ひ、鹽を取【啄木鳥】の性、存し、酒を二錢、研合は、は、啄木一羽、癰瘡腫水【癰瘡腫】をす。

24 24 24 24 24

治すにあつては、
珍。曰く、
瘰癧、ひびきを
療へし、
瘰癧を治すに
は、いづつ、
瘰癧を制する
意を味する。

てその效果を收めるのだ。荆楚時記には野人は五月五日に啄木を吹つてて齒齋を以て發明

【瘰癧を治す】
風、瘰癧を治す
（珍）

肉 氣 味 【甘】平にして毒なし 【主治】瘡癰、及び牙齒の疳、腫、痛。

○
ㄴ
ㄴ
ㄴ
ㄴ
ㄴ

仙鶴せんかくに似て丹砂しんさを堆かたくす。『す』とあるが、その鳥だ。やはりもろもろ藥用に入れるが、その功果は、その如く、雅南の啄木は大きい。鴉の如く、頂は

鳥散といふが、あつて、煨いて薬に入れるとてある。調合する品目が多くあるが、金時珍曰く、聖濟總錄に、破傷中風で牙關緊急し、四肢強直するを治するものに

ある。

入るべきものであつて、諸風を治する鳥屎丸^{（いせりゅう）}中に用ゐることが和劑方に記載して記載がな。臘月に捕し、取し、翅、羽、足を全きものを泥で固濟して煨いて藥に

發明

【す】^{（嘉祐）}頭曰く、鳥鴉は、今一般に多く急風を治するに用ゐるが、本經は

る。又、小兒の癇疾、及び鬼魅^{（おに）}を治すを存し、末にして一錢づつを飲服すは、臘月に瓦瓶で固濟して焼いて性

主治

【癯病瘵嗽、骨蒸勞疾に

その瘴臭が甚しいのだ。

だ。蓋し昏るほどにはないにして忘せしめる。その毛を把つてもばさ



鳥

鴉

れて出るものだ。(開人規疹論)

猪血で和して炙す。大に丸にし、猪尾血と温水とに一丸つづつを溶化して服す。そ

、焼き、辰の日に灰に焼き、

方 附

(時珍)

【痘瘡の復陷】十二月に老鴉の左翅を取ら、

又、小兒の痘瘡の出ずして復た入るを治す【

後七枚を取って焼き、研つて酒で服す。吐血して癒えるものだ。】(蘇頌)記載は、

右七枚を取って焼き、研つて酒で服す。吐血して癒えるものだ。】(蘇頌)記載は、

主 治

主 治

主 治

主 治

研つて汁を眼中に注げば夜中よく鬼を見る(機器)

【土蜂瘻に灰に焼いて傅ける】(聖惠)

【卒に發した嗽には炙熟して食ふ】(肘後)

【風眼で紅爛せるものに點ける】(時珍)

【高處から墜下して瘵血が心を搶さ、顔色青く、呼吸短きは、

ふものは雄である。右が左を覆ふものは雌である。又、毛を焼いて屑にし、それを覆ふ。弘景曰く、凡て鳥の雌雄は區別し難いのだが、その翼の左が右を覆

發明

（珍）記載は附後にある。

【食】人は食つてはならぬ。【蘇頌】冬に至るに鵲を問ふ前に埋めれば時疫瘟氣を辟ける。【下】下る。【治】風、及び大、小腸澀、并に四肢の煩熱、胸膈の痰結を去。【投ずる】と解散するものは雄である。【別錄】（蘇頌）焼灰の汁を飲めば石が白

消す。焼いて灰にした中に石を

主治

に毒なし。日華曰く、涼

雄鵲肉 氣味甘し、寒

【鵲】



火が金に勝つ意味だ』とある。鵲は反つてそれを受けてて啄む。南子には『鵲が養を落とす』と頭が禿げるといふのである。淮

工頭圖し目眩するその病のこゝである。

頭に風眩を治す。煮炙して一回到り、先づ兩項邊から筋起し、直線に上頭に入つて江東の地方が瘧頭マラリアと呼ぶ風で、羽全部を食へば至つて一筋がある【癩癰】現〇

肉　氣味　【鹹、平】
しに毒なし
主　治

のももあるが、その眞舌は審でない。鄧樵がこれを「鄧樵」（てんせう）としてしたのは誤だ。

好んで家牀を食ひ、辟ひ易くして性の淫なるものだ。或は、鶯嘲は鶯勝だといふとも、この鳥は春來て秋去り、時珍。

あゝはては賞の。

『嘲鵲春鳴』
東都賦に
呼ぶ。

くへは行けぬ。北方の地で

の、深林中にゐる。

青毛冠あり、腰多く、事無色の

る。山鵲に似て小さく、尾が短く、

馬。錫。曰。く。鵲。は。南。北。の。綱。

集解



[illegible]

喙
 宋嘉祐
 の體は骨の發音が、ある種。種名和科名
 種名和科名
 Upupa epops saturata, Lönning.
 戴勝(科)

【しなせうしじょう、しん】
主 治

また三つ戴冠^{たいかん}・戴冠^{たいかん}・戴冠^{たいかん}はこれぞ喜劇^{きげき}の事だ。花勝を戴いたやうな文才があるのに、

(イ)木村(重)曰。西リ、羽冠アリ。頭利亞古ミナニヤシキ。支那ニ日カチニ渡ル。ト云フ。鳥鵲(ツグ)ト云フ。エヒ(チー)ト云フ。

口が赤く、小さい冠がある。春の末頃に鳴き、夜は曉方まで鳴き徹し、鳴くには必
 時。珍。曰く、杜鵑は蜀中に産し、現に南方にもある。雀の形状は、^{くろくろくろく}黒色だ。

ねば止まぬものだといふところから、嘔血云々の話が始つたのだ。

その真似をし、嘔血して死んだ』とある。これは世間でこの鳥は血の出るまで啼か
 行く時、その一羣を見えて退屈紛らしてある。異苑にはある者が山に入つて
 の聲を真似てそれに応へるに『と狗
 祥だ。その禁厭の法としては、ただ不
 真似ると血を吐く。』^{おや}前兆だ。その聲を
 その人に別離のある前兆だ。



望帝の身の上を思ひむしむとある。荆楚廢時記には『杜鵑の初聲を真先に聞けは
 蜀王本紀に「杜宇は蜀に君臨して望帝となり、その臣^僕の妻に淫したことから位
 を禪^つて去つた。その時、規鳥が鳴いて、蜀人は鵲の鳴くのを聞く位
 藏。曰く、杜鵑は鶴^や、いさ小なやうな小鳥で、鳴き呼んで已まぬものだ。

だ。れ、し、古は兄弟のやうだ。そのに、或はその背を摩するやうな痛みに發頭せしめて死ねぬが、或は雄は雌が丹に變つてゐるやうな解の性寒を母

石井正二の種々異なり

く、晴が金色で目が深く、上下的の

丹、吻、釣、尾、足、赤

で、性尤も恰利だ。いづれも味か？

りも大きく、緑より小なり、ハ、ロ

五色鸚鵡は海外諸國に産し、

し、大いさは母鶏ほどのやう。

栗の果實、其皮は蠟燭の如く。其の

數百羽喜鵲飛至地の上を

望
子
孫
昌
隆

いゝ、いゝ、焚書には臆^{おそ}いといつてゐる。

集解

○狂
○幸

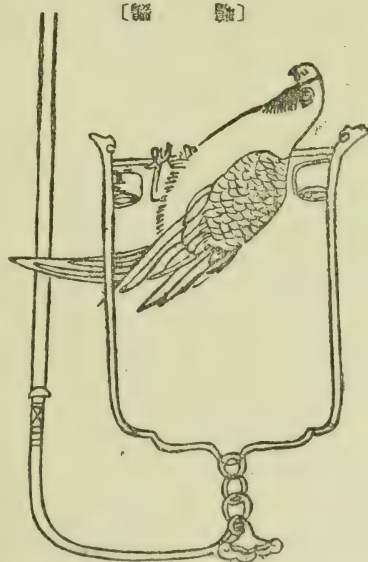
留米うさだ

三 木村(重)曰

(三) 木村(重)

1

• • • • •



【附註】

[卷]

[illegible]

(二) 鳴食(物)科英和名
Parrots and Macaws.
料及いんこ、及いんこ

あゝとて乃を見と、昔は一船にやほり常に食つたものなり。

發明 時珍曰、按ずるに、呂氏春秋に『肉の美なるものほは、櫛燕しげんの翠さい』と

一切つて炙き熱を貼る。【虫か】出盡して已む【(移)】

肉 氣 味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【瘡癰の毒あるものに、は、毒

集を著作して居る、他の鳥の巢に子孫を産む。冬期には蓄し藏れるものだ。

家ではこの鳥の鳴くので時候をえ見えてて農事着手する。ただ蟲、蠶、蜂、食ふものとして、ず北に向ふ。夏になると尤も甚しくしてて農事停止せず、その聲の哀切なものだ。農。

(一)ナリ。來リシヲ常ニ(重)ト云々。ル。

モ。一ノ方産ク、

肉ナリ。窓ハ腰二回シ尾

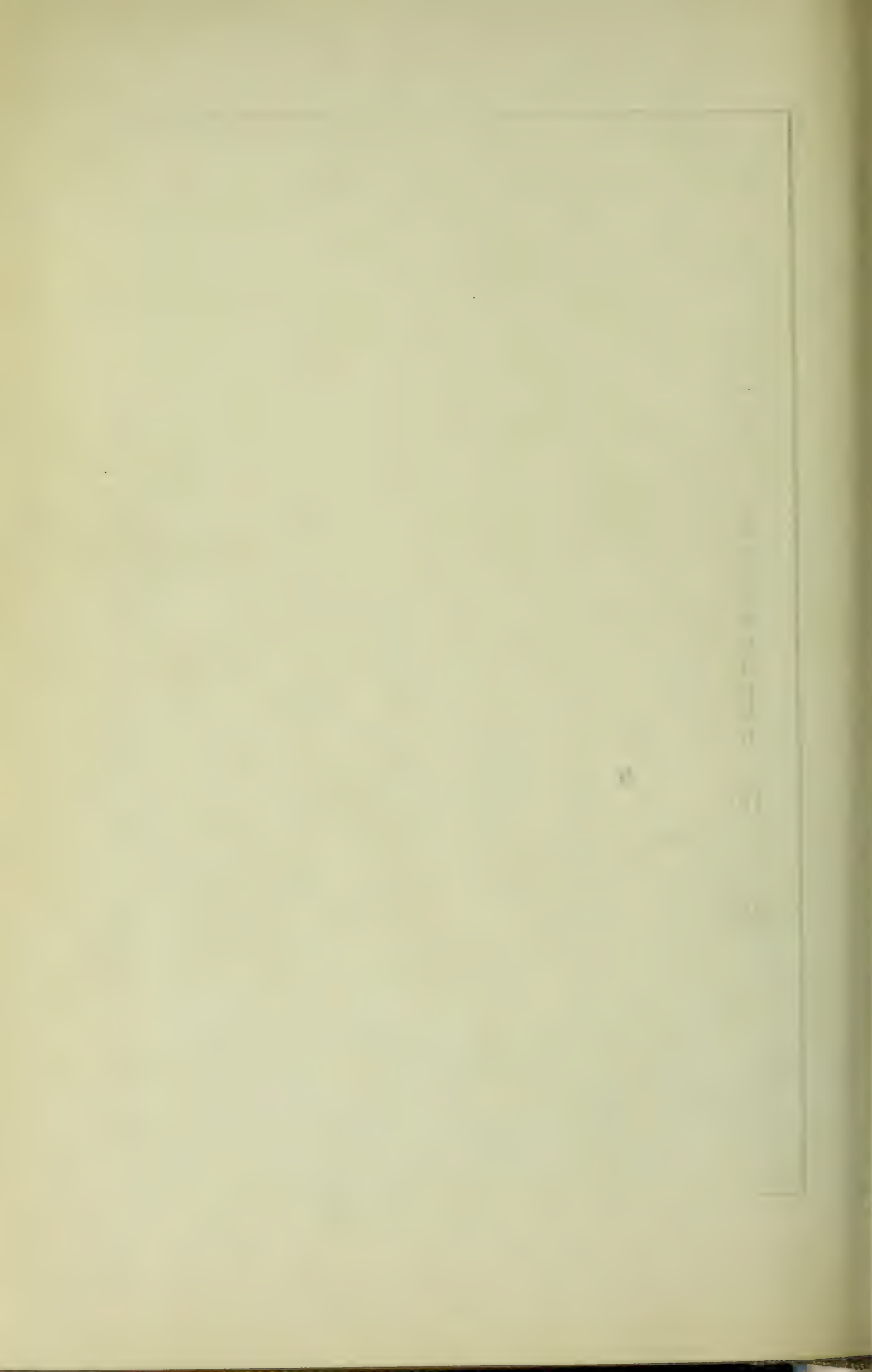
大いさ骨を垂たれては長一尺四五寸の端に始めては毛の雄雞こに似ては頭の上冠が右左の江の岫きう中に産する。大いさ骨を垂たれては長一尺四五寸の端に始めては毛の雄雞こに似ては頭の上冠が右左の江の岫きう中に産する。大いさ骨を垂たれては長一尺四五寸の端に始めては毛の雄雞こに似ては頭の上冠が右左の江の岫きう中に産する。

頂と尾とに分縫がある。よく人間の言葉を真似し、音が頗る重た。熟雞すす飯
 黄で、人のやうな舌、人のやうな目、目の下から頸うてつて深黄の文があり、
 ほとんど紺黒の色だ。臍を夾はさんで黄肉冠があり、人の耳のやうであり、味は丹く、
 は外國音のみである。嶺南の容管、廉、邕ようの諸州の峒中に産し、大いには鸚鵡はくと
 附録 秦吉了しんきりょう 時珍曰く、即ち了哥りょうかのことだ。唐書鳥結遊鳥と書いてある

る『とあるが、これはまた別の一種の相違ない。秦弓しんきうといふ鳥鳳きうほうといふ皆人言みなひとごを能く

單として變じなす。海中正の倦遊録に『海中に魚を能く變體に變化す』

(五)木寸(夏)日、



陳氏はそれを鳳髓で作るとした。要するに、いづれも妄談であつて、深く深く問題にする公の炮炙論に『張翳を折れたる血に遇へば初め如くなる』『とあるのだ。故に雷地ではあるまい。續紋膠は、洞冥記では覺血で製造するものとなつてゐる。』故に雷民の食するもの。だ』とある。『と、それを産する土地も別段不思議な土時。珍。曰く、按ずるに、呂氏春秋に『流沙の西、丹山の南に鳳鳥の卵がある。』

製造したものといふが、それも怪むに足らないであらう。

息地があるものと思はれる。漢の時代に朝廷に貢納したた續紋膠^(五)は鳳の髓を煎して竹の生えた處に鳳がゐると限らないのでつて、恐らくこれは鳳には特別の棲然の現象で、理解では判らない。現に鳳がゐるやうなものが、これに生えてゐる物と限らず、地中に臺が出来るといふやうな道理はなさうなものでない。だが、これも物の所有する所かし、鳳は梧桐以外には棲まず、竹實以外を食はずといふから、たゞ下に土を三尺掘つて取るのである。形状は圓石のやうで白く、卵に似たものだ。場所靈鳥ではあるが、時にその嚴な姿を現はすやうで白く、卵に似た場所とした風藏。曰く、鳳凰の脚下の石のやうな白いものを鳳凰臺と名ける。風

發明

ノ字アリ。大觀二年。膠下即

未詳。沙地。北漢ノ山ノ鳳ノ卵。流沙ハ西北ノ山ノ

上風に鳴いて、『孔雀』とある。『孔雀』は雄雌があるが、生殖を行は
 北戸録には『孔雀は交尾せぬ。聲や影で相接して孕む。或は雌が下風に鳴き、雄が
 唱ふと舞ふ。嫉妬深い性質で、色模様の衣服を著たものを見る必らず啄む』とある。

餌にして飼ふ。人間が手を拍つて歌を
 使ひ、或はその卵を捜して取つて雛に
 だ。山間の住民はその雛を飼つて
 する。その金翠が忽ち色か褪めるもの
 物にする。その場合鳥が切るので、顧
 る。またその尾を切り取り、それを贈
 或は暗にその通るの狙つて捕獲し、
 南方の地では、その時往つて捕獲し、
 山に棲んで、雨が降ると
 圓文があり、錢のやうな五色の金翠が相繞つてゐる。その鳥自身にその尾を愛し、



孔雀

[illegible]

あるほど、価値はなない。

孔

集

(別錄下品)

科廣和
名名名

~ 2 8 ~
Pavo mut
キ, 2 (キ)

科(雉) *Pavo muticus*, Linne.

名
錄

越鳥

。○
。○
。○

北、く日経報。

とは大の意味である。李昉は南客と呼んだ。梵書

○ ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

集解

○喜
○也

廣(二)

の諸州に産する。方家では用ゐることが稀だ。

日華

文(二)

○ 2 2 1 2 2

劍南(四) には とも は ち か つ 。

○時○日○

按

南方異物、

志に『孔雀は（五）交趾（六）の羅の諸州に甚だ多く、

八
里
石
印

上ノ本

20828

大いふは鷹ほど、高きは三四尺、鶴ほど位の高き

、
6
Φ

は
細
く

背が、
隆たか、
頭

に長さ一寸ばかりの三本の毛を戴き、數十羽の暮つ

四、
、
、
、

陸 21 樓

廿二日
月
、
、
、

そゝて『都護』は、その和を尊ぶと

卷二十一

三〇

尾が短く金

癸卯、五月、雄三はな、
 五月、な、

三三三

尺の長

21
21
、
9
24
21

は毛が脱けて春になると復た生え、背から尾まで

大(ル) 空(ヲ) 青(サ) ト ハ 高 遠 子

中の物を見得る。烟で薬するところを忌む【藥性】

碧雪(五)

睛主 治

乳汁に和して研り、一日三回、眼中に注ぐ。三日にして

腎及瓜主 治

【五痔、狐魅には、灰に焼いて水で服す】

【藥器】

焙じ、川芎一兩と末にし、三錢を酒で服す。【藥奇】

附方

【頭目、虚風、車風、一箇、即ち麝頭である——を毛を去つて

を食へば野狐の邪魅を治す【藥器】

頭主 治

【五痔には灰に焼いて飲服する【藥性】】

【痔瘻を治すには、一箇を灰に焼いて

肉氣味 缺主 治

のは飛ぶと急なり『

長きものは起つて運く、六翮(くわく)短

眠り、木に集ふものは常に立つ。【好く



【鷹】

作。本(四) 二鶴チヲ鶴

ス。北ノ(三) 魚ノ類。東ノ北。種族。胡。地。滿。洲。以。指。以。註。部。無。見。三。魚。類。發。海。ノ。鰐。鰩。見。

これれを察するは易ししとせざんとて、これ調ふは實に難し。黄は以て熱を取、酒は雌は體大に、雄は形小なり。と云ふ。二。周にしては鶴となり、三。歳にしては蒼となり、四。三。歳にしては雄なり。黄くしては鐵の如し、毛表厚く改つてその色常なく、實に生じて西に就り、總號しては黄點漆の如く、大に文は鶴の如く、細斑は縹に似たり。身は重くして金の如く、爪は剛び、背は利に同じく、脚は荆刺に等し。或は白くして散花の如く、或は黒くして貴び、金方の詳叙してあるから、左にその概要を掲げる。に類する鳥は夏の末期に擊つことと習ひ、秋の中期に鳥を祭する。隋の魏彦深の鷹賦ぞ。使用して取る。この鳥は鳥の中での疏拳なもので、鷹と云ふもある。をものがこれに次ぐ。北方の地では多くを採取つて飼養し、南方の地では八九月に困もの時。曰。鷹は遼海に産するものとし、北地、及び東北胡のひは、大なる鷹とし、小なる鷹を鶴とす。焚青には、鷹に在ては鶴といふとあり、あこの意味だ。耐雅には『北に在ては鷹といひ、南に在ては鶴といふ』とあり、はにしてはかき集といふ、大にして鷹するものはかなとて、鷹するものはかなとて、鷹するものは

【附方】 黃一、二、三、四。 瀉【奶癖】 凡そ小兒の腹に何物か硬いものがあるやうなものは、俗に奶癖と名ける。胎前密陀僧一兩、舶來の硫黄一分、丁香ちやうかう十二箇を末にし、一字一ツの三歲以上は半錢を、乳汁、或は白麴で調へて服す。い

九、大觀二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

て喜にして用ゐれば效がある。

弘○景○曰く、軍用としてば、癩癩をうる効能がなはい。魚の屬をを令せ

人面や
虫さ
ん

【乙】江乃歸

面皮、野干、歸

作儿。大觀二木子飲二

[illegible]

酒ニ作ル 大觀ニ惡

主治

目
氣味
【微寒にしこ小毒あり】

二作心經。サニ別錄

(五)

毛 主 治 【酒を煮て汁を飲めば直ちに酒を止めるやうになる】

隨て食前、食後を分つ【時珍】

骨 主 治 【傷損の接骨には、灰に焼いて錢をつつ酒を服用す。】軍部の上下に

吳王 昌

集解

時珍

尾上白の白もさきものを白と名ける『とある。

上を翔し、扇つて魚を出からずから波といつたのだ。禽經には『王唯は魚鷹である。水を視るこ唯健だかといひ、能く穴に入つて食物を取るから下短鳥といひ、



〔鵟〕

——鷹魚——

氏はこれを柱としたりが。いづれも誤だ。禽經に『鳩は三子を生ま、一は鵟鳩と黄鳥である。肉は腥惡で食へない。陸機はこれに驚かし、揚雄はこれを白鷹とし、黄の關たる鳩、河の洲に在り』とはこのふ。やう蛇をも喰ふものだ。詩に『關て食ふで、江表地方では食鷹と呼てゐる。能く水上を翔して魚を捕して翔けるが、交尾が畢れば處を異にの各別の尾を獲る。交尾には幾んへて物を慕へるが、雄の雌の相携して険しくつてゐる。雄と雌と深く鷹に似てゐるが、黄色で、目が深く

た。これは人張氏は朝權を專にし、帝に進めるに、都度鷹をその中に入
 れてある。』とある。『たといふたのもめし、健忘なく酔ひ、長く酔ひ、
 氣味【鹹し、平にして毒なし】時珍。』

ぬ。古の方頭、面を治るに、酒に鷹頭をいふがある。

である。これを用ゐるには、微し炙いて用ゐるべし。鷹のついたものは用ゐられ
 等。雄の一方が勝れてゐる。か、宜敷い、雄の一方が勝れてゐる。等

修治

と鷹すといふ。これはいづれも殺中仁にあるものだ。

撃たず、隼は胎ん、隼は撃たず、鷹は鳩を握ると目から暖めてやつて、鷹方になる

あるものだ。故に鷹は卵を抱いてゐる。

指したものだ。隼、鷹は鷹であるが、義

鷹となる。『ある。』いづれもこの鷹を

と、なり、鷹が布殺となり、布殺が復た

鷹となる。『ある。』とあり、莊子は『鵲が

化して鳩となり、七月に鳩が變化して

—鷹雀—



主治 【法】家の用ゐる材料にする【時珍】

て性を存して酒で服す。(便民食療)

【風塵弦運】大頭塵を閉め殺し、毛を去つて煮て食ひ、骨を焼ひ

(時珍)記載は陰毒方にある。

肉 氣 味 缺 主 治 【瘰癧は、一羽を毛、腸を去つて油で燻て食ふ】

三ノノ

耳小、リ、村(重)日は、
 北、中、支、那、日、本、
 色、彩、化、體、ニ、
 耳、小、リ、村、(重)、日、
 耳、小、リ、村、(重)、日、

鴉(二)

拾遺

科名 學名 和名

鴉(二) 鴉(二) 鴉(二)

Otus sumia japonicus, Temm. at Schleg.

科名

釋名

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

國史(鴉) 漢書(鴉) 拾遺(鴉) 訓狐(鴉) 流離(鴉) 鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

鴉

目 主 治 【吞めば夜間鬼物を見るやうになる】【藏器】

それで起さるものだ【時珍】記載は雲岐子保集にある。

頭 主 治 【瘡の黒陷には臘月の二一匙つづを酒で服す。】【藏器】灰に焼いて酒で服す。

で固濟して煨いて性を存して末にし、一匙つづを酒で服す。【書域神方】

と名けるがある【食鵲鳥のまだ毛の生えぬもの一対を取り、黄泥

附 方 新 二 風癰 風癰 風癰 實鑑第九卷に見えて見ると神應丹、怪神散

【風癰、食病】【時珍】

肉 氣 味 【甘し、温にして毒なし】 主 治 【鼠癰には炙いて食ふ】【藏器】

とある。

鳩なにかも知れぬ。淮南子には「鵲互を投ずると梟が鳴き止む。性が相勝つのだ」

食ふといふのだから、鵲はくんで育てることになる。それと食はれぬものは

て得ないものだ。鵲、驢のやうである【とあるか、しかし梟は成長すれば母を

とが明瞭だ。又按ずるに、郭義恭の廣志には「鵲は楚鳩が生むもので、はくみ、育

もよく働く【とある。これ等の諸説を綜合して見ると、鵲、鵲、訓狐の一物なるこ

【時珍】

異つたところがない。桂林地方では各戸に網で捕つて置いて置くが、狸より鳥鵲などといふ。鳥鵲は北方向で、害夜飛んで、害夜を食へる。劉向の書に『鵲は北方鳩は美味で、羹に入れば凶事がある。買証のある鵲に、陸機詩には『鵲は大い鳩は名けるものがある。楚地方では鳩といふ。』とある。盛弘之の荆州記には『巫縣には雌雄の鳥で、栖む地域から出ない。』とある。それで土俗にかく名けたのだ。遠く飛行し得ず、そのとある。いづれもこの物を指したのだ。按ずるに、巴蜀異物志に『鵲は小鷄ほど涼録には『張天錫は「北方の美なるもの、甘香、鷄、革くわだ」といつた。涼録は側薄弱な分を指したのだ、莊に『鵲を食はす』とあるで、古代には多くこれを食つたのだ。故に禮に『鵲くわを食はす』とあるで、鷄は猫の目のやうになり、醜くわなる、その聲はそれ自身を呼ぶやうに聞え、好んで桑椹さんじを食む。だが成長すると醜くわになり、頭は鷄のやう、食むに幸ひ胡と呼んでゐるもの、だ。處處山林に時としてゐる。幼い可愛い

リ
 一足。相過歩ト
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

くと石はみな黄爛する。あらゆる蟲はこの鳥が水を飲んだ處で吸へばみな死ぬ。た
 崩れ蛇が出る。蛇はこの鳥の口に入ると直ちに爛れに著、養、尿が石に著
 石に蛇がゐるのを知ると、馬歩して禁ひする。須臾にして木は倒れ、石は
 運日か鳴けば晴れ、陰諸雨が降る。蛇、及び橡實を食物とするもので、木や
 啄は赤く、目は黒く、頸は長さ七八寸あり、雄を運日と名け、雌を陰諧いんかいと名ける。
 に似て大ささい。形狀は鴉のやうで紫黒色。
 時。珍。曰く、按ずるに、爾雅鵲に、『鵲は鷹
 めに。註。されたのだ。
 なものなどは更に無い。陶氏は何か人のた
 即ち鳩、一名同力鳥だといふ。孔雀のやう
 してある。交、いは、鳩、方でもや、鳩、日、
 長く、喙赤く、蛇を食ふといひ、説文、廣雅、淮南子には、いづれも鳩ついでを鳩日と
 に畫けば人を殺すなどいふは、や、は、り、無根の妄説だ。郭璞は『鳩は大い、鵲ついで、頭、
 あ、の、鳥、か、と、肯、た、う、その肉は腥く、有毒だから、啖ふわけに行かぬ。羽で、酒の上



〔鳩〕

夫はこの集のある樹を見るとき避けて伐つて伐つて能く虎を役^かつて人害を害はる。口徑が數寸あり、十^き聖^き樹^きを穿^きつて集を作る。その集は大いさ五六升入れる。大いざは鳩ほどで、色青く、に、干實の搜神記に『越地の深山に治鳥といふが時^{とき}。珍^{めづ}く、按ずるに、

集解

治鳥綱(目)
 科名和
 名名未
 詳詳未

るものだ。

時^{とき}。珍^{めづ}く、この鳥は雌のみで雄がない。七八月に夜飛んで人を害する。就中毒あ

救日弓、救月の矢を以て天鳥を射とあるはこれの鳥だ。

疾を病むものだ『とある。荆州^{しんしゅう}に多くゐる。また鬼鳥ともいふ。周禮に、庭氏ははならぬ。この鳥が夜中飛んで来て血を點^しけてて^し誌^しにする、その見が驚^{おどろ}欄^{らん}、及び痔取り、それ^{それ}を養つて己れの子とする。凡そ小兒のある家で、は夜間衣類^{いりょう}を外に露^{あらわ}してをからこの鳥に化けたものだといいこことだ。故に胸前に兩乳があり、喜^{よろこ}んで人の子を

廣西^{くわいせい}、
地方^{ちほう}。今^{いま}、
廣東^{くわんとう}、

楚^そノ荆州^{しんしゅう}ヲ詳^{しやう}照^{しやう}。邵^{しやう}石^{しやく}侯^{こう}

カ。或ノ鳥ノ科ノ村ノ鳥ノ傳ノ説、
(一) 鳥ノ科ノ村ノ鳥ノ傳ノ説、

類ノ鳥ノ科ノ村ノ鳥ノ傳ノ説、
(一) 鳥ノ科ノ村ノ鳥ノ傳ノ説、

てあつて、毛を衣ては飛鳥となり、毛を脱いで女となる。これは産婦が死んで類集。解。曰く、能く人魂を収る。玄中に記に姑獲鳥は鬼神の類

この鳥は産婦が化けたもので、陰隠して妖をなすといふので右の諸名がある。一般に、中(記)鬼鳥拾遺(謡語)杜預の注(左傳註)鉤星歲時記(時珍)曰く昔は一般に、釋名乳母鳥(玄中記)夜行遊女(同)天帝少女(同)無辜鳥(同)隱飛(玄

姑獲鳥拾遺(遺)科名和名未詳
(二) 鳥名未詳(古稱)

けたときは、刮つて末に塗ればその場で癒える。

啄。主。治。これれを帯びれば蝮蛇に咬傷を受

毛。氣。味。大毒あり、五臓に入れば人を爛殺す(別錄)

の頂上に巢く。巢の下は數十歩の間草が生えぬところがある。

大木。州の黄山中に産する。形状は訓狐に類し、聲は腰鼓を撃つやうなもので、大木。尾角を服めばその毒を解すものだから『とある。又、楊廉夫の鐵崖集には『鳩は(鳥)は

モ、族ノ一重ノ木ヲハナシテ、後放チキ、
（三）木（重）村（重）放チ

附 録

木客鳥

だ。其に左に附録する。

おて正赤のものが元伯、正黒のものが銚下、緋色に赤の雞るものが功曹、左脇に白
唾ぶもだ。だ。翼が有り、綬が有り、綬が有り、その中でただ一羽だけ高く飛ぶものが君長、前に
どのもで、幾千幾百羽が羣をなし、飛び集るには節度があつて、俗に、黄白鳥と
いふは鵲ハダカは、大いさ、木客鳥は、異物志に、按ずるに、珍時。木客鳥は、大いさ、木客鳥は、
いづれも辰を天然に持つて生ずるもので、それをれ異なる形となつて現はれたも
れに、鵲ハダカは山都、山獺、木客が、鳥にも治鳥、山蕭、木客鳥がある。これ
一分の鏡印がある。南方の地でその策を食ふ。味は木芝のやうだ『とある。竊に
あるものも人郷といひ、樹の尾にゐるものも鳥都といふ。鳥都は左脇ハダカ下に濶ハダカさ二寸
し、それが化けてこの物になつた。それで樹の根にゐるものを猪都ハダカといひ、樹の中死
段、成式の西陽雛組にに『は俗説に、昔、ある人が洪水に遇ひ、都樹ハダカの皮を食つて餓死
に入つて火で炙いて食ふ。山に住む人民はこれを越ハダカ祖と祖といふ』とある。又、
時として或は長さは三尺ばかり人間の形となり、瀬ハダカに入つて蟹を取り、それを人家
し、人の家を焼拂ふ。白晝に見ると鳥の形で、夜その鳴聲を聞いていとも鳥の聲だが、

ことである。

怪氣の鍾る結果かやうに妖異なものとつて現はれるといふことは心得て置くべし。
 病の時、この鳥が砦石の處まで飛んで來た。すると同時に公主が薨去したといふ。
 兩翼があつて、飛ぶ有様は霍亂として並び進むものだ。『たとへば周漢公主
 がつてが、頭が九箇あつて、一頭の頸血が滴り、一の頸毎に
 たことである。形は野鳥に類して、赤く、身は圓箕のやうで、十箇の頸が環に
 密の齊東野語に、宋の李壽翁が長沙の地方長官をしたとき、曾てこの鳥を捕獲し
 ば出巢といひ、雨が降る。南から北へ行くをば歸巢といひ、雨が晴れる』とある。
 『』とある。便民圖には『冬期に鬼車が夜飛んで鳴く。その聲が北から南へ行く
 家に入つて人の魂氣を消させるところを好む。その血の滴つた家は必ず凶事がある
 ると飛んで鳴き、その鳴きながら飛び過ぎる聲は力車の鳴るやうに聞える。』
 録に『鬼車は秦中に産するが、蠻外に尤も多い。春、夏の頃に少し薄暗かりに表
 晝は旨し、夜は睽に見え、火光を見る。』と落す。按ずるに、劉恂の嶺表
 時珍曰く、鬼車は形狀は鵲のやうで、大なるものは翼の廣さ一丈ばかりあり、

類(一) 黃鵠ノ外ノ見(二) 秦ノ金鵲ノ註(三) 石見部ノ註(四) 石見部ノ註(五)

楚ノ荆楚ハ詳參。頭。部。石。炭。

て、その二鳥は似たものだからだ。鬼鳥と同名で呼ばれたのだ。

鶴の九首を見たとはいふはいつれもこの物語だ。荆楚時記にこれを姑獲としたりは誤
奇を異れりといふわけだ。白澤圖にある蒼鷺^{そうろ}には九箇の首があり、また孔子夏と奇
聞くと、ただ燈火を消し、門に狗の耳を振つて括り、腰にす。この鳥が鳴いて飛ぶのを
人が家に著くと凶事があるといふ。荆楚地方では、夜間に血を滴して、一箇の血
魂氣を取る。この鳥は昔は首が十箇であつたのを、犬にその一箇を嚙^かつて人
てゐるが異ふ。故奇鶴といつたのだ。

集解

妖鳥であつて、周易に鬼を車一と載すとある意味を取つて名としたのだ。似
似は。鬼車は。時珍。奇鶴（圖）白鷺。蒼鷺。

釋名

鬼鳥（拾遺）九頭鳥（同上）

鬼車鳥（遺）

科名和名未詳
名未詳

昭和六年二月十五日發行



刊行所

春

陽

堂

振替口本橋座東京一六七八
電話日本橋五・一四六・一七八

東京市日本橋區通丁三丁目八番地

印刷者

木

村

諭

吉

東京市日本橋區通丁三丁目八番地

發行

和

田

利

彦

東京市日本橋區通丁三丁目八番地

監修者
翻譯者
兼

鈴

木

眞

海

白

井

光

太郎

註頭
國譯本
草綱目
第十冊
非賣品

本草綱目禽部第四十九卷終

いづれも食つてはならぬ。食へば人を殺すものだ【

異し形、異しい色のもの、

四翼のもの、

六指のもの、

四趾のもの、

三足のもの、

玄鳥にして首の白きもの、

白鳥にして首の玄きもの、

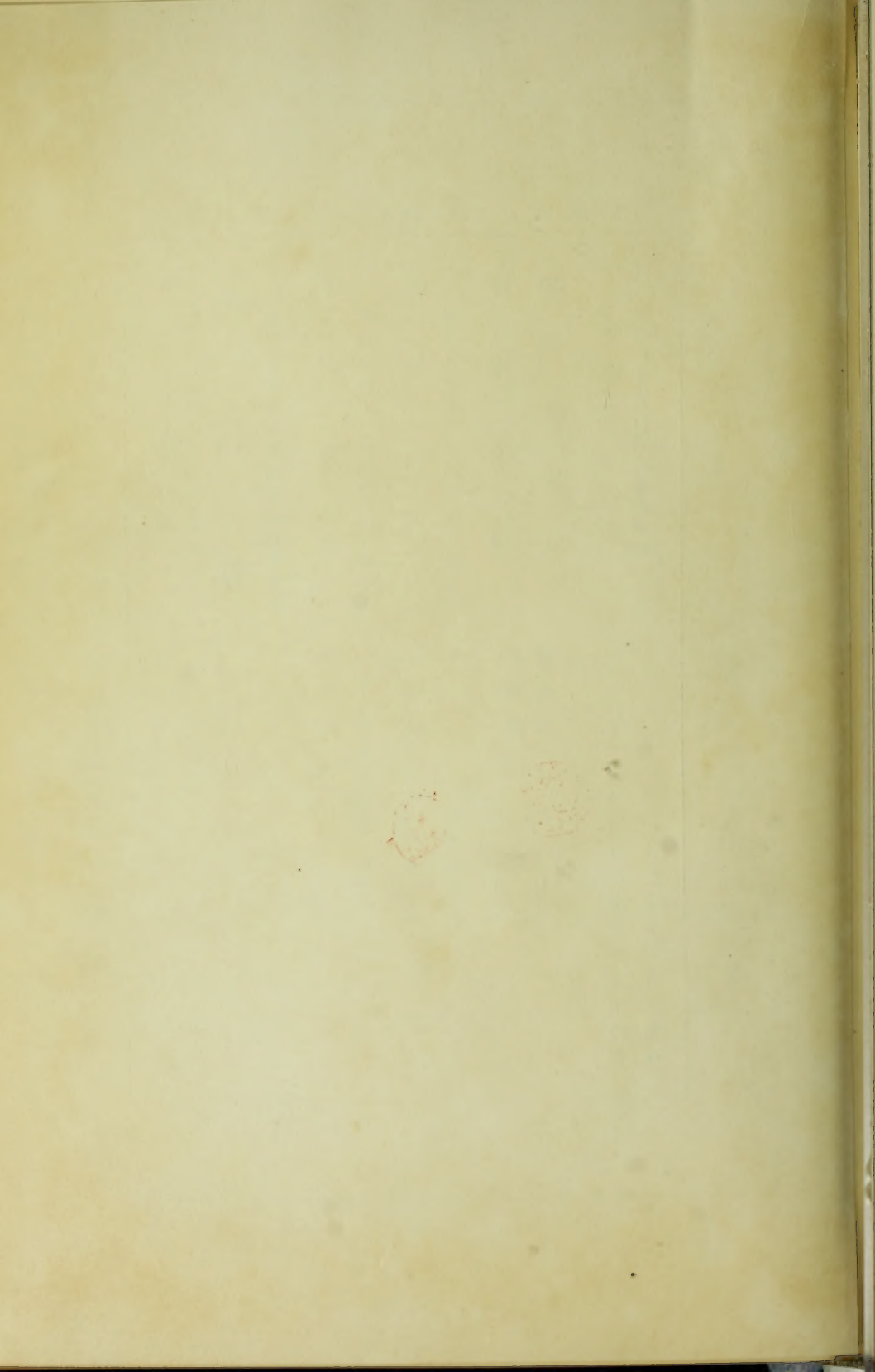
白死して足の伸びぬもの、

白死して目を開ちたもの、

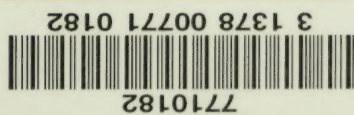
凡そ鳥は

諸鳥有毒(拾遺)





9414-E





京 山 版
出 陽 堂
東 春 堂

